

柴田町文化財調査報告書第4集

柴田町文化財調査報告書第4集

跡 跡 跡  
遺 遺 館  
水 前 館  
清 宮 西

—令和元年度：農業競争力強化基盤整備事業関連遺跡調査報告書Ⅰ—

清水遺跡・宮前遺跡・西館館跡

令和三年三月

令和3年3月

宮城県 柴田町教育委員会

宮城県 柴田町教育委員会

清宮西 水前館 遺跡

—令和元年度：農業競争力強化基盤整備事業関連遺跡調査報告書Ⅰ—

令和3年3月

宮城県 柴田町教育委員会



## 序 文

柴田町には豊かな自然の中、国指定天然記念物の雨乞のイチョウや県指定史跡富沢摩崖仏群、及び明治時代から調査が行われ学術史的にも貴重な榎木貝塚群など、歴史的な遺産が数多く存在しています。これらの文化財は地域の人々によって大切に守り伝えられてきました。また、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は95箇所が登録されており、たゆみなく続いてきた人々の営みの痕跡が、今もそのまま土中に眠っています。柴田町の有形・無形の文化財は町民はもとより国民共有の財産であり、次世代への継承は、今を生きる私たちに与えられた重要な責務であると考えます。

しかしながら、私たちの生活様式の変化とともに、文化財を取り巻く環境もまためまぐるしい変化を遂げています。開発行為が増加し生活の利便性が向上する一方で、数百年、数千年の間守られてきた埋蔵文化財が、破壊や消滅の危機にさらされています。

このような中、当教育委員会では、開発機関と協議を重ね、多くの方々の理解と協力をいただきながら、文化財の後世への継承に努めているところです。

本書は、県営農業競争力強化基盤整備事業のほ場整備工事に伴い、令和元年度に本発掘調査を実施した清水遺跡、宮前遺跡、西館館跡の調査成果をまとめたものです。

調査にあたりましては、地域の皆様や関係機関から多大なるご協力をいただきました。また宮城県教育庁文化財課からは、職員派遣による現地調査指導のほか、本書の刊行にあたりご助言を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

最後に、この成果が地域の歴史的解明の一助になりますことを願っております。

令和3年3月

柴田町教育委員会教育長 船迫 邦則

## 例　　言

1. 本書は、宮城県柴田郡柴田町中名生・下名生地区における農業競争力強化基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴い、令和元年度に実施した「清水遺跡」、「宮前遺跡」、「西館館跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は柴田町教育委員会が主体となり、柴田町教育委員会生涯学習課・宮城県教育庁文化財課が担当した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々および機関からご指導・ご助言、ご協力を賜った（敬称略）。

末永福男（浪江町文化財調査委員会） 宮城県教育庁文化財課

4. 本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の「柴田郡」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。
5. 本書で使用した測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第X系による。調査区の各測量原点は第III章に示した。なお、方位は座標北を表している。
6. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。

SI：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SX：竪穴状遺構・自然流路跡ほか SE：井戸跡 SD：溝跡

SK：土坑 P：柱穴・ピット SN：小溝状遺構群・水田跡

7. 遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

遺構全体図：1/700 各調査区図：1/250・1/300・1/500 竪穴建物跡・掘立柱建物跡：1/60

溝跡・土坑：1/60

8. 土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帳 1994年版』（小山・竹原 1994）を用いている。
9. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は1/3（一部1/4）で掲載している。
10. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、畠山未津留（柴田町教育委員会）、佐久間光平（宮城県教育庁文化財課）が執筆・編集した。
11. 本遺跡の調査成果については、現地説明会・遺跡見学会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本報告書がこれらに優先する。
12. 発掘調査の記録や出土遺物は、柴田町教育委員会が一括して保管している。

# 目 次

序 文  
例 言  
目 次  
調査要項

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 清水遺跡の発掘調査	4
第1節 調査地の位置	4
第2節 確認調査について	4
第3節 本発掘調査の方法と経過	6
第4節 基本層序	7
第5節 各区の発掘調査	8
1・2区 3・4区 5～7区	
第6節 小括	32
写真図版	35
第Ⅳ章 宮前遺跡・西館館跡の発掘調査	41
第1節 調査地の位置	41
第2節 確認調査について	41
第3節 本発掘調査の方法と経過	41
第4節 基本層序	44
第5節 各区の発掘調査	45
1区 2区 3区 4区 5区	
第6節 小括	66
写真図版	69
第Ⅴ章 自然科学分析	79
第1節 宮前遺跡出土人骨の鑑定	79
第2節 宮前遺跡出土炭化種実の同定	82

第3節 宮前遺跡における放射性炭素年代(AMS測定).....84

第VI章 総 括.....87

引用・参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

[第1章～第IV章]

第1図 清水遺跡・宮前遺跡・西館館跡の位置	1	第26図 SX308 穴状遺構平・断面図	21
第2図 清水遺跡・宮前遺跡・西館館跡と周辺の遺跡	3	第27図 SX308 穴状遺構出土遺物	21
第3図 調査区配置図	5	第28図 SX409 穴状遺構平・断面図	21
第4図 層序柱状図	7	第29図 SX411・412 穴状遺構平・断面図	22
第5図 清水遺跡の遺構平面図	9	第30図 SX412 穴状遺構出土遺物	22
第6図 1・2区の遺構平面図	10	第31図 SD301～SD303 溝跡断面図	23
第7図 SD204 溝跡断面図	11	第32図 SD301・302 溝跡出土遺物	24
第8図 SD205・206・209 溝跡、SK202 土坑断面図	11	第33図 SD305～SD307 溝跡平・断面図	25
第9図 SD205 溝跡出土遺物	11	第34図 SD401・402 溝跡断面図	25
第10図 SD208 溝跡断面図	12	第35図 SD404・405 溝跡ほか断面図	26
第11図 SE102 井戸跡断面図	12	第36図 SD404 溝跡出土遺物	26
第12図 SE203 井戸跡断面図	12	第37図 SK309・310 土坑断面図	26
第13図 SE210・213 井戸跡断面図	13	第38図 4区Ⅲ層出土遺物	27
第14図 SE210 井戸跡出土遺物	13	第39図 SX416 (水成堆積層)・SD417 溝跡断面図	28
第15図 SD101 溝跡断面図	13	第40図 SD417 溝跡出土遺物	28
第16図 SD206 溝跡出土遺物	14	第41図 SD304 溝跡断面図	28
第17図 SX109 窑地状遺構断面図	15	第42図 5区～7区の遺構平面図	29
第18図 SX109 窯地状遺構出土遺物	15	第43図 SD601・602 溝跡断面図	30
第19図 1区Ⅰ層出土遺物	15	第44図 SD701 溝跡断面図	30
第20図 SD209 溝跡断面図	16	第45図 SD703 溝跡断面図	31
第21図 SD209 溝跡出土遺物	16	第46図 SK702 土坑断面図	31
第22図 3・4区の遺構平面図	17	第47図 SE502 井戸跡断面図	31
第23図 SB413 捜立柱建物跡平・断面図	18	第48図 奈良・平安時代の遺構分布図	33
第24図 SI408 穴状建物跡平・断面図	19	第49図 調査区配置図	42
第25図 SI408 穴状建物跡出土遺物	20	第50図 発掘調査の経過	43

第 51 図 層序柱状図	44	第 68 図 4 区の遺構平面図	57
第 52 図 1 区の遺構平面図	45	第 69 図 4 区東の遺構平面図と西・北・東壁断面図	58
第 53 図 1 区西の遺構平面図・西壁断面図	46	第 70 図 4 区西の遺構平面図と北・南壁断面図	59
第 54 図 1 区東の遺構平面図・北壁 (SD101) 断面図	47	第 71 図 SK411 土坑平・断面図	60
第 55 図 SX102 土坑墓平・断面図	48	第 72 図 SD409 溝跡断面図	61
第 56 図 SD103 溝跡断面図	48	第 73 図 SD413 溝跡断面図	61
第 57 図 1 区の出土遺物	49	第 74 図 SN410 小溝状遺構群断面図	62
第 58 図 2 区の遺構平面図	50	第 75 図 4 区の出土遺物	62
第 59 図 SB203 柱穴断面図	50	第 76 図 5 区の遺構平面図	63
第 60 図 2 区西の遺構と北壁断面図	51	第 77 図 5 区東壁断面図	64
第 61 図 SE202 井戸跡断面図	52	第 78 図 SE504 井戸跡断面図	64
第 62 図 SD204 溝跡断面図	52	第 79 図 SD501 溝跡断面図	65
第 63 図 SD201 自然流路跡断面図	53	第 80 図 SD502 溝跡断面図	65
第 64 図 2 区の出土遺物	54	第 81 図 5 区の出土遺物	65
第 65 図 3 区の遺構平面図	55	第 82 図 1 区～5 区の主な出土遺物	67
第 66 図 3 区北・南の西壁断面図	56	第 83 図 宮前遺跡の範囲	68
第 67 図 3 区の出土遺物	56		

[ 第V章 ]

第 3 節 図 1 历年較正年代グラフ	86
---------------------	----

## 表 目 次

[ 第V章 ]

第 1 節 表 1 宮前遺跡の人骨鑑定	79
第 2 節 表 1 宮前遺跡 SK411 出土炭化種実	82
第 3 節 表 1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{14}\text{C}$ 補正值)	85
表 2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{14}\text{C}$ 未補正值、歴年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)	85

## 写 真 目 次

[ 第III・IV章 ]

写真 1 調査風景 (4 区)	6	写真 4 調査風景 (4 区)	43
写真 2 調査風景 (7 区)	6	写真 5 調査風景 (5 区)	43
写真 3 3 区東壁付近	7	写真 6 1 区東の北壁断面	44

## 写真図版目次

[第III・IV章]

写真図版1	清水遺跡付近の空中写真	35	写真図版9	2区(2)遺構	72
写真図版2	1・2区遺構	36	写真図版10	2区(3)遺構	73
写真図版3	3・4区遺構	37	写真図版11	3区・4区(1)遺構	74
写真図版4	4～7区遺構	38	写真図版12	4区(2)遺構	75
写真図版5	出土遺物	39	写真図版13	4区(3)・5区遺構	76
写真図版6	宮前遺跡・西館館跡周辺の空中写真ほか	69	写真図版14	出土遺物(1)	77
写真図版7	1区(1)遺構	70	写真図版15	出土遺物(2)	78
写真図版8	1区(2)・2区(1)遺構	71			

[第V章]

第1節 図版1	宮前遺跡出土人骨(1区SX102)	81
第2節 図版1	宮前遺跡SK411出土炭化種実の顕微鏡写真	83

## 調査要項

遺跡名：清水遺跡(8103) 宮前遺跡(8054) 西館館跡(8060)

遺跡記号：清水遺跡：SM 宮前遺跡：MM 西館館跡：ND

所在地：清水遺跡 宮城県柴田郡柴田町大字下名生清水

宮前遺跡・西館館跡 宮城県柴田郡柴田町中名生熊野・宮前

調査原因：農業競争力強化基盤整備事業(県営ほ場整備事業)

調査主体：柴田町教育委員会

調査担当：柴田町教育委員会生涯学習課 宮城県教育庁文化財課

調査期間・面積：

[確認調査]	①平成30年(2018)2月26日～3月9日	540m <sup>2</sup>
	②平成30年(2018)10月9日～10月29日	700m <sup>2</sup>
[本発掘調査]	清水遺跡 令和元年(2019)5月13日～7月15日	1,020m <sup>2</sup>
	宮前遺跡・西館館跡 令和元年(2019)10月1日～12月24日	2,855m <sup>2</sup>

調査員：[確認調査] ①(町)小玉 敏 水戸拓也

(県)佐藤則之 猪俣清和 鈴木啓司 山口貴久 佐藤 涉

②(町)大友 智 小玉 敏 水戸拓也 浅野章夫(県)山田晃弘 下山貴生

[本発掘調査] 清水遺跡(町)畠山未津留 岡山卓矢(県)山田晃弘 西村 力

宮前遺跡・西館館跡(町)畠山未津留 岡山卓矢(県)佐久間光平 梅川隆寛

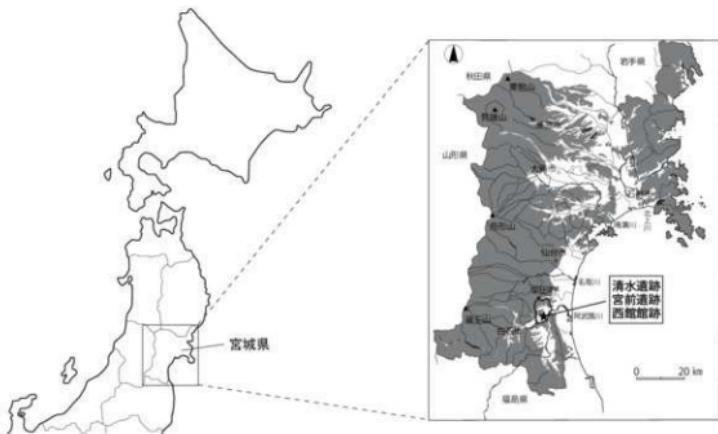
調査協力：宮城県教育庁文化財課 宮城県大河原地方振興事務所

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

今回の調査は、柴田町中名生・下名生地区における農業競争力強化基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴うものである。これらの基盤整備事業計画を受け、宮城県教育庁文化財課と柴田町教育委員会は、平成29年4月に計画地区での遺跡分布調査を実施した。その結果、埋蔵文化財包蔵地の未指定地である中名生・宮前地区の宮前遺跡・西館館跡の隣接地と下名生・清水地区で、複数の土師器片が見つかったことから、周辺地域に遺跡が存在する可能性が高いとの結論に至った。これらの調査成果を受け、宮城県教育庁文化財課と柴田町教育委員会が協議を行い、遺物の発見があった下名生地区では新たな埋蔵文化財包蔵地として「清水遺跡」（遺跡番号：8103）の登録を行った。

平成30年2月15日、中名生・下名生地区でのほ場整備工事の着手について、柴田町が協議書を宮城県教育庁文化財課へ進呈し、同年2月21日付（文第2714号）に確認調査対応との回答があった。これを受け、平成30年2月26日～3月9日および同年10月9日～11月20日に下名生・清水地区、上納地区、中名生・宮前地区の確認調査を実施した。その結果、下名生・清水地区と中名生・宮前地区の2箇所で古代とみられる遺構を確認した。

確認調査の成果を受け、柴田町教育委員会、宮城県教育委員会、大河原地方振興事務所の三者で遺構保存の協議を行い、やむを得ず遺構削平または保護層が得られない区域、仮設道路・小排水路・パイプライン等の計画ルート上については本発掘調査の対象とした。本発掘調査は柴田町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財課の協力を得て、清水遺跡は令和元年5月～7月、宮前遺跡・西館館跡は同年10月～12月に実施することとなった。



第1図 清水遺跡・宮前遺跡・西館館跡の位置

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 第1節 地理的環境

柴田町は宮城県南部、仙台市の南方約25kmに位置している（第1図）。町は奥羽山脈と阿武隈山地に連なる標高100～150mの山地に囲まれており、町域南東部の白石川流域に開けた船岡盆地と北東部の阿武隈川流域に開けた榎木盆地から成る。両盆地は白石川と阿武隈川によって形成された沖積地で、旧流路沿いには幾筋もの自然堤防が発達し、集落や旧街道はこれらの微高地上に形成されている。自然堤防の後背地はかつて谷地や沼沢地であったと考えられる。

また、船岡・榎木盆地は、縄文時代前期には海岸線が複雑に入り組む内海であった。奥羽山地から延びる上川名・入間田・葉坂・海老穴・成田などの丘陵は、かつての半島状地形の名残である。これらの丘陵部の露頭には現在も海蝕崖を見ることができる。縄文時代早期から中期にかけて、これらの丘陵上には多くの集落が存在しており、松崎貝塚、上川名貝塚、中居貝塚、館前貝塚といった「榎木貝塚群」が形成された。海退後の沖積作用により多くの縄文遺跡が地下深くに埋もれていると考えられ、金谷貝塚の南方200mの水田で、地下8mから縄文時代の櫛3本が出土した例もある。

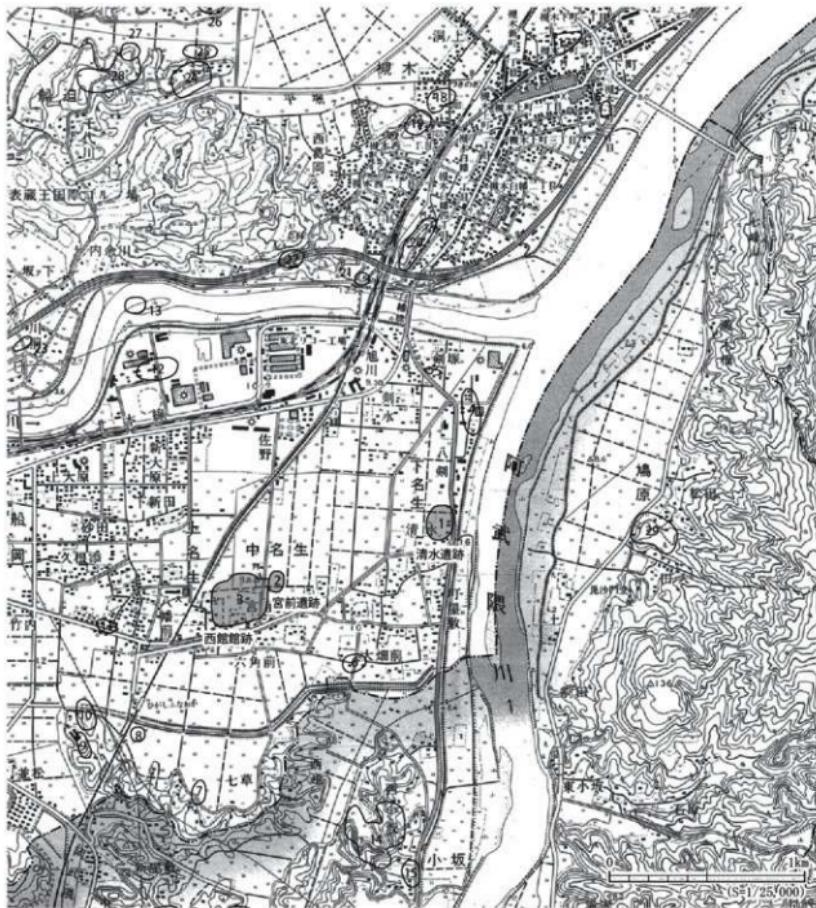
今回の調査地である清水遺跡・宮前遺跡・西館館跡は船岡盆地の南東部、阿武隈川と白石川の合流点に近い沖積地の平野部に位置する。榎木盆地と同様に、山地から平野部へ延びる丘陵は多いものの、榎木盆地に比べ確認されている遺跡の数は少ない。船岡盆地の平野部は阿武隈川と白石川に挟まれた肥沃な水田地帯であるとともに、長年にわたり水害に悩まされてきた歴史を持つ。調査地周辺の字名にも「沼田」、「土手外」、「剣水」、「中谷地」など水に関わる地名や伝承が数多く残り、水との関わりの深さを暗示している。いずれの集落も旧流路沿いに形成された標高9～10mの自然堤防上に連なっている。今回の調査地点はこの微高地から後背湿地に変わる境界に位置しており、調査で確認された遺構や堆積層の状況からも、長年にわたり微高地の居住域と低地の生産域との土地利用の使い分けが続いてきたことがわかる。

### 第2節 歴史的環境

今回の調査地が位置する平野東部を見ると、旧白石川河道によって形成された自然堤防が点在するものの、確認されている遺跡は少ない（第2図）。北の白石川、東の阿武隈川の流路に伴う後背湿地だったためと推測される。調査された遺跡も少なく、詳細については不明なものが多い。

調査地周辺を俯瞰すると、船岡平野の南側丘陵部に縄文時代～中世の遺跡が確認されていることがわかる。これらの一つである船岡追遺跡（10）では昭和49年に発掘調査が行われ、古墳時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を検出している（柴田町史編さん委員会編 1989）。同丘陵には他にも船岡追横穴墓群（9）、古代～中世の散布地である上名生追遺跡（8）、古墳時代とみられる登夫遺跡（7）、東端部に古代～中世の散布地である西田遺跡（6）が分布している。いずれも未調査であるため詳細は不明である。

次に今回の調査地を概観する。調査地は船岡平野東部の中名生、下名生地区に位置している。船岡



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1. 清水遺跡	自然堤防・集落	古墳			11. 小鷹山遺跡	自然堤防	集居地	古代		21. 寺山小山遺跡	自然堤防	廢山地	中世・近世	
2. 宮前遺跡	自然堤防・集落	兩ヶ・古墳・古代・中世			12. 開津山遺跡	自然堤防	集居地	古代	22. 十三塚	丘陵	集落		歴史的・文化	
3. 西館館跡	自然堤防・城壁・集落	古墳・古代・中世			13. 日出川(虎之瀬遺跡)	河川・池	集居地	平安	23. 石ノ森跡	丘陵	古文化		歴史的・文化	
4. 小坂守御跡	砂利平野・集居地	古墳・古代			14. 小坂城跡	丘陵	城跡	中世	24. 町塙跡	丘陵	集落		歴史的・文化	
5. 司馬文正塙・古墳	砂利平野・門構	古墳			15. 十ツ日塙	丘陵	日塙	歴史的	25. 旧ノル人遺跡	砂利平野	古文化		歴史的・文化	
6. 内山遺跡	自然堤防・集居地	古墳・苗條			16. 東道跡	砂利平野	集居地	古代	26. 中ノ山遺跡	砂利斜面	古文化		歴史的	
7. 登人遺跡	丘陵地	古墳?			17. 人熊野守宇遺跡	自然堤防	城跡	中世	27. 旧ノルC遺跡	丘陵	古文化		歴史的	
8. 上ノ名前遺跡	砂利平野・西山地	古代・中世			18. 新御守遺跡	砂利平野	集居地	古代	28. 旧ノルB遺跡	丘陵	古文化		歴史的	
9. 和田山城跡・古墳	丘陵斜面・穂ノ谷	古墳・平安			19. 行光寺跡・横山塙	丘陵	被覆・聚落	平安	29. 墓塚城跡	丘陵	城跡	中世		
10. 和田山城跡	丘陵	集落			20. 八幡塙跡	丘陵	城跡	中世						

第2図 清水遺跡・宮前遺跡・西館館跡と周辺の遺跡

盆地部を流れる白石川に沿って、上流から上名生・中名生・下名生の地名が分布する。古代・中世の区画との関連性が指摘されるが、これらの地名の由来を明確に示す資料や遺跡は今のところ確認されていない。清水遺跡（1）は阿武隈川と白石川の合流点に近い下名生に位置している。平成29年の踏査により発見され、新しく登録された遺跡である。今回の調査では近世の井戸跡や溝跡、古代の溝跡、洪水との関連性が考えられる水成堆積層を確認した。清水遺跡の北約500mには、平安時代の遺物散布地である八幡堂後遺跡（4）、北約800mに古墳時代後期の町史跡剣塚古墳（5）が位置するが、いずれも未調査である。

宮前遺跡（2）は西館館跡の東側に隣接する古代の遺物散布地で、詳細は不明とされてきた。今回の調査で遺構の密度は低いものの、古代の土坑や竪穴状遺構、耕作跡を確認し、遺跡の範囲がさらに東に伸びていることを確認した。洪水によるとみられる水成堆積層が分布する。

西館館跡（3）は今回の調査地の中で最も新しい時代の遺跡である。旧河川の自然堤防上に位置し、遺跡の規模が東西300m、南北200mに及ぶ中世の居館跡である。敷地を取り囲む水濠や敷地内を区画する水濠、土塁が現在も確認できる。今回の調査では城館跡の北側水田を調査し、古墳時代中～後期の土器を伴う溝跡や井戸跡、近世の水田跡を確認している。

縄文時代の遺跡が集まる棚木盆地に対し、船岡盆地は古墳時代から中世にかけての遺構が主体となっている。

### 第III章 清水遺跡の発掘調査

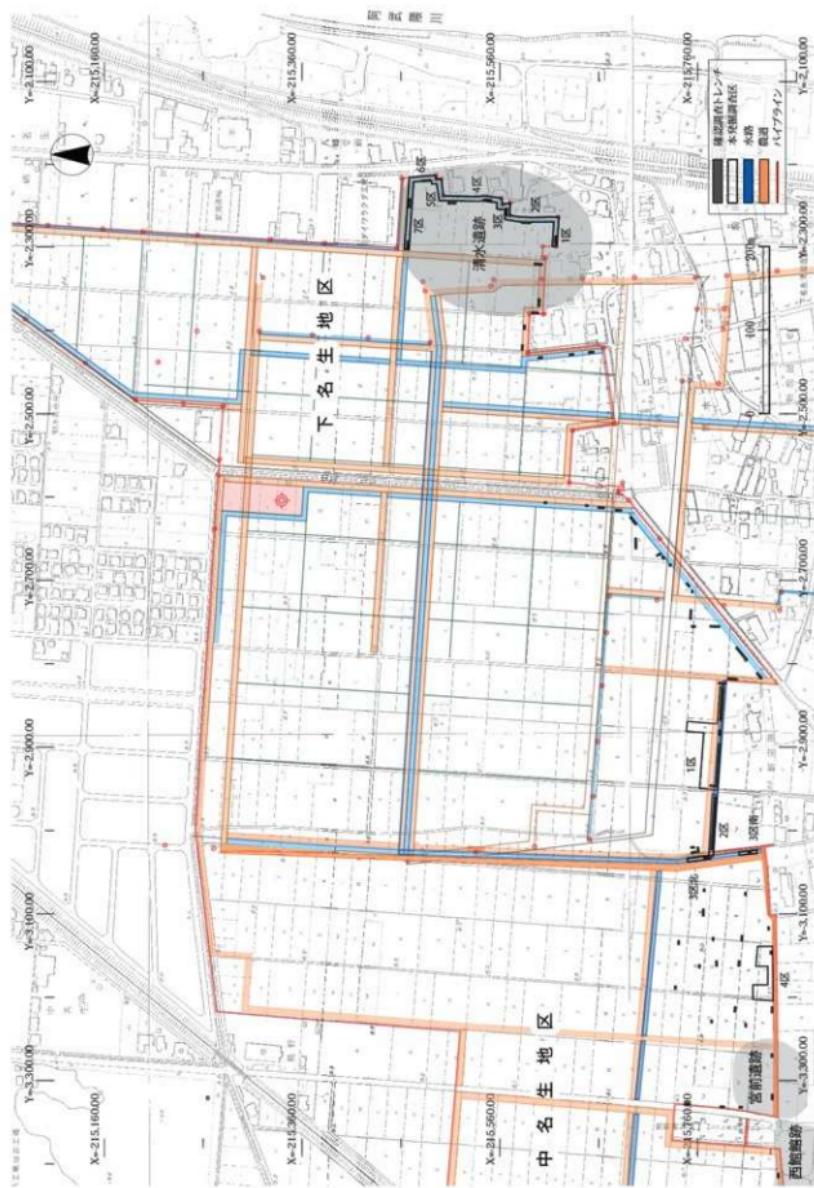
#### 第1節 調査地の位置

清水遺跡は船岡盆地の東南部の阿武隈川の河畔にあり（第2図）、阿武隈川と白石川の合流点から1.2km南に位置する。旧流路沿いに形成された自然堤防が馬の背状に東西に延び、その上を通る旧道沿いには古くからの民家が立ち並ぶ。民家の裏手には畠地や水田が広がっている（第3図）。

終戦直後の空中写真（写真図版1-2）では、この様相をより鮮明に見ることができる。現在は広く平坦な水田の中にも、所々に自然堤防が認められ、一見して流路を埋め立てて作られたとわかる水田の輪郭が見え、地形に沿った耕作地の区画が写し出されている。また、清水遺跡の東約150mを流れている阿武隈川が、明治23年の地図では、わずか50mの距離を流れており、集落との間に堤防もないことがわかる。標高は調査区の南が高く、北側に向かって徐々に低くなり、南端の1区で8.9m、北端の7区で8.3mである。過去に行われたボーリング調査では、阿武隈川や白石川を含む周辺の河川から供給された砂質シルト～シルト等が5m～10mの層厚で堆積することがわかっている。

#### 第2節 確認調査について

清水遺跡の確認調査は平成30年10月9日～同年10月29日に実施した。工事計画は耕作地の東側縁辺に沿って幅2.4m、深さ80cm、総長290mの小排水路を設置するというものである。確認調査は小排水路の設置区域に8本のトレーンチを設定して行った（第3図）。トレーンチの規模は崩落防



止用の法面を含めて幅3m、全長は5～10m程度とした。その結果、遺構密度は低いものの、柱穴・溝跡・土坑等の遺構を検出した。また、いずれの地点にも50～120cmの厚い盛土層（Ⅱ層）、黒褐色粘土質シルトの旧表土層（Ⅲ層）、黄褐色シルト質粘土層（Ⅳ層）があり、調査区北部では旧表土層の上に暗灰黄色～灰色粘土の水成堆積層（SX416）が分布することを確認した（第4図）。

### 第3節 本発掘調査の方法と経過

確認調査による遺構検出面は深く、水田の面工事により遺構が破壊される恐れは少ないので、排水路区域については本発掘調査の対象となった。調査は令和元年5月13日～同年7月15日に実施した（写真1・2）。排水路の全域を掘削することから、総長は290m、掘削総面積は1020m<sup>2</sup>となつた。調査区が一本の長大なトレーニングであることから、屈曲箇所で7区に分割した。調査は南端部から着手し、北へ向かって1区→7区の順に進めた（第3・5図）。



写真1 調査風景（4区）



写真2 調査風景（7区）

表土等の掘削はバックホー（0.45m<sup>3</sup>）を使用した。各調査区の深さは-100cm～-120cmほどである。いずれの調査区も多量の湧水があることから、調査区壁面に沿って幅30cmほどの排水路を設けた。湧水による崩落事故に対処するため、調査終了トレーニングから順次埋め戻しを行なながら進めた。また、検出面下の地層を確認するため、調査区の一角（50cm×50cm）をスコップで深堀し、掘削の難しい箇所ではハンドオーガーを使用した。

平面図（調査区）の記録に際しては、トータルステーション及び電子平板システム（遺構くん）を用いた。測量にあたっての基準点（第5図：BM 1～BM12）の座標値は以下のとおりである。

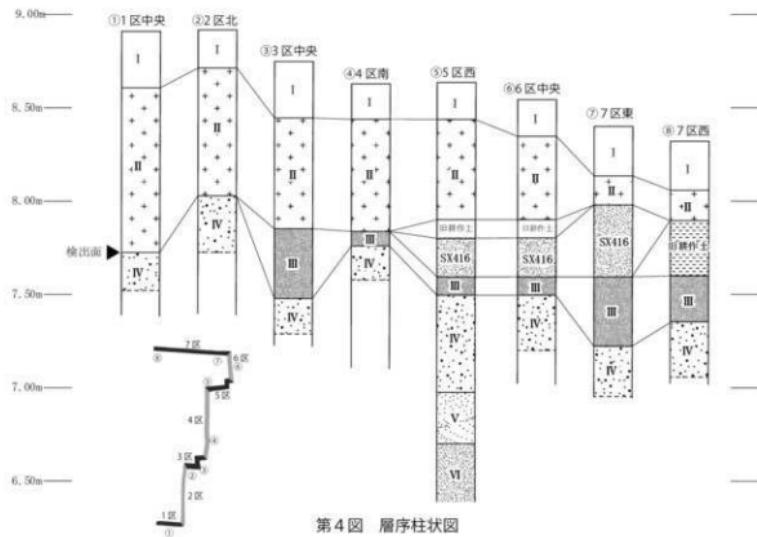
BM1 : X= -215,551.878	Y= -2,301.733	BM7 : X= -215,525.101	Y= -2,247.873
BM2 : X= -215,615.433	Y= -2,295.923	BM8 : X= -215,493.474	Y= -2,220.772
BM3 : X= -215,565.672	Y= -2,270.892	BM9 : X= -215,495.547	Y= -2,228.201
BM4 : X= -215,617.645	Y= -2,271.463	BM10 : X= -215,493.509	Y= -2,228.470
BM5 : X= -215,557.817	Y= -2,267.889	BM11 : X= -215,466.143	Y= -2,228.914
BM6 : X= -215,560.753	Y= -2,250.057	BM12 : X= -215,461.772	Y= -2,300.246

断面図は基本的に縮尺=1/20で作成した。地層の柱状図も適宜作成した（第4図）。写真撮影には一眼レフデジタルカメラ（Nikon D610 2,426万画素）を使用した。

調査期間を通じて大きな天候の崩れもなく調査は順調に進んだが、調査の後半に着手した5区以北では湧水量が著しく、特に最終7区では一晩で膝近くまで水位が上昇するため、調査が難航した。発掘調査は同年7月10日(水)に終了し、15日(月)には調査区全域の埋め戻し・養生も完了した。

#### 第4節 基本層序

基本層序は次の通りである。I層：現表土(水田・畑耕作土、層厚15cm～20cm)、II層：旧耕作土および盛土層(50cm～120cm)、III層：黒褐色粘土質シルト層(旧表土、層厚10cm～40cm、地点によりa・bに細分)、IV層：黄褐色シルト質粘土層(80cm以上)、V層：にぶい黄褐色シルト質粘土層(20cm～30cm)、VI層：灰色粘土層(30cm以上)。各調査区の層序は下の第4図の柱状図で示した。遺構の検出は、基本的にIV層(黄褐色シルト質粘土)上面で行った。



第4図 層序柱状図

I層：現表土(耕作土)  
II層：盛土および旧耕作土  
III層：黒褐色粘土質シルト(旧表土)  
地点によりa・bに細分  
IV層：黄褐色シルト質粘土  
V層：にぶい黄褐色シルト質粘土  
VI層：灰色粘土

\* SX416 水成堆積層：暗灰黄色～灰色粘土。4区北部から7区西部にかけて分布。



写真3 3区東壁付近

なお、各調査区ともⅠ層（現表土）下には近代以降の厚い盛土（50cm～120cm）が認められる。調査区周辺は阿武隈川に接する水害多発地帯であったために、昭和期に至るまで周辺住民や町によつて継続的な嵩上げが行われた記録や証言が残っている。4～7区では、盛土直下に暗灰黄色～灰色粘土層（SX416：水成堆積層）が広範囲に分布し、遺構も希薄になる。

## 第5節 各区の発掘調査

今回の調査区は全長720mの小排水路設置区域であるため、調査の便宜上、1～7区に分けて調査を行った（第5図）。本報告書では、これらの調査区を【1・2区】、【3・4区】、【5・6・7区】の区域に分けて記述している。また、検出遺構と遺物は1)奈良・平安時代、2)近世以降、3)時期不明の順に記述している。

### 【1・2区】（第6図、写真図版2-②～⑤）

#### （1）検出状況

1区は微高地の北側縁辺に位置する。東西方向に展開する全長22mの調査区である。今回の調査区の中で最も標高が高く、周囲は畑として利用されている。一帯には近世以降の盛土層（Ⅱ層）が1.2mの厚みで堆積する。Ⅲ層（旧表土）は削平により失われた場所がある。

遺構はⅣ層上面で検出した。井戸跡1基、溝跡2条、土坑1基、窪地状遺構1基、小ピット類である（第6図）。多くは近世から近代にかけての遺構である。遺物は土師器片や近世陶磁器が出土しており、幕末から明治期にかけての相馬大堀焼が含まれる。

2区は1区東端から北に延びる南北方向の調査区で、全長55mある。畑として利用されており、土層堆積状況は1区とほぼ同様で、古代と推定される溝跡や近世の遺構を検出した。遺構はⅢ層（旧表土）およびⅣ層上面で検出し、井戸跡3基、溝跡7条、土坑2基、小ピット類がある（第6図）。SD206溝跡からは検出の際に多くの近世陶磁器が出土し、相馬大堀焼が含まれている。また、調査区北側のSD209溝跡からは、在地産の中世陶器片1点が出土した。

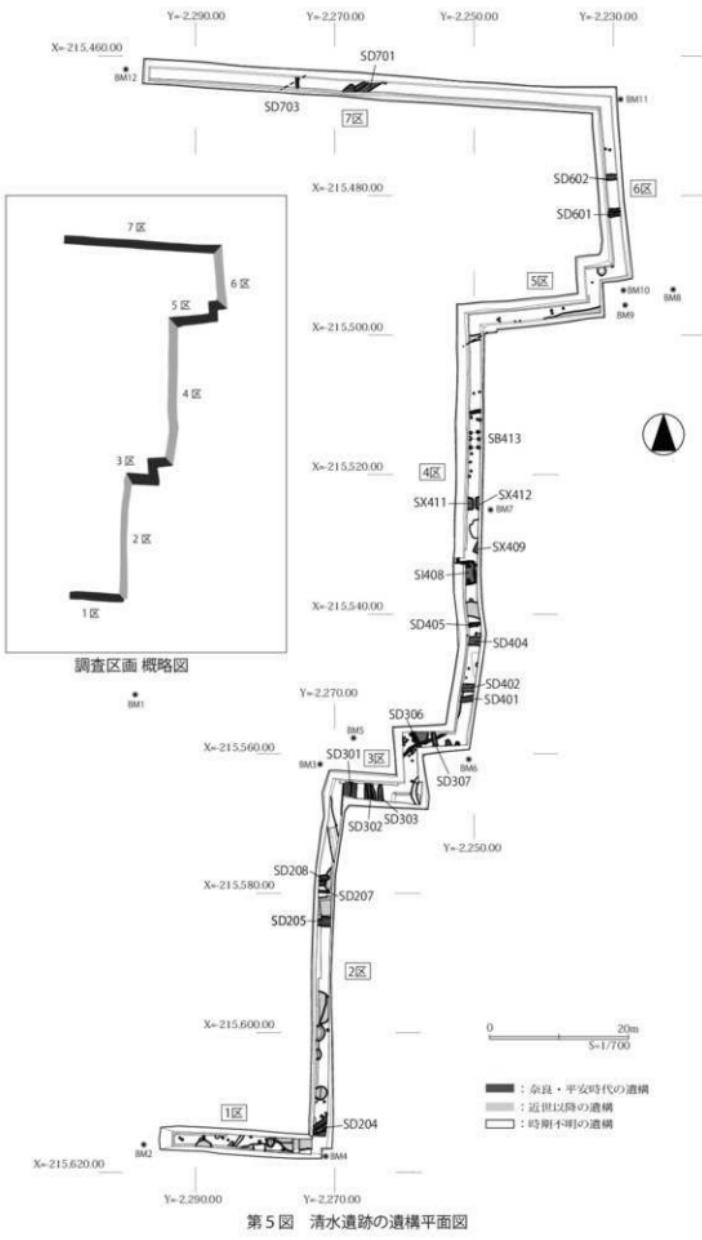
#### （2）検出遺構と遺物

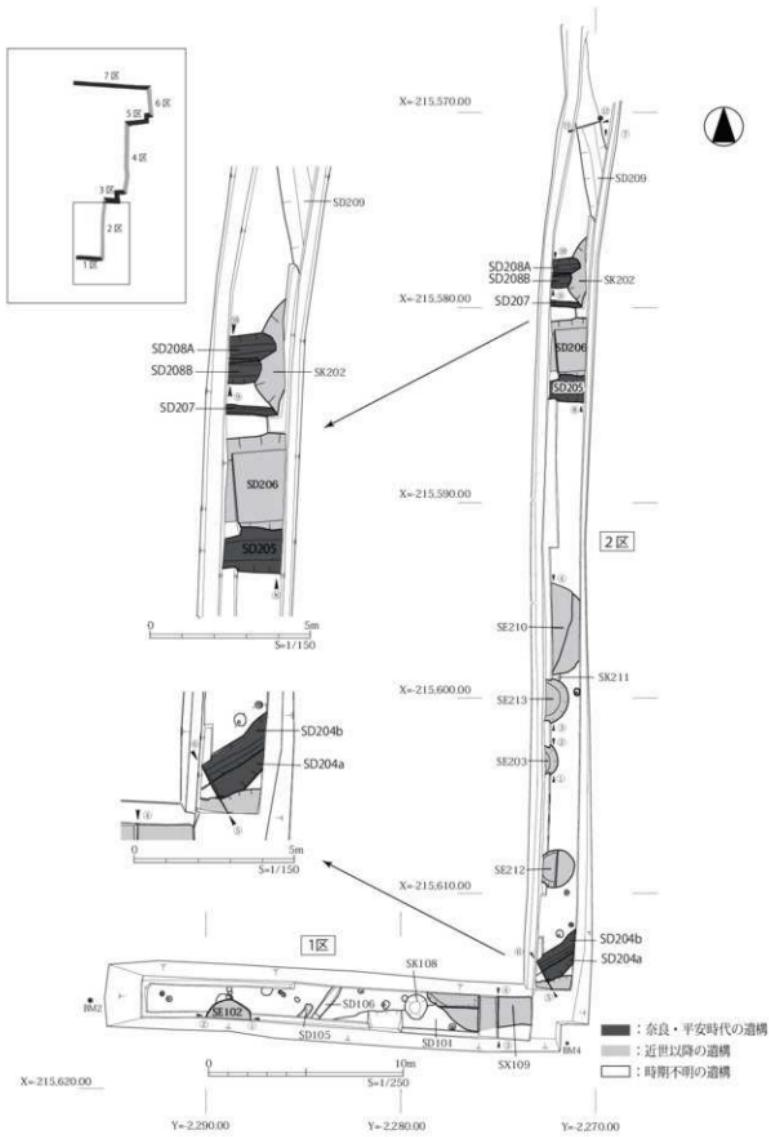
##### 1) 奈良・平安時代

###### ①溝跡

###### 【SD204】（第6・7図、写真図版2-⑥）

2区南端で検出した東西方向の溝跡である。SD101溝跡、SX109窪地状遺構と重複し、これらより古い。a、bの2時期がある。溝跡の方向は東で30度、北に偏している。東西両端は調査区外へ延びるが、西端は1区では近世以降の遺構と重複し、確認されていない。規模はa期が上幅70cm前後で、底幅20cm、深さ30cmである。b期は上幅40cmで、底幅15cm、深さ20cmである。堆積層はa期が埋3層（人為的埋土）、b期が埋1・2層（自然堆積）である。遺物は須恵器环の小片が出土している。





第6図 1・2区の遺構平面図

層	時期	層	土色	土性	備考
SD101	-	1	黒褐色(2.5Y3/3)	粘土シルト	明褐色シルト質粘土を含む。腐植塊の自然堆積。
SX109	-	1	灰褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	明褐色砂質シルトの小ブロックから(φ 0.1 ~ 1cm)および炭化物を含む。
SD204	b	1	黄褐色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	均質な自然堆積。溝の底に含む。
	2	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	均質な自然堆積。溝の底に含む。	
	a	3	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	明褐色シルト質粘土の小ブロックが混じる。人為。
P10	-	1	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土シルト	明褐色シルト質粘土ブロックを多く含むする粘土質。人為。
	2	2	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト質粘土	明褐色シルト質粘土ブロックを極端に多く含むする粘土質。人為。

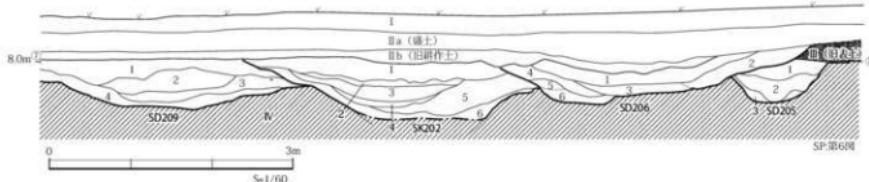
第7図 SD204溝跡断面図

## 【SD205】(第6・8・9図)

2区中央よりやや北側で検出した東西方向の溝跡である。SD206溝跡と重複し、それよりも古い。溝跡の両端部は調査区外である。規模は検出総長が2m、上幅1.3~1.4m、底幅60cm、深さ1mである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。埋土は3層に分けられ、埋3層が人為的埋土である。遺物は須恵器甕(第9図)、土師器甕の破片などが出土している。

## 【SD207】(第6図)

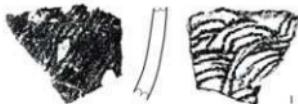
2区北側で検出した東西方向の小溝跡である。SK202土坑より古い。溝跡の両端部は調査区外である。規模は検出総長が2m、上幅30cm、底幅10cm、深さ10cmである。断面は皿状で、埋土は自然堆積である。遺物は出土していない。



層	土色	土性	圖考	層	土色	土性	圖考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	暗褐色シルトの小ブロック(φ 1 ~ 3cm)を含む。縦縫合部に含む。	1	灰褐色(20YR5/2)	シルト	明褐色シルトの小粒(φ 1 ~ 2mm)を含む。人為堆積。
2	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	暗褐色シルトの小ブロック(φ 5 ~ 10cm)を全体的に含む。縦縫合部に含む。縫まりあり。埋土。	2	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	明褐色シルトの小粒(φ 3 ~ 5mm)を全体的に含む。下層ほど堅密。
3	オリーブ黒色(3Y3/2)	粘土	土体は均質但し、縫まりあり。	3	黒褐色(2.5Y4/1)	砂	明褐色シルトの小粒(φ 3 ~ 5mm)を全体的に含む。堅密。
4	オリーブ黒色(3Y3/2)	粘土	土体は均質。縫まりあり。				

層	土色	土性	圖考	層	土色	土性	圖考
1	オリーブ黒色(3Y3/2)	シルト	明褐色粘土シルトの小粒(φ 2 ~ 5mm)を全体的に含む。縫まりあり。	1	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	クリーム色シルト。オレンジ色シルト。褐色シルト(チブロク)を横断的に含む。
2	褐灰黒(2.5Y3/2)	シルト	明褐色シルトの小粒(φ 2 ~ 5mm)を全体的に含む。	2	褐灰黒(2.5Y3/2)	シルト	明褐色シルトの小粒(φ 1 ~ 2mm)を含む。下層ほど堅密。
3	黄褐色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	明褐色。土質はシルトの状態(φ 3 ~ 5mm)を全体的に含む。	3	褐灰黒(2.5Y4/1)	粘土	暗褐色粘土の小粒(φ 1 ~ 3mm)を含む。木炭を含む。
4	オリーブ黒色(3Y3/2)	粘土	全体的に均質。縫まりあり。	4	褐灰黒(2.5Y4/1)	シルト	オレンジ色シルトの小粒(φ 2 ~ 3mm)を40%含む。褐色シルトの小粒(φ 1 ~ 3mm)を全体的に含む。堅密。
5	灰色(5Y4/1)	粘質シルト	褐色粘土の小粒(φ 1 ~ 2mm)を全体的に含む。縫まりあり。均質。	5	褐灰黒(2.5Y3/1)	シルト	褐色シルトの小粒(φ 1 ~ 3mm)を全体的に含む。堅密。
6	褐灰黒(2.5Y3/2)	砂質シルト	褐色粘土をまばらに含む。下層ほど堅密。	6	褐灰黒(2.5Y3/2)	粘土質シルト	褐色粘土質シルトの小ブロック(φ 5 ~ 10mm)を含む。下層ほど堅密。

第8図 SD205・206・209溝跡、SK202土坑断面図



第9図 SD205溝跡出土遺物

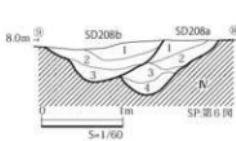
No.	器種	遺跡・層	法量(cm)	特徴	写真	登録
1	須恵器甕	SD205	1	内:褐色土手口、内:口部に凹アテ口	5-7	6

### 【SD208】(第6・10図)

2区北側で検出した東西方向の溝跡で、a・bの2時期がある。SK202土坑と重複し、それよりも古い。溝跡の両端部は調査区外である。断面形はa・b期ともに皿状を呈する。

a期の規模は検出総長1m、残存部上端で80~85cm、底幅20cm、深さ42cmである。堆積層は4層に分けられ、いずれも人為的埋土である。

b期の溝跡はa期の80cm南に造りかえられる。規模は検出総長1m、上幅が70~80cm、底幅30cm、深さ20cmである。堆積層は3層に分けられ、いずれも人為的埋土である。遺物は土器師壺の小片が出土している。



層別	層	土色	土性	備考
b	1	褐灰色 (2.5Y3/3)	シルト	N層に由来するシルト小ブロック (φ 0.5~3cm) を5%混入する。固く緻密まる。人為。
	2	褐褐色 (10YR3/3)	シルト	N層に由来するシルト小ブロック (φ 0.5~1cm) を5%混入する。固く緻密まる。人為。
	3	黃褐色 (2.5Y5/3)	粘土質シルト	N層に由来するシルト小ブロック (φ 0.5~3cm) を主張とする。固く緻密まる。人為。
a	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	2段階のN層頂で、N層に由来する砂砾を模様 (2%) を含む。人為。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	2段階のN層頂で、N層に由来する砂砾を模様 (2%) を含む。人為。
	3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	2段階のN層頂で、N層に由来する砂砾を模様 (5%) を含む。人為。
	4	褐灰色 (2.5Y3/1)	粘土	濃い黒褐色で、古層を強く巻き上げる。

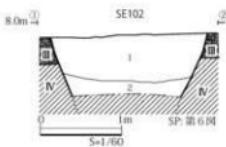
第10図 SD208 溝跡断面図

### 2) 近世以降

#### ①井戸跡

##### 【SE102】(第6・11図)

1区西部で検出した円形（直径2.3m以上）の素掘りの井戸跡である。井戸の北半分を検出した。III層（旧表土）から掘り込まれる。深さは70cm以上である。堆積土2層に分けられ、いずれも人為的埋土で、締まりがない。完掘は行っていない。遺物は出土していない。

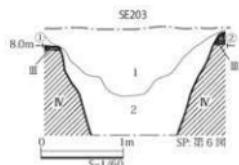


層別	層	土色	土性	備考
	1	黄褐色 (2.5Y4/3)	粘土質シルト	N層由来のブロック (φ 1~10cm) を多量に含む人為。
	2	褐色 (5Y4/1)	粘土	粘性強く緻密なり。

第11図 SE102 井戸跡断面図

##### 【SE203】(第6・12図)

2区南部で検出した素掘りの井戸跡である。井戸の東側を検出した。II層より掘りこまれる。直径は推定で2m前後、深さは1.4m以上である。堆積土は2層に分けられ、埋1層は人為的埋土、埋2層は自然堆積層である。遺物は出土していない。



層別	層	土色	土性	備考
	1	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	N層由来の小ブロック (φ 1~3cm) を混入する人為的埋土。固く緻密あり。
	2	黒褐色 (2.5Y2/1)	粘土質シルト	全層が固て、下層ほど粘土化する。

第12図 SE203 井戸跡断面図

### 【SE210】(第6・13・14図、写真図版2-⑦)

2区中央付近で検出した素掘りの井戸跡である。井戸の東側を検出し、掘り方と抜き穴が確認できる。SE213 井戸跡、SK211 土坑と重複し、これらより新しい。今回の調査で見つかった井戸跡の中で最も大型である。検出幅は掘り方で4.2m、井戸枠抜き穴が4.6mである。掘り方、抜き穴ともに人為的埋土である。丸碗(第14図-1)が出土したため、一部の掘り下げのみに止めた。



第13図 SE210・213 井戸跡断面図



第14図 SE210 井戸跡出土遺物

### 【SE212】(第6図)

2区南側で検出した素掘りの井戸跡である。埋土上面は綿まりのない黒色粘土で近世以降の新しい井戸跡と判断できたため、平面の検出に止めた。南北の直径は1.9mである。

### 【SE213】(第6・13図)

2区中央よりやや南寄りで検出した素掘りの井戸跡である。井戸の東半分を検出した。SE210 井戸跡、SK211 土坑と重複し、SE210 より古く、SK211 より新しい。直径は2.2m以上、深さは1.3m以上である。確認できる堆積土は2層で、上層が人為的埋土である。下層が綿まりのない灰色粘土で自然堆積である。掘り下げは一部に止めている。

### ②溝跡

#### 【SD101】(第6・15図)

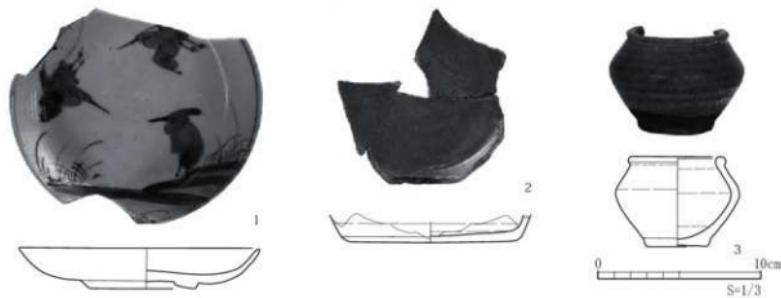
1区中央部から2区で検出した東西方向の溝跡である。SX109 窪地状遺構と重複し、それよりも古い。東で7度、北に偏している。規模は検出総長が12m、上幅1.3m以上、底幅1m以上、深さ60cmである。断面は皿状である。埋土は6層に細分できるが、埋2・4・5層は人為的埋土の可能性がある。遺物は出土していない。



第15図 SD101 溝跡断面図

### 【SD206】(第6・8・16図)

2区中央部分よりやや北側で検出した東西方向の溝跡である。両端は調査区外である。断面は皿状を呈し、規模は検出総長が2m、上幅2.5～2.7m、底幅3m、深さ1mである。排水側溝を掘り下げ、遺構断面を確認した。堆積土は6層に分けられ、4時期の変遷がある。検出の際に埋1層から陶磁器皿(第16図-1)、捕鉢、焰烙(第16図-2)、仏花器、小壺(第16図-3)、土瓶、茶碗等の近世陶磁器が出土している。



第16図 SD206 溝跡出土遺物

### ③土坑

#### 【SK108】(第6図)

1区東部で検出した土坑である。南北方向を長軸とする楕円形を呈しており、規模は長軸1.28m、短軸1.13m、深さ20cmである。堆積土は単層の灰黄褐色粘質シルトである。炭化物や焼土を含む。遺物は出土していない。

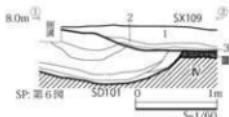
#### 【SK211】(第6・13図)

2区東部でSE210井戸跡とSE213井戸跡の間で確認した小型の土坑である。大半がSE210およびSE213に壊されている。残存部分の検出総長は上端40cm、深さ15cmである。掘り下げは行わなかった。遺物は出土していない。

### ④その他

#### 【SX109】(第6・17・18図、写真図版2-⑥)

1区東部から2区南端で検出した緩やかな落ち込みで、北へ向かって広がる。SD101溝跡と重複し、これよりも新しい。規模は検出総長が7m、南北2.3m、深さ30cmである。検出部の断面は皿状で、底面は平坦である。堆積土は3層に分けられ、いずれも自然堆積である。遺物は1層を中心に磁器碗・皿、陶器碗(第18図-2)、土人形(第18図-1)などが出土している。



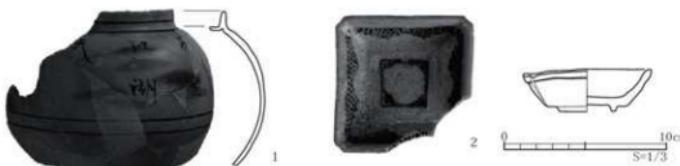
層	土色	土性	層
1	灰褐色 (10YR 4/2)	粘土質シルト	明黄色が剥離した小ブローカーから (φ 0.1 ~ 1cm) および炭化物を含む。網状があり。
2	黄褐色 (2.5Y 4/4)	砂質	全体が均質な自然堆積で、炭化によるもの。網状あり。
3	明黄色 (2.5Y 4/2)	粘土	自然堆積。均質で網状あり。

第 17 図 SX109 窪地状遺構断面図



No.	器種	遺構・層	法量 (cm)	特徴	登録
1	土人形	SX109・1 層	口径 - 高さ - 距高 -	头部付も奈子。空洞を底に、頭部をヘリテア。頭部の花弁形より小鉢。頭部による輪郭強化。	1
2	陶皿	SX109・1 層	(8.3) 3.2 4.7	直径 : (2.5cm)。縁口幅 : (1.5cm)に軽度の凹凸。自然火候焼。瓦片厚壁分離・茶碗底削 (文化一様本同)。	2

第 18 図 SX109 窪地状遺構出土遺物



No.	器種	遺構・層	法量 (cm)	特徴	登録
1	陶瓶 土瓶	I 層	(8.5) - -	相馬大堀産。底は厚壁分離・土瓶型 (文化後半～桃山期)	3
2	角皿 手皿	I 層	12.5 3.4 2.6	ふくらまえ・盛づくり・凹底あり・切込焼。茶碗型 (1860～1870 年代)	4

第 19 図 1 区 I 層出土遺物

#### 【その他の遺物】(第 19 図)

1 区東側の表土掘削の際に、近世の陶磁器類が出土している。1 は相馬大堀産の土瓶、2 は切込産とみられる角皿（手皿）である。

#### 3) 時期不明

##### ①溝跡

##### 【SD105】(第6図)

1 区中央部で検出した南北方向の溝跡で、北側を検出した。SD106 溝跡に並行する。北で 36 度、東に偏している。規模は検出総長が 80cm、上幅 35cm、底幅 20cm、深さ 8cm である。断面は上の開いた U 字形である。堆積土は単層の黒褐色粘質土で、自然堆積である。遺物は出土していない。

##### 【SD106】(第6図)

1 区中央部分で検出した南北方向の溝跡で、SD105 溝跡に並行する。溝跡の両端部は調査区外である。北で 36 度、東に偏している。規模は検出総長が 2 m、上幅 35 ~ 51cm、底幅 30cm、深さ 5 cm である。断面は上の開いた U 字形である。堆積土は単層の黒褐色粘質土で、自然堆積である。遺物は出土していない。

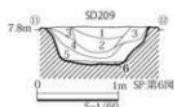
### 【SD209】(第6・20・21図、写真図版2-⑤・⑧)

2区北部で検出した南北方向の溝跡で、調査区北側にa・b・cの3時期がある。方向は北で14度、西に偏している。SK202土坑と重複し、それよりも古い。溝跡の両端部は調査区外である。

a期の規模は検出総長4.7m、残存部上端で1.2m、底幅80cm、深さ50cmである。断面は逆台形を呈する。堆積層は3層に分けられ、いずれも人為的埋土である。

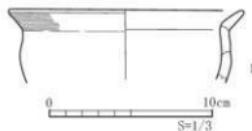
b期はc期の溝跡に壊されており、断面形・底幅は不明である。検出総長4.7m、残存部分の上幅が1.2m、深さ30cm前後である。堆積層は2層に分けられ、いずれも人為的埋土である。

c期の規模は検出総長4.7m、上幅70cm、底幅30cm、深さ35cmで、断面形は上の開いたU字形である。堆積層は2層に分けられ、いずれも人為的埋土である。遺物は上層から土師器甕(第21図-1)、下層から中世陶器(第21図-2)が出土している。



時期	層	土色	土性	備考
c	1	暗灰褐色(10YR5/3)	シルト	堆積由来の小粒(±1mm)を全体に混入する。人為。
	2	褐色(10YR6/1)	粘土質シルト	堆積由来のシルト小ブロック(±1~2mm)を全層に20~25%混入する。人為。
b	3	褐色(10YR6/1)	シルト	堆積由来のシルト小ブロック(±0.5~2mm)を全層に25%混入する。人為。
	4	褐色(10YR6/1)	粘土質シルト	堆積由来のシルト小ブロック(±1~2mm)を中層部に僅かに混入する。人為。
a	5	褐色(10YR6/1)	粘土	堆積の粘土質シルトを主体とする。人為。
	6	褐色(10YR6/1)	粘土	縦まりのない自然堆積。

第20図 SD209 溝跡断面図



No.	器種	遺構・層	法量(m)	特徴	写真	図版
1	土師器甕	SD209・1層	(14.5)	- - - 外:ナメ 内:ナメ	5-8	10
2	中世陶器	SD209・4層	- - -	-	9-18	11

第21図 SD209 溝跡出土遺物

### ②土坑

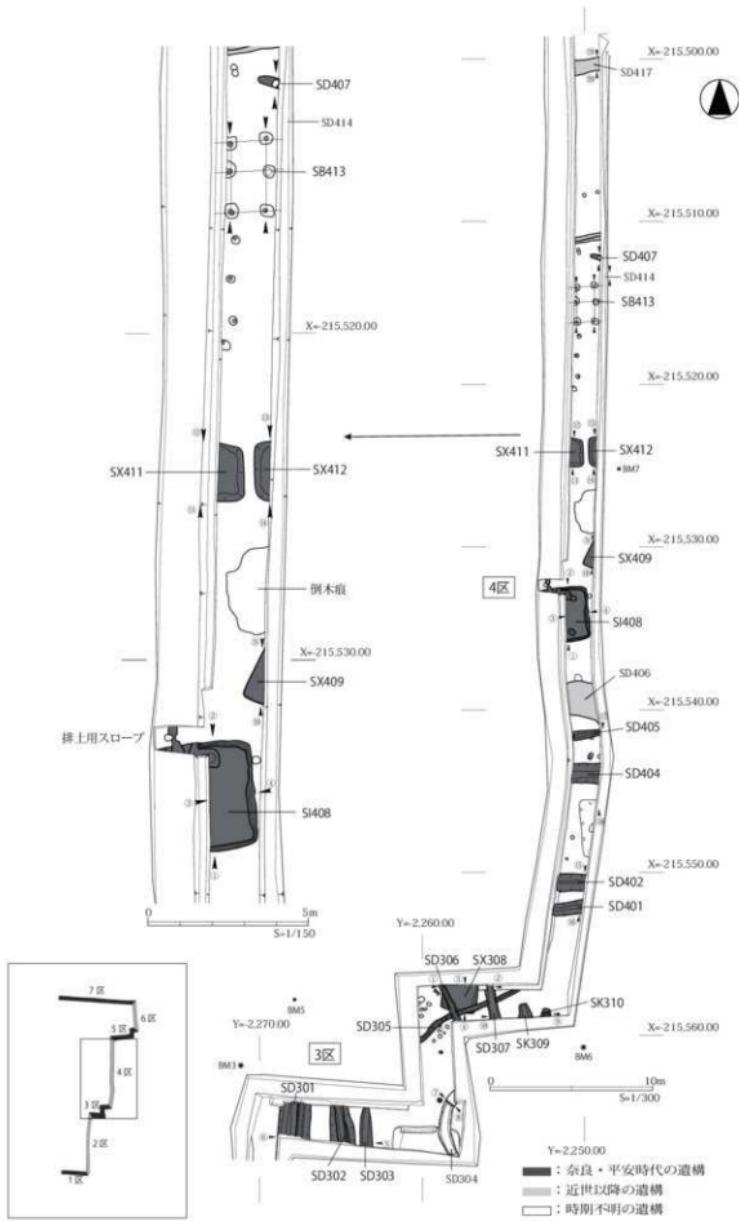
#### 【SK202】(第6・8図)

2区北部で検出した円形の土坑であるが、井戸跡の可能性もある。西側の一部を検出した。断面形は皿状を呈する。SD206溝跡、SD209溝跡と重複し、SD206より古く、SD209より新しい。規模は上端部の検出総長が5m、深さは1m以上である。堆積土は確認できた部分で6層に細分できる。埋4層以外は人為的埋土である。遺物は出土していない。

### 【3・4区】(第22図、写真図版3-①~4-②)

#### (1) 検出状況

3区は東西方向に展開し、中央部がS字クランク状に屈曲する全長26mの調査区である。畑として利用されている。周辺では標高の低下が顕著になり、IV層(遺構検出面)の標高も低くなる。一方



第22図 3・4区の遺構平面図

でⅢ層（旧表土層）が他の調査区よりも厚く残存する（第4図）。また、この3区以北では近世の遺構が極端に減少するが、奈良・平安時代の出土遺物を伴う遺構は逆に増加する。

遺構はIV層上面で検出した。竪穴状遺構1基、溝跡7条、土坑2基、小ピット類がある（第22図）。

4区は全調査区のほぼ中央部に位置し、南北方向に展開する。全長は64mである。1・2・3区と続いた畑地は、4区周辺から水田に変わる。土層の堆積状況を見ると、南から徐々に低くなったIV層（黄褐色シルト質粘土層）が、3・4区で再び高まる。4区の遺構密度が比較的高いのは、このIV層の高まりを反映すると考えられる。高まったIV層は4区中央から再び低くなり、北端部の溝跡SD417周辺から北では、II b（旧耕作土）上面を削って近代以降の水成堆積層（SX416）の堆積が始まる（第39図・写真図版4-②）。SD417溝跡が近現代の集落北辺の区画溝とみられる。

検出遺構は竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構3基、溝跡8条、土坑2基、小ピット類などである（第22図）。

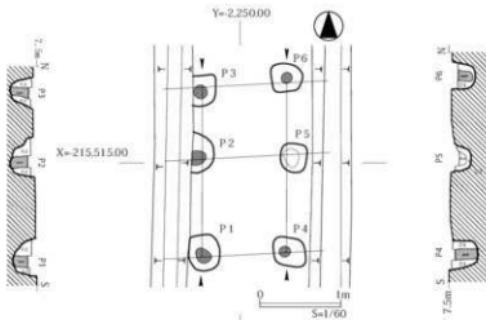
## （2）検出遺構と遺物

### 1) 奈良・平安時代

#### ①掘立柱建物跡

##### 【SB413】（第22・23図、写真図版3-⑤・⑥）

4区北側で検出した総柱建物跡である。東西棟もしくは方形の建物と推定される。建物の規模は桁行が不明、梁行2.2m、柱間寸法は南桁行で1.6m、東梁行が北から1m・1.2mである。桁中央列（P2・P5）はやや北寄りに並ぶ。柱穴掘り方は隅丸方形や円形で、径約30～45cm、深さ28～36cmである。P5以外には柱痕跡が確認され、径は14～16cm前後である。堆積土は、柱痕跡が黒褐色～黒色の粘土、



遺構	層	土 色	土 性	概 写	考
P1	1	褐灰褐色(2.3V4/2)	粘土	柱痕跡、明褐色シルトの小ブロックを含む。	
	2	黒褐色(2.3V3/1)	シルト質粘土	柱穴掘り方付近、明褐色シルトブロックを含む。	
P2	1	黒色(2.3V2/1)	粘土	柱痕跡、粘性強い。	
	2	黒褐色(2.3V3/1)	シルト質粘土	柱穴掘り方付近、明褐色シルトの小ブロックを含む。	
P3	1	黒色(2.3V2/1)	粘土	柱痕跡、粘性強い。既述物を少量化。	
	2	褐褐色(2.3V3/1)	シルト質粘土	明褐色シルトブロックを多量に含む。	

遺構	層	土 色	土 性	概 写	考
P4	1	黄褐色(2.3V3/1)	粘土	柱痕跡、粘性強い。	
	2	黒褐色(2.3V3/1)	粘土質シルト	柱穴掘り方付近、黄褐色シルトの小ブロックを含む。	
P5	1	黄褐色(2.3V4/1)	粘土質シルト	柱穴掘り方付近、明褐色シルトの小ブロックを多量に含む。	
	2	黄褐色(2.3V4/1)	粘土質シルト	柱穴掘り方付近、明褐色シルトの小ブロックを含む。	
P6	1	黒色(2.3V3/1)	粘土	柱痕跡、粘性強い。	
	2	黒褐色(2.3V3/1)	シルト質粘土	柱穴掘り方付近、明褐色シルトの小ブロックを含む。	

第23図 SB413 掘立柱建物跡平・断面図

柱穴掘り方が黒褐色～黄灰色の粘土質シルトである。出土遺物は柱穴掘り方埋土から土師器の小片が出土している。

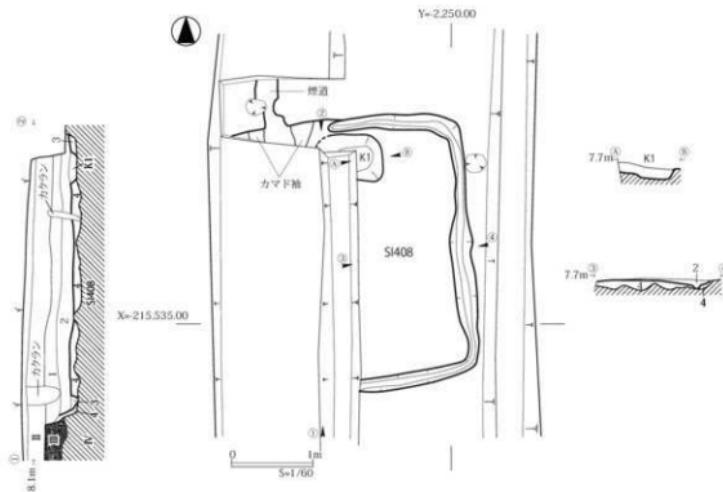
## ②竪穴建物跡

【SI408】(第 22・24・25 図、写真図版 3-⑦)

4 区の中央よりやや南側で検出した竪穴建物跡である。検出したのは建物東側で、隅丸方形と推定される。北辺や西寄りにカマドを付設する。建物の方向は、北で 5 度、西に偏している。規模は東辺 2.9 m、北辺は 2.8 m 以上である。

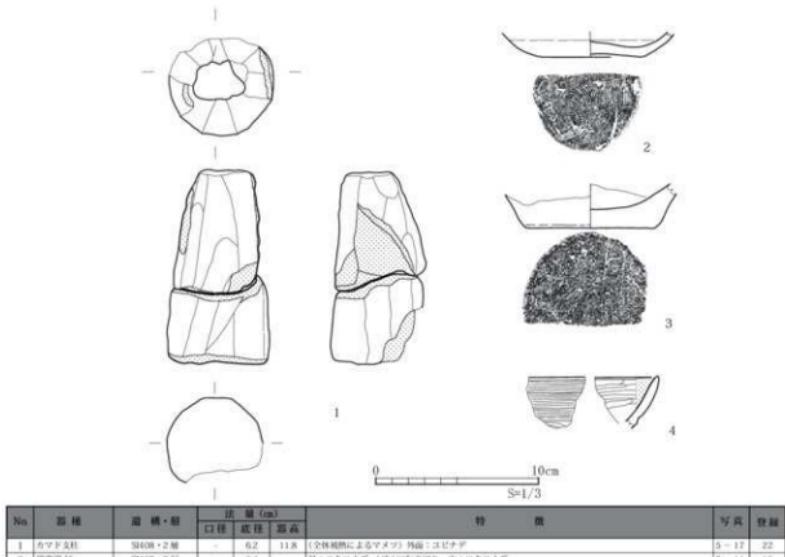
建物跡はⅢ層（旧表土）から掘り込まれており、掘り方の深さは約 40cm 前後で底面の起伏は著しい。堆積土は 2 層に大別でき、いずれも炭化物や土器片を含む人為的埋土である。埋 4 層が掘り方埋土で上面が床面である。建物床面に窪地状の起伏があるものの、明確な主柱穴は確認できなかった。

カマド主体部は調査区外だが、排土用スロープ部分で煙道とカマドの両袖を確認した。煙道の検出総長は 80cm で上幅が 20cm である。カマドの東側に貯蔵穴とみられる土坑（K1）を検出した。確認できたのは土坑の東部分で、規模は長軸 65cm 以上、短軸 56cm、深さ 10cm を測る。断面形は皿状で底面は平坦である。建物には周溝が伴っており、規模は上幅が 10 ～ 30cm、下幅が 5 ～ 10cm、深さ



番号	土色	土性	場所
1	黒褐色(0W2/3)	シルト	褐色シルトブロック (φ 5 ~ 10cm) を含む。縫まりあり。
2	黒褐色(0W2/2)	シルト	褐黃褐色ブロック (φ 1 ~ 3cm) を含む。縫まりあり。廻内・廻外・遺物を含む。
3	黒褐色(0W2/2)	シルト	埋 2 層に類似する。褐黃褐色ブロック (φ 1 ~ 3cm) を含む。縫まりあり。
4	褐色(10W4/6)	粘土	褐黃褐色ブロック、褐黃褐色ブロック (φ 5 ~ 10cm) を含む。上面が床面となる。人為。
K1	褐褐色(0W3/3)	粘土質シルト	縫まりややあり。積土を多く含む。廻外と地山ブロックを含む。

第 24 図 SI408 竪穴建物跡平・断面図



第25図 S1408 穫穴建物跡出土遺物

が5~17cmである。断面形はU字形を呈する。

出土遺物は埋1~2層から内面黒色処理の土師器壺、須恵器壺(第25図-2)、土師器甕(第25図-3)、カマド支柱(第25図-1)、鉄製品、掘り方埋土から内面黒色処理の有段付壺(第25図-4)が出土している。

### ③ 穫穴状遺構

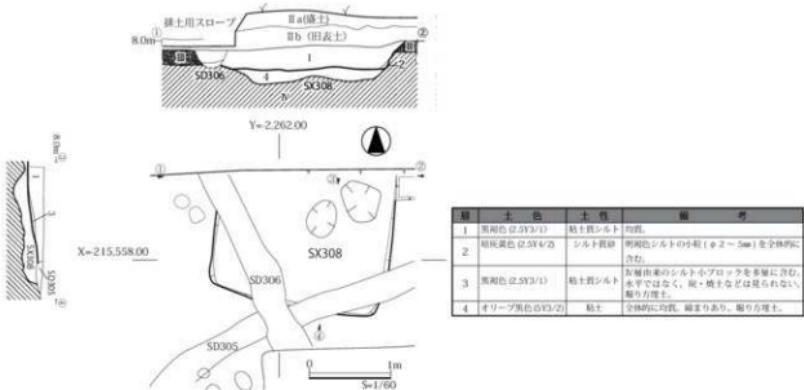
【SX308】(第22・26・27図、写真図版3-①・②・④)

3区の北部で検出した。SD305・306溝跡と重複し、これらより古い。検出したのは遺構の南側である。検出部の南辺角は隅丸状を呈している。遺構の傾きを東辺で測ると、北で7度ほど東に偏する。規模は西側南辺は2.1m、東辺は検出総長で1.8mである。

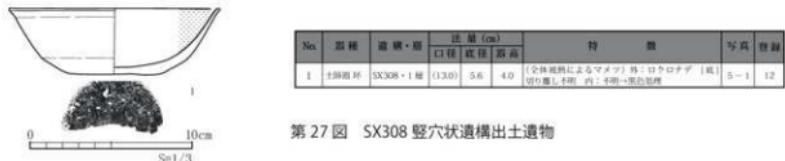
Ⅲ層(旧表土)から掘りこまれており、掘り方の深さは40cm前後である。堆積土は大別で2層に分けられ、上層が自然堆積、下層が人為的埋土である。明確な周溝跡や柱穴、焼土や炭化物もなく、また床面は南北の高低差が10cmにも及ぶことから、建物跡と断定することはできなかった。掘り方埋土より黒色処理されたロクロ土師器壺(第27図-1)などが出土している。

【SX409】(第22・28図、写真図版3-⑧)

4区の中央よりやや北側で検出した。検出部は遺構の南西コーナー部分で、隅丸状を呈している。遺構の方向は、北端で約27度、東に偏する。検出総長は南辺80cm、西辺2mである。IV層から掘



第26図 SX308 穫穴状遺構 平・断面図



第27図 SX308 穫穴状遺構出土遺物



第28図 SX409 穫穴状遺構平・断面図

りこまれており、掘り方の深さは 20 ~ 36cm である。

堆積土は埋 1 ~ 3 層に分けられ、埋 4 層上面が床面と考えられる。埋 1 ~ 3 層はいずれも人為的埋土である。床面から焼土ブロックや炭化物を検出したが、柱穴や周溝跡は検出されなかった。

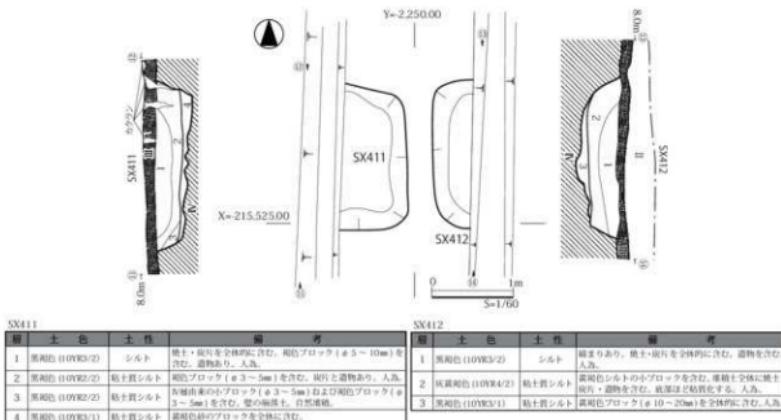
#### **[SX411] (第22・29図、写真図版 4-①)**

4 区の中央よりやや南側で検出した。遺構の東側を検出し、隅丸状を呈している。遺構の東辺は南北方向で傾きはない。規模は南辺 85cm 以上、東辺 1.6 m 以上である。IV 層から掘りこまれておらず、掘り方の深さは 50 ~ 60cm である。堆積土は 4 層に分けられ、いずれも人為的埋土である。埋 4 層上面が床面と推定される。柱穴や周溝跡は確認できなかった。遺構の規模や構造、堆積土が東側に隣接する SX412 穫穴状遺構に近似することから、同時期に使われ、埋め戻された可能性が高い。遺物

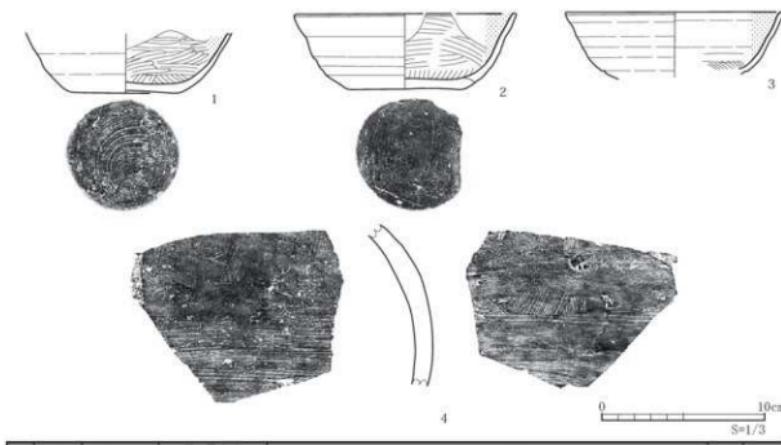
は堆積土から土師器坏の小片が出土した。

### 【SX412】(第22・29・30図、写真図版4-①)

4区の中央よりやや南側で検出した。遺構の西側を検出し、隅丸状を呈している。遺構の東辺は南北方向で傾きはない。規模は南辺50cm以上、西辺1.8m以上である。IV層から掘りこまれており、



第29図 SX411・412 穴状遺構平・断面図



第30図 SX412 穴状遺構出土遺物

掘り方の深さは40～50cmである。堆積土は3層に分けられ、いずれも人為的埋土である。埋3層上面が床面と推定される。柱穴や周溝跡は確認できなかった。遺構の規模や構造、堆積土が西側に隣接するSX411に近似する。遺物は埋2層から土師器壺（第30図-1～3）および須恵器壺（第30図-4）などが出土した。

#### ④溝跡

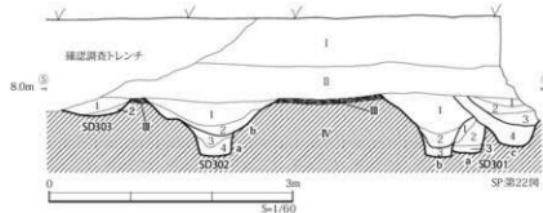
##### 【SD301】（第22・31・32図、写真図版3-③）

3区西端で検出した南北方向の溝跡で、大別3時期（a→c）がある。隣接するSD302溝跡に規模・断面形・堆積土の状況が近似する。

a期の溝跡は新期の溝跡により大半が壊される。検出総長は2.5m、上幅は不明、下幅30cm以上、深さは70cmである。断面形は逆台形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。確認できる堆積土は3層に分けられ、埋1層が自然堆積、埋2・3層が人為的埋土である。遺物は出土していない。

b期の溝跡の断面形は逆台形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、外反しながら立ち上がる。検出総長は2.5m、上幅は残存部で90cm、下幅は30cm、深さは70cmである。残存する堆積土は3層に分けられ、上層が自然堆積、下層が人為的埋土である。下層から須恵器壺の破片が出土している（第32図-1）。

c期の溝跡の断面形は逆台形で、検出総長は2.5m、上幅は1.6m前後と推定される。下幅は30cm、深さは60cmである。残存部の堆積土は4層に分けられ、グライ化した黒褐色粘土質シルトが主体である。遺物は出土していない。



SD301					SD302					SD303								
時期	期	土色	土性	層	時期	期	土色	土性	層	時期	期	土色	土性	層				
c	1	黒褐色(1.GYR3/3)	粘土質シルト	IV層由来のシルトブロック(φ 0.5～2m)を含む層に認められる。下層はタイル。	b	1	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。	a	1	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。				
	2	黒褐色(1.GYR3/3)	粘土質シルト	IV層由来のシルトブロック(φ 0.5～2m)を含む層に認められる。人為。		2	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	II層由来のシルトブロック(φ 1～10cm)を含む層に認められる。縫隙あり。人為。		2	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	II層由来のシルトブロック(φ 1～10cm)を含む層に認められる。縫隙あり。人為。				
	3	オリーブ褐色(7.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。下層はタイル。		3	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	II層由来のシルトブロック(φ 0.5～1cm)を含む層に認められる。縫隙あり。人為。		3	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	II層由来のシルトブロック(φ 0.5～1cm)を含む層に認められる。縫隙あり。人為。				
	4	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。下層はタイル。		4	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	II層由来のシルトブロック(φ 0.5～1cm)を含む層に認められる。縫隙あり。人為。		4	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	II層由来のシルトブロック(φ 0.5～1cm)を含む層に認められる。縫隙あり。人為。				
b	1	オリーブ褐色(7.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。II層は暗く細緻でさめ細かい。自然。	b	1	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。	b	1	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。				
	2	オリーブ褐色(7.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。II層は暗く細緻でさめ細かい。自然。		2	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。		2	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。				
	3	オリーブ褐色(7.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。II層は暗く細緻でさめ細かい。自然。		3	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。		3	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。				
a	1	オリーブ褐色(7.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。II層は暗く細緻でさめ細かい。自然。	a	1	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。	a	1	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。				
	2	オリーブ褐色(7.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。II層は暗く細緻でさめ細かい。自然。		2	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。		2	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。				
	3	オリーブ褐色(7.GYR3/1)	粘土質シルト	II層に認められる。II層は暗く細緻でさめ細かい。自然。		3	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。		3	黒褐色(2.GYR3/1)	粘土質シルト	A'層由来のシルトブロック(φ 1～5cm)を含む層に認められる。下層はタイル。				

第31図 SD301・302・303溝跡断面図



第32図 SD301・302溝跡出土遺物

【SD302】(第22・31・32図、写真図版3-③)

3区西端で検出した南北方向の溝跡で、a→bの2時期がある。溝跡の両端部は調査区外である。隣接するSD301に規模・断面形・堆積土の状況が近似する。

a期の溝跡はb期の溝跡によって上段部が壊される。規模は検出総長が2.5m、残存部の上幅は60cm、下幅35cm、深さは65~70cmである。断面は逆台形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上端に向かって外反しながら立ち上がる。確認できる堆積土は2層に分けられ、上層が人為的埋土堆積、下層が自然堆積である。土師器甕の破片が出土している。

b期の溝跡は、a期の溝跡の上段を掘り直したものである。断面は上が開くU字形である。規模は検出総長が2.5m、上幅が1.7m、下幅は30cm、深さは70cmである。堆積土は2層に分けられ、いずれもIV層由来のシルトブロックを含む人為的埋土である。上層から底部回転糸切りの土師器環(第32図-2)が出土している。

【SD303】(第22・31図、写真図版3-③)

3区西側で検出した南北方向の溝跡である。溝跡の両端部は調査区外である。断面形は上が開くU字形である。上端幅は86cm、下幅は50cm、深さは25cmである。堆積土は2層に分けられ、いずれも黒褐色粘土質シルトの人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SD305】(第22・33図、写真図版3-①・②・④)

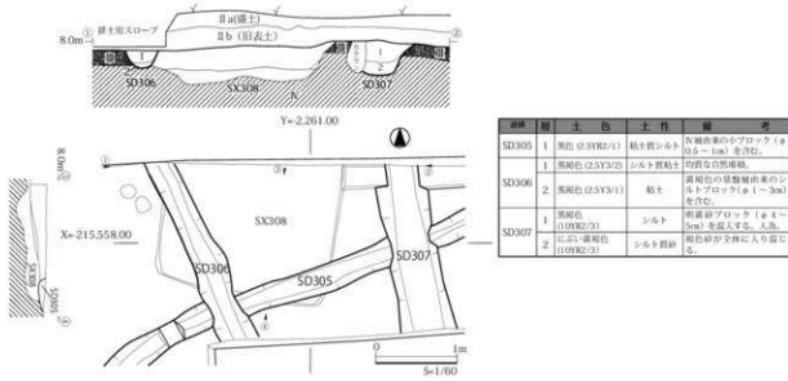
3区中央北側で検出した東西方向の溝跡である。SX308 竪穴状遺構、SD306 溝跡と重複し、SX308より新しく、SD306より古い。緩やかに蛇行し、両端部は調査区外である。方向は東で28度、北に偏している。規模は検出総長6.5m、上端幅30~40cm、下幅5~20cm、深さ10cmである。堆積土は単層で、人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SD306】(第22・33図、写真図版3-①・②・④)

3区中央北側で検出した南北方向の溝跡である。両端部は調査区外である。方向は北で24度、西に偏している。規模は検出総長2.5m、上幅30cm、下幅は20cm、深さは25cmである。堆積土は2層で、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

【SD307】(第22・33図、写真図版3-②)

3区中央北側で検出した南北方向の溝跡である。両端部は調査区外である。方向は北で10度、東に偏している。規模は検出総長が2.2m、上幅60cm、下幅30cm、深さ40cmである。堆積土は2層で、



第33図 SD305・306・307溝跡平・断面図

上層が人為的埋土、下層が自然堆積である。

#### 【SD401】(第22・34図)

4区南端で、検出した東西方向の溝跡である。SD402と重複し、それよりも新しい。両端部は調査区外である。Ⅲ層(旧表土)から掘りこまれる。断面は逆台形で、規模は検出総長1.8m、上幅75~90cm、下幅20cm、深さ70cmである。確認できる堆積土は3層に分けられ、いずれも人為的埋土である。遺物は須恵器甕の小片が出土している。

#### 【SD402】(第22・34図)

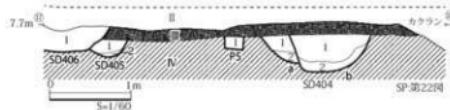
4区南端で確認した東西方向の溝跡である。SD401と重複し、それよりも古い。Ⅲ層(旧表土)から掘りこまれる。断面は逆台形で、規模は検出総長1.8m、上幅1m、下幅15cm、深さ80cmである。確認できる堆積土は3層で、埋2・3層が人為的埋土である。遺物は土師器甕、須恵器甕の小片が出土している。



第34図 SD401・402溝跡断面図

#### 【SD404】(第22・35・36図)

4区の南側で検出した。溝跡の両端部は調査区外である。Ⅲ層(旧表土)から掘りこまれ、2期(a→b)がある。a期の溝跡の底部～南肩にかけては、新期の溝跡に壊される。上の開いたU字形で、検出総長は2.5m、上幅は不明、下幅は不明、深さは35cm前後と推定される。残存部の堆積土は2層に細分でき、いずれも人為的埋土である。b期の断面は逆台形で、規模は検出総長1.7m、上幅1.2~1.3m、下幅30~50cm、深さは25cmである。堆積土は2層に分けられ、いずれも人為的埋土である。遺物は土師器環・甕、須恵器環(第36図-1)・高环(第36図-2)などが出土している。



遺跡	時期	層	土色	土性	備考
SD404	b	1	褐色(10YR4/3)	シルト	塊状の小ブロック(φ 3~5cm)を含む。人骨。
		2	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	塊状の小ブロック(φ 1~3cm)を含む。縫隙あり。人骨。
SD405	a	1	褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	塊状の砂質土ブロック(φ 0.5~1cm)を含む。塊状に多く含む。炭化物が混じる。人骨。
		2	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	塊状のブロック(φ 0.5~1cm)を40%以上含む。人骨。
P5		1	褐色(10YR3/2)	砂質シルト	ビットの擦り方にちくはさみ。
		2	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	ビットの擦り方にちくはさみ。

第35図 SD404・405溝跡ほか断面図



第36図 SD404溝跡出土遺物

### 【SD405】(第22・35図)

4区の南側で検出した。溝跡の両端部は調査区外である。SD406より古い。溝跡の断面は上の開いたU字形である。規模は検出総長は1.7m、上幅50cm、下幅は20cm、深さは25cmである。堆積土は2層に細分され、いずれも人為的埋土である。遺物は土師器の小片が出土している。

### 【SD407】(第22図)

4区の北側で検出した。検出したのは溝跡の西端部である。Ⅲ層(旧表土)から掘りこまれ、断面は逆台形である。規模は検出総長80cm、上幅30cm、下幅10cm、深さは45cmである。堆積土は単層で自然堆積である。遺物は出土していない。

### ⑤土坑

#### 【SK309】(第22・37図)

調査区北東部で検出した土坑である。検出したのは土坑の北側である。長軸で90cm以上、短軸で40cmである。壁は東側で緩やかに立ち上がり、西側ではほぼ垂直に立ち上がる。堆積層は2層で、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第37図 SK309・310土坑断面図

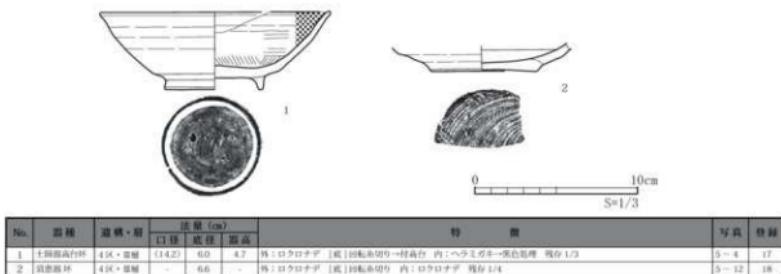
### 【SK310】(第22・37図)

3区北東部で検出した土坑である。検出したのは土坑の北側である。長軸で60cm以上、短軸で50cmである。断面は上が開いたU字形である。堆積層は1層で黒褐色シルトの自然堆積である。調査区の南壁断面ではSK310の底面に上幅20cm、深さ15cmの柱穴状の遺構が確認できるが、調査区外に及ぶため断面のみの観察にとどめた。遺物は出土していない。

#### ⑥その他

### 【その他の遺物】(第38図)

4区のⅢ層から土師器高台付壺(第38図-1)や須恵器壺(第38図-2)などが出土している。



第38図 4区Ⅲ層出土遺物

### 2) 近世以降

#### ①溝跡

### 【SD406】(第22図)

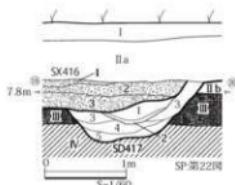
4区の南側で検出した。溝跡の両端部は調査区外である。Ⅱ層(盛土層)から掘り込まれている溝跡で、掘り下げは行わなかった。規模は検出総長1.7m、上幅2~2.6mである。側溝跡断面では堆積層が2層あることを確認できる。いずれも自然堆積である。

### 【SD414】(第22図)

4区の北側で検出した。溝跡の両端部は調査区外である。断面は2時期(a→b)がある。Ⅱ層(盛土層)より掘り込まれる溝跡で、掘り下げは行わなかった。検出面で見ると、a期の規模は検出総長80cm、上幅30cm、堆積土は黄灰色粘土質シルトである。b期の規模は検出総長が80cm、上幅11cm以上で、堆積土はにぶい黄色シルトである。遺物は出土していない。

### 【SD417】(第22・39・40図、写真版図4-②)

4区の北端部から5区にかけて検出した。溝跡の両端部は調査区外である。方角は東で12度、北に偏している。Ⅱb層(旧耕作層)より掘りこまれている。遺構の掘下げは行わず、調査区東壁での断面観察にとどめた。溝跡の上位は近現代のSX416水成堆積層に埋没する。規模は4~5区の検出総長で20m、上幅80~96cm、深さ75cmである。埋土は5層に細分されるが、いずれも灰色~黒色粘土の自然堆積である。検出の際に上位層より金属製の六角ボルトネジと印判手の磁器碗(第40



溝跡番号	土色	土性	特徴
SD416	1 黄褐色 (SY5/1)	粘土	内底である。現代の洪水の後の水成堆積物。II (日耕作土) とⅢ (日耕作土) とⅣ (日耕作土) の境に見られる。
	2 棕褐色～褐灰色 (SY6/2～SY7/2)	粘土	樹化鉄沈着。I 層との境は不明。現代の洪水の後の水成堆積物。ⅡとⅢ (日耕作土) とⅣ (日耕作土) の境に凹凸が見られる。
	3 オリーブ黒色 (SY3/1)	粘土	I 層との境に凹凸が見られる。
SD417	1 黑色 (SY4/1)	シルト質粘土	自然堆積。
	2 にぼい褐色 (SY6/2)	粘土	自然堆積。
	3 黑色 (SY4/1)	シルト質粘土	自然堆積。
	4 黑色 (SY4/1)	粘土	粘性強、樹化鉄が検出する。自然堆積。
	5 黑色 (SY2/1)	粘土	極めて軟弱で、樹化鉄が検出する。自然堆積。

第39図 SX416 (水成堆積層)・SD417溝跡断面図



第40図 SD417溝跡出土遺物

図) が出土した。このSD417溝跡より北側では遺構密度が極めて希薄になることから、居住域北辺を区画する溝跡である可能性がある。

## ②その他

### 【SX416 (水成堆積層)】(第22・39・42図、写真図版4-②)

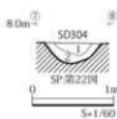
4区北部から7区にかけて分布するが、7区西部のSD703溝跡より西側では分布していない。SD417溝跡より新しい。SD417溝跡から北に向かって緩やかな傾斜で堆積し、底面はほぼ水平である。4区北端部の深さは40~50cmである。4区(SD417)から7区(SD703)間に形成された幅50m前後の南西~北東方向の流路跡に堆積した水成堆積層と考えられる。近代の洪水の氾濫によって形成された可能性もある。

## 3) 時期不明

### ①溝跡

#### 【SD304】(第22・41図、写真図版3-②)

3区中央で検出した円弧状の溝跡である。西側に膨らむ弧を描く。規模は検出総長3.8mで、上幅60~80cmで、底幅30~50cm、深さ30cmである。断面形は上が開くU字形である。埋土は2層から成るが、いずれも自然堆積である。遺物の出土はない。



層	土色	土性	特徴
1	河白色 (SY7/2)	粘土	オリーブ黒色シルト層を含む。自然堆積。
2	オリーブ黒色 (SY3/1)	シルト質粘土	自然堆積。

第41図 SD304溝跡断面図

【5・6・7区】(第42図、写真図版4-③~⑧)

(1) 検出状況

5・6・7区は長方形の耕作地の縁辺に沿って、南・東・北を「コ」の字状に巡る調査区である。畑地南辺でクランク状の5区(全長28m)、南北方向に展開する6区(全長27m)、北辺東西方向の7区(全長67m)である。遺構密度が希薄であることから、ここでは一括して述べる。

現況地表面の標高を比較すると、調査区北端の7区は南端1区より60~70cm低く、周囲は水田である。4区北端部から分布するSX416水成堆積層は北ほど厚く堆積し、7区中央部では80cmに及んでいる。検出した遺構は井戸跡1基、溝跡4条、土坑1基、小ピット類で、遺構密度は希薄である(第42図)。遺物も極めて少なく、5・6・7区は遺跡の中心部から外れていると推定される。

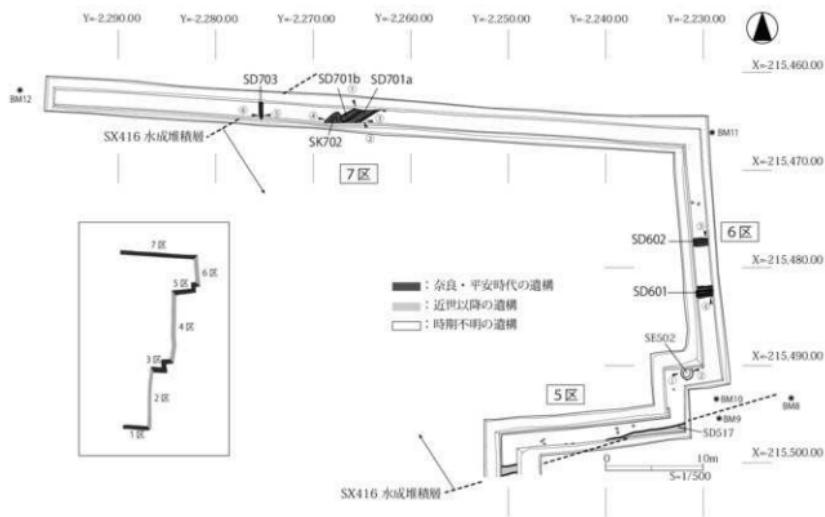
(1) 検出遺構と遺物

1) 奈良・平安時代

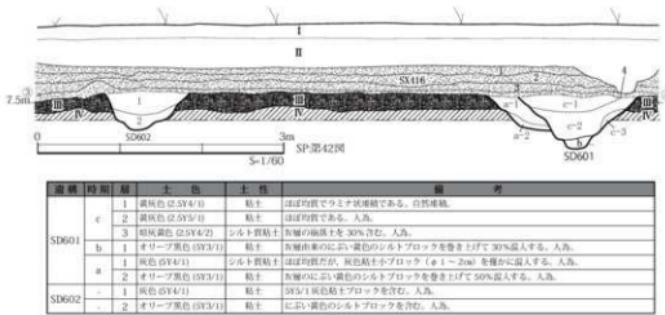
①溝跡

【SD601】(第42・43図、写真図版4-⑤奥の溝)

6区中央部で検出した東西方向の溝跡である。3時期(a→c)がある。a期の溝跡は新期(c)の溝に埋され、一部のみ残存する。断面は皿状である。規模は検出総長1.8m、上幅80cm以上、下幅30cm以上、深さは40cmである。堆積土は2層で、いずれも人為的埋土である。b期は底面のみ残存



第42図 5・6・7区の遺構平面図



第 43 図 SD601・602 溝跡断面図

する。断面は逆台形で、規模は残存部上幅で 35cm、下幅 20cm、深さ 64cm である。確認できる堆積土は単層で、人為堆積である。c 期の断面は逆台形で、規模は検出総長 1.8m、上幅 1.46m、下幅 50cm、深さ 50cm である。堆積土は 3 層に分けられ、埋 1 層は自然堆積、埋 2・3 層は人為的埋土である。出土遺物はない。

#### 【SD602】(第 42・43 図、写真図版 4-⑤手前の溝)

6 区中央部で検出した東西方向の溝跡である。断面は上の開いた U 字形である。規模は検出総長 1.8m、上幅は 1.1m、下幅 20cm、深さ 48cm である。堆積土は 2 層で、いずれも人為的埋土である。出土遺物はない。

#### 【SD701】(第 42・44 図)

7 区中央部で検出した東西方向の溝跡である。溝跡の両端部は調査区外である。SK702 と重複し、SK702 より古い。方向は東で 30 度、北に偏している。2 時期 (a → b) が認められる。a 期の規模は検出総長が 2.7m、上幅 1m 以上、下幅 80cm、深さ 40cm である。断面は皿状を呈する。堆積土は 3 層で、上位 2 層が自然堆積、下位 1 層が人為的埋土である。b 期の溝跡の断面は、上の開いた U 字形である。規模は検出総長が 2.7m、上幅 52cm、下幅 30cm、深さ 14 ~ 30cm である。堆積層は 1 層あり、自然堆積である。出土遺物はない。



第 44 図 SD701 溝跡断面図

#### 【SD703】(第 42・45 図、写真図版 4-⑦)

7 区中央よりやや西側で検出した南北方向の溝跡である。溝跡の両端部は調査区外である。断面は逆台形で、規模は検出総長が 2m、上幅 1m、下幅 20cm、深さ 50cm である。堆積層は 3 層で、埋 1・2 層が人為的埋土、埋 3 層が自然堆積である。遺物は出土していない。

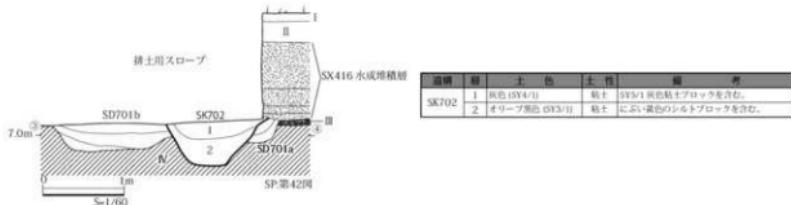


第45図 SD703 溝跡断面図

## ②土坑

### 【SK702】(第42・46図)

7区中央部で検出した土坑である。SD701溝跡より新しい。検出したのは土坑の北側で、規模は検出長総で長軸1.3m、短軸1.2mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積層は2層で上層が人為的理土、下層が自然堆積である。遺物は出土していない。



第46図 SK702 土坑断面図

## 3) 時期不明

### ①井戸跡

#### 【SE502】(第42・47図、写真図版4-④)

5区東部で検出した素掘りの井戸跡である。円形で、規模は直径は1.2m、深さは96cmである。断面は逆台形である。埋土は2層に分けられ、埋1層は自然崩落土、埋2層は自然堆積である。出土遺物はない。



第47図 SE502 井戸跡断面図

## 第6節 小括

### (1) 遺構の分布状況と時期

今回の調査で設定した7つの調査区のうち、検出された遺構は1～4区で比較的多いものの、5区より北では極端に分布が希薄である。調査地点は地形的に自然堤防の北縁に位置し、遺跡の中心からは外れた場所に当たることから、このような遺構の分布状況になっていると考えられる。遺跡の中心部は、現在、民家などが点在する南側の微高地（写真図版1-②）と推定される。

遺物は量的には少ないものの、奈良・平安時代、中世、近世の各時代の遺物が出土している。出土遺物や堆積土の状況などからすると、今回の発掘調査で検出した遺構は奈良・平安時代および江戸時代後期～明治時代初頭に属するものとみられるが、遺構に共伴する遺物が少なく、個々の遺構の時期の限定は難しい。

奈良・平安時代の遺構とみられるのは、2区：SD204・205・207・208溝跡、3区：SX308竪穴状遺構、SD301・302・303・305・306・307溝跡、SK309・310土坑、4区：SB413掘立柱建物跡、SI408竪穴建物跡、SX409・411・412竪穴状遺構、SD401・402・404・405・407溝跡、6区：601・602溝跡、7区 SD701・703溝跡である。出土遺物が少なく断片的であることから、遺構の年代の特定は難しいが、出土した土師器環の調整技法の主体はロクロ成形、内面放射ミガキ・黒色処理、回転糸切り無調整であり、概ね9世紀代が中心と言える。しかし、SI408竪穴建物跡の堀り方理土からは有段丸底杯（写真図版5-11）の破片が出土しており、また、流れ込みの遺物ではあるが、1区のSX109（近世以降）からは赤焼土器環の底部が出土している。これらを勘案すると、確認した遺構の主体は9世紀を中心とするものの、8～10世紀の時代の幅を持つと推定される。

なお、奈良・平安時代の遺構のうち、SD301・302溝跡、4区のSD404・405溝跡のように幅約3mで平行に近接し、規模・断面形・堆積土が近似する溝跡は、道路側溝である可能性も想定される。SB413掘立柱建物やSI408竪穴建物、SX411・412竪穴状遺構なども、これらの区画を意識したものと考えられる。

中世の明確な遺構は確認できなかったが、陶器片の出土が1点見られた。2区のSD209溝跡から出土した中世陶器（第21図-2、写真図版5-18）である。SD209溝跡は時期不明の遺構としたが、中世の可能性もある。確認調査の際にも今回の調査区の西側で中世陶器1点が出土しており、周辺部には中世の遺構が存在すると考えられる。

近世以降の遺構は1～5区で確認した。特に1・2区に井戸跡（5基）と柱穴が集中しており、この周辺が調査地南側の微高地から続く居住域に含まれると考えられる。1区のSX109窪地状遺構および2区のSD206溝跡の上位層からまとまった数の近世陶磁器が出土している。それらは江戸時代後期～明治時代に操業した相馬大堀産・長井屋窯跡産とみられる碗や、同時代の相馬大堀産の三彩土瓶（第19図-1）、また、検出時に出土した切込焼第Ⅲ期（1860～1870年）の角皿（第19図-2）等、日常雑器である。大正～昭和の遺物が入らないことから、盛土層（Ⅱ層）が施される以前の、江戸時代後期から明治時代初頭にかけての遺構と考えられる。また4区では東西方向に延びるSD417

溝跡を確認した。昭和 22 年の空中写真（写真図版 1-2）ではこの溝が南側の微高地上畑地と北側の低地水田の境界となっている。SX416 水成堆積層はこの低地水田部分に堆積している。堆積層からは自判手の磁器碗や鉄製の六角ボルトが出土しており、近代に発生した大水害によって形成された可能性が高いと考えられる。

## （2）清水遺跡の範囲

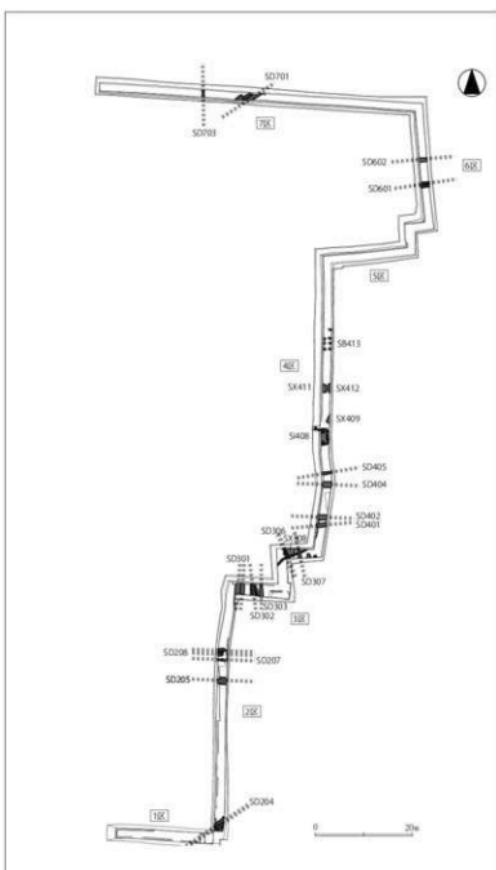
すでに述べたように、今回の調査地点は地形的にみると東西方向に延びる自然堤防の北縁に当たり、標高はこの付近から北へ向かって徐々に低くなっている。自然堤防の南側には蛇行する東西方向の旧河道が認められる。今回の調査区では北側ほど遺構の分布がまばらになり、遺物も少量の出土にとどまっている。

検出した奈良・平安時代の掘立柱建物跡や竪穴状遺構、溝跡などは 3・4 区を中心に分布しているが、掘立柱建物跡はいずれも代替えられた痕跡がなく、遺構の重複

もほとんど見られない。当該期の利用期間は比較的短い可能性がある。こうした状況からも、今回の調査地点が遺跡の中心域からは外れた周縁部にあたるものと推定される。

これらの時代のほかに中世の遺物も少量ながら含まれている。清水遺跡の南東約 1km には中世の城館跡である西館館跡が位置している（第 2 図）。西館館跡も清水遺跡も、旧河道により形成された同じ微高地上の北縁にある。清水遺跡周辺の中世遺構も、今回の調査区のさらに南側に分布すると考えられる。

近世以降の遺構は 1・2 区に集中し、井戸跡も 5 基を数えることから、江戸時代後期から明治初頭には、複数の家屋敷が存在していたと考えられる。4 区北では微高地の縁辺に沿う SD417 溝跡を検



第 48 図 奈良・平安時代の遺構分布図

出しており、これより北では近世の遺構がほとんど存在しない。昭和22年の空中写真でも、畑地と水田の境界として確認できる。またこのSD417溝跡以北にはSX416水成堆積層が広範囲に堆積する。

各調査区の出土した遺物や遺構の分布から見ると、奈良・平安時代は3・4区、近世以降は1・2区付近に偏在するものの、5・6・7区ではいずれの時代の遺構も極めて希薄で、遺跡の中心から遠ざかるのは明らかである。こうした傾向から、遺跡の中心は調査区南側の微高地上に広がる可能性が高い。



1. 清水遺跡周辺の空中写真 国土地理院（平成 25 年撮影：CTO201311-C19-36）



2. 清水遺跡周辺の空中写真 国土地理院（昭和 22 年撮影：USA-MS17-29）

写真図版 1 清水遺跡付近の空中写真



①. 下名生地区遠景（南から）



②. 1区全景（南東から）



③. 1区全景（西から）



④. 2区全景（南から）



⑤. 2区全景（北から）



⑥. 2区 SX109・SD204溝跡（東から）



⑦. 2区 SE210 井戸跡（南東から）



⑧. 2区 SD209 溝跡（南東から）

写真図版2 1・2区遺構



①. 3区東部（西から）



②. 3区中央（北から）



③. 3区 SD303・SD302・SD301 溝跡（北から）



④. 3区 SX308 竪穴状遺構（北から）



⑤. 4区北部（北から）



⑥. 4区 SB413 捩立柱建物跡（西から）



⑦. 4区 SI408 竪穴建物跡（北から）



⑧. 4区 SX409 竪穴状遺構（西から）

写真図版3 3・4区遺構



①. 4 区 SX411 竪穴状遺構・412 風倒木跡（西から）



②. 4 区 SD417 区画溝・SX416 水成堆積層（西から）



③. 5 区 全景（西から）



④. 5 区 SE502 井戸跡（南から）



⑤. 6 区 全景（北から）



⑥. 7 区 全景（東から）



⑦. 7 区 SD703 溝跡・SX416 水成堆積層（北から）

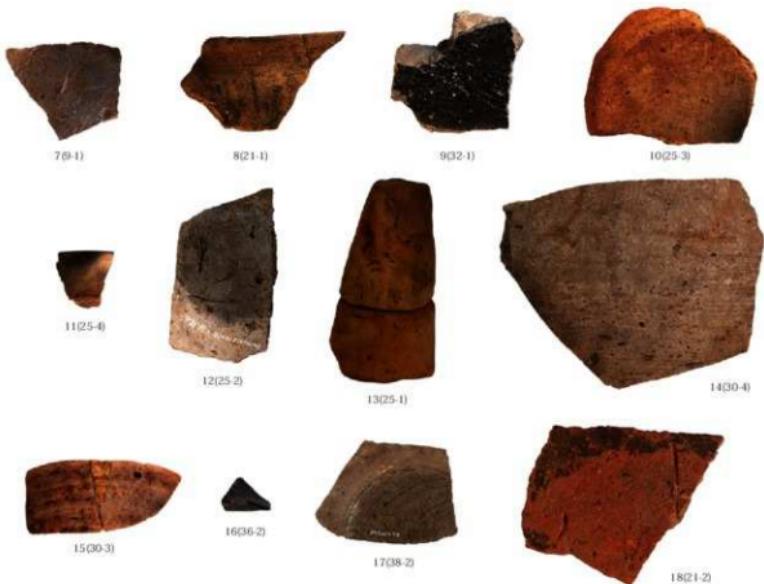


⑧. 7 区 SX416 水成堆積層（南から）

写真図版 4 4～7 区遺構



3区：1・2 1：土師器環 2：土師器環  
4区：3～6 3：土師器高台环 4：須恵器環 5：土師器環 6：土師器環  
縮尺=1/3 帯括弧内は本文図版番号



2区：7・8・18 7：須恵器甕 8：土師器甕 18：中世陶器  
3区：9 9：須恵器甕  
4区：10～17 10：土師器甕 11：土師器環（有段付丸底）12：須恵器環 13：カマ下支柱 14：須恵器甕  
15：土師器環 16：須恵器高环 17：須恵器環  
縮尺=1/3 帯括弧内は本文図版番号

#### 写真図版5 出土遺物



## 第Ⅳ章 宮前遺跡・西館館跡の発掘調査

### 第1節 調査地の位置

今回の調査地点は、阿武隈川と白石川が合流する沖積地の自然堤防上～低地にあり（第2図）、前述の清水遺跡からは南西約1kmに位置する。周辺よりやや高い自然堤防上には民家や畠地が広がり、低地部は水田として利用されている。宮前遺跡・西館館跡の所在する自然堤防は標高がおよそ9～10mほどあり、調査地はこの自然堤防の北縁付近にあたっている（第49図・写真図版6-1）。この調査地点付近から北および北東側に向かって徐々に低くなっている。調査地点の標高は約8～9mほどである。調査区には、阿武隈川や白石川を含む周辺の河川から供給されたとみられる砂質シルト～シルト等が厚く堆積する。

### 第2節 確認調査について

中名生地区ほ場整備事業計画に伴い、当該地区における確認調査を2回（2018年2月26日～3月9日、2018年10月9日～10月29日）に分けて実施した。現在の地形とは場整備事業による水路や道路、切土計画地を踏まえて、2017年度は1区・2区及びこれ以東の地点に30本のトレチ、2018年度は3区～5区付近を対象として32本のトレチを設定して確認調査を実施した（第49図）。その結果、1区～5区付近は自然堤防の北縁にあたり、北側および東側には後背湿地が広がる地形であること、自然堤防の北縁には古墳時代～古代のものとみられる柱穴、溝跡、土坑など、数は少ないが遺構が分布することなどが判明した。

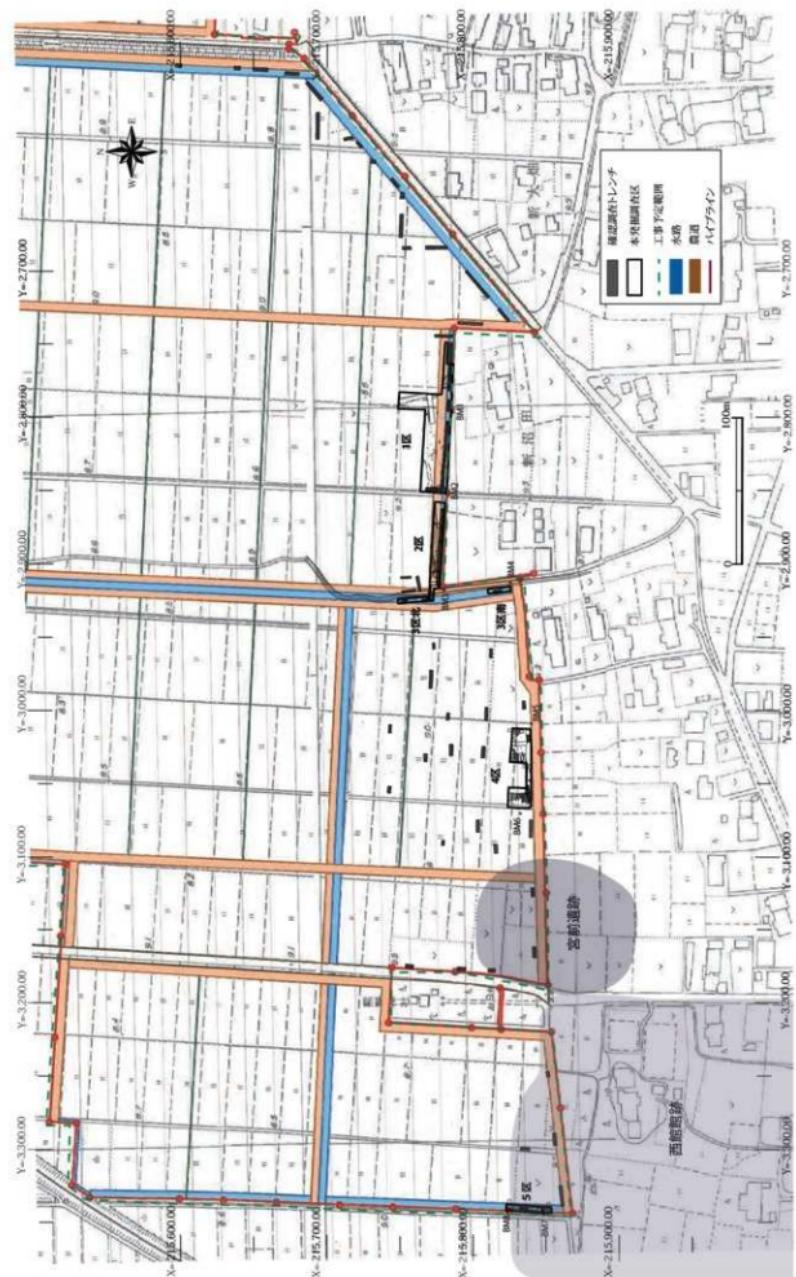
確認調査後には関係機関で再協議を行い、田面切土地点においては8～13cmほどの嵩上げを行い、ほ場整備工事の際の切土によって遺構面に影響が及ぶ範囲を少なくするなど、工事計画の一部変更を行うことにした。

### 第3節 本発掘調査の方法と経過

本発掘調査の対象区域は、排水路・パイプライン、田面切土等が予定されている5地区（1区～5区）である（第49図）。町及び県の関係機関による事前協議を踏まえ、5区→1区の順番で調査に着手し、発掘調査は2019年10月1日（月）から開始した（第50図、写真4・5）。

発掘調査では、工事計画および2017・2018年度に実施した確認調査の結果を踏まえて各調査区を設定した。1区・2区では、農道（幅5m）の両側に排水路とパイプラインが設置される区域については農道部分においても表土を全面剥いで遺構の分布状況を確認することにした。また、田面切土が計画されている1区及び4区では、遺構検出面が現表土面より深さ40～50cm以上あり、切土（厚さ：14～24cm）及びほ場整備後の水田耕作（深さ：15～20cm）によっても遺構が影響を受けないことが判明したことから、これらの田面切土の区域も基本的に確認調査にとどめることにした。

発掘調査面積は、総計2,855m<sup>2</sup>（1区：1,576m<sup>2</sup>、2区：446m<sup>2</sup>、3区南：49m<sup>2</sup>、3区北：64m<sup>2</sup>、4区：585m<sup>2</sup>、5区：136m<sup>2</sup>）である。



第49図 調査区配図



写真4 調査風景（4区）



写真5 調査風景（5区）

地区	2017年度		2018年度				2019年度		11	12
	7	8	9	10	11	12	1	2		
確認 調査	2/26 → 3/8			10/9 → 11/20						
1							11/20	12/24		
2							11/28	12/24		
3							11/18 → 11/19	12/11 → 12/18		
4				3/4			11/19			
5				10/1			11/23			

第50図 発掘調査の経過

各調査区の表土等の掘削にはバックホー（0.45m<sup>3</sup>）を使用した。各調査区の深さは、-40～100cmほどである。湧水のために遺構検出が難しい調査区では、調査区壁面に沿って幅30cmほどの排水路を設けた。また、地層確認のため、調査区の一角（50cm×50cm）をスコップで深掘し、さらにハンドオーガーを使用した場合もある。

平面図（調査区）の記録に際しては、トータルステーション及び電子平板システム（遺構くん）を用いた。測量に当たっての基準点（第49図：BM1～BM8）の座標値は以下のとおりである。

BM1 : X= - 215,785.916	Y= - 2,798.524	BM5 : X= - 215,839.781	Y= - 3,011.684
BM2 : X= - 215,782.479	Y= - 2,854.447	BM6 : X= - 215,832.306	Y= - 3,072.962
BM3 : X= - 215,780.205	Y= - 2,920.452	BM7 : X= - 215,848.272	Y= - 3,346.320
BM4 : X= - 215,825.633	Y= - 2,914.892	BM8 : X= - 215,822.988	Y= - 3,344.188

断面図は基本的に縮尺=1/20で作成した。地層の柱状図も適宜作成した（第51図）。写真撮影には、一眼レフデジタルカメラ（CanonEOS 7D 1,800万画素）を使用した。

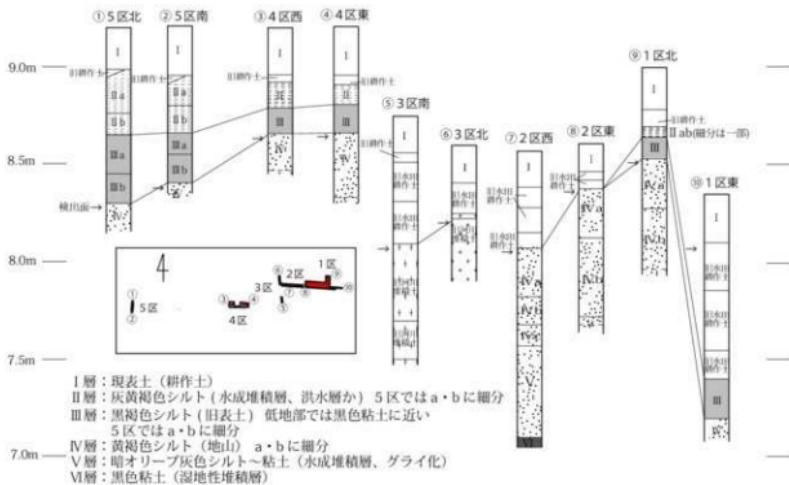
発掘調査期間中の11月9日（土）には、地元を対象とした見学会を開催し、約70名の参加者があった。発掘調査は12月24日（火）に終了し、12月25日（水）には機材撤収を行った。調査区の埋め戻しは、4区・5区については12月中、1区～3区は年明けの1月に行った（第50図）。

なお、調査期間中に、台風19号による大雨のため周辺一帯が冠水し、その後、湧水のために2～3週間ほどは調査の進捗に大きな影響が出たが、調査区や遺構が大きく崩落するなどの被害は生じなかつた。

#### 第4節 基本層序

基本的には次のように分層される。I層：現表土（水田・畑耕作土、層厚15～20cm）、II層：黄褐色シルト層（水成堆積層、層厚10～20cm、地點によってはa・bに細分）、III層：黒褐色シルト層（旧表土、層厚10～20cm、地點によってはa・bに細分）、IV層：黄褐色シルト～粘土質シルト層（層厚50cm以上、a・bに細分）、V層：暗オリーブ灰色シルト～粘土（グライ化、水成堆積層、層厚50cm以上）、VI層：黒色粘土層（湿地性堆積層）。各調査区の層序柱状図は下の第51図に示したようになる。

なお、各調査区ともI層（現表土）下には近世以降の旧耕作土（水田・畑）が認められる。また、各調査区に堆積するII層（黄褐色シルト）はこの付近一帯を覆っている水成堆積層とみられ、近世～近代期の洪水によって形成された可能性が高い。3区では旧河川跡の堆積層が確認されている。



第51図 層序柱状図



写真6 1区東の北壁断面

## 第5節 各区の発掘調査

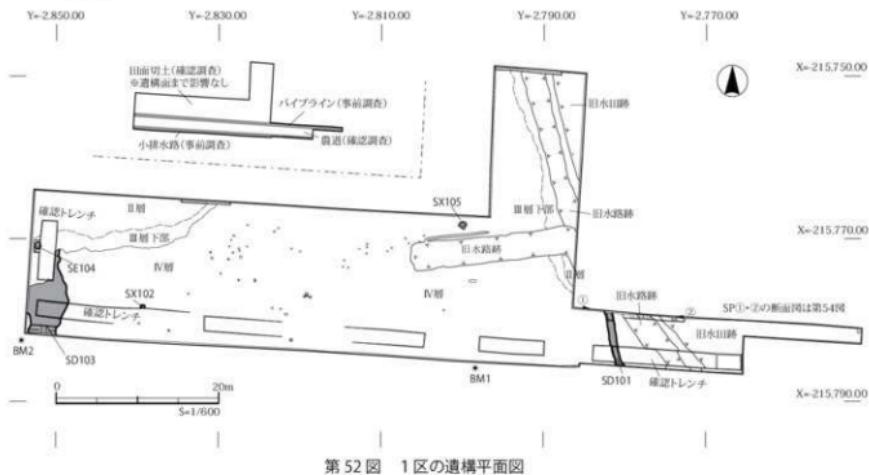
### 【1区】(第52～57図、写真図版7・8)

#### (1) 検出状況

現況は畑地（休耕地含む）、水田である。開田などによって地形がやや改変されているが、この地点はもともと北へ舌状に張り出す微高地であったと推定される。北～北西及び東へ向かって徐々に低くなっているが、調査区東端部ではⅢ層（旧表土）が東へ向かって大きく傾斜して湿地化する状況が確認された。また、北西部でもⅢ層が徐々に北へ傾斜する状況が認められた。調査深度は、西～中央部付近が-50cm、東端部が-30cmほどである。

遺構は、畑地では現表土下約50cmほどのIV層上面、東側の水田では現表土下約30cmほどのIV層上面で検出した。全体的に遺構の密度は低い。検出遺構には、井戸跡1基、溝跡1条、土坑墓（焼骨片・焼土等含む）1基、焼土・炭化物集中1ヶ所、小ピット類、自然流路跡（沢状遺構）1条などがある（第52図）。これらの遺構は概ね古墳～古代のいずれかの時期に属するものとみられる。なお、調査区東側では近代以降の水田跡、水路跡が確認された。

遺物は、Ⅲ層を中心として、縄文土器、古墳前期の土師器（高环ほか）、古代の土師器片（壺ほか）などが少量出土した（第57図）。なお、II層からは近代以降の磁器片（写真図版15～8）が出土している。



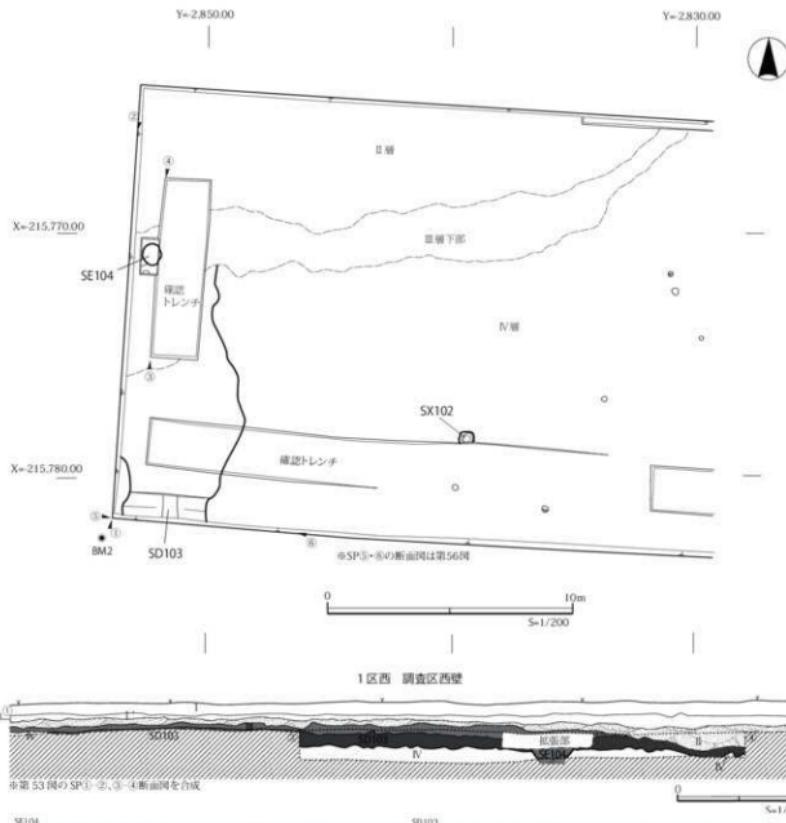
第52図 1区の遺構平面図

#### (2) 検出遺構と遺物

##### ①井戸跡

##### 【SE104】(第53図、写真図版8-③)

調査区西端部で検出。SD103 自然流路跡の堆積土を掘り込んでおり、径0.75mの円形を呈する。検出面が工事（田面切土）により影響を受けない深さであるため、平面での確認のみにとどめ、掘り



第53図 1区西の遺構平面図・西壁断面図

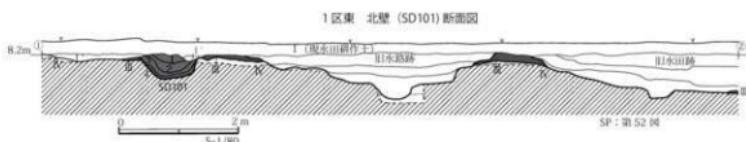
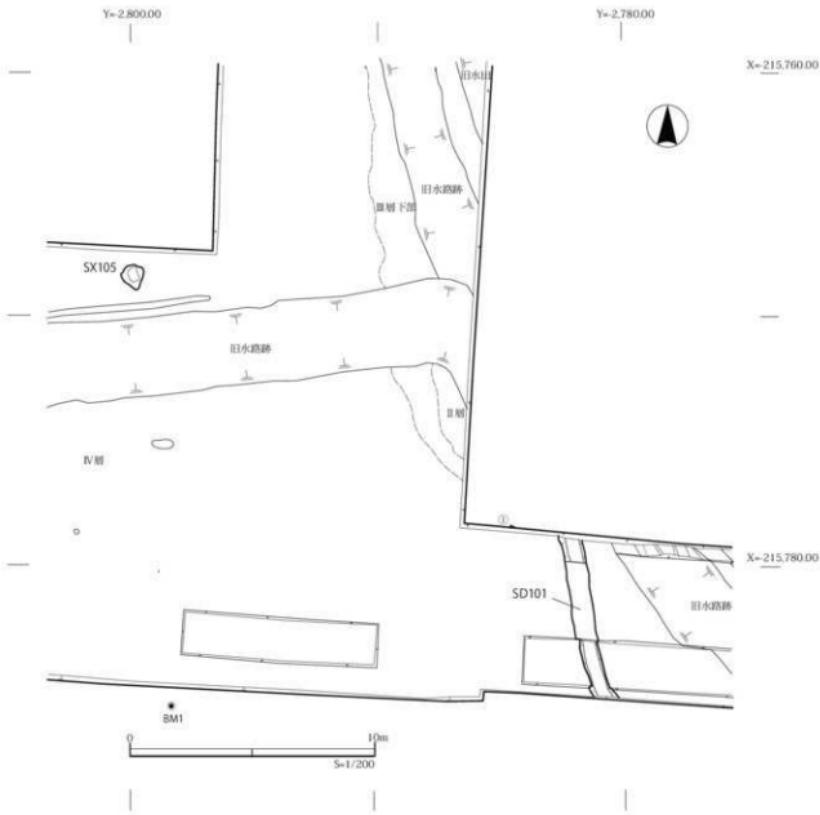
下げていない。堆積土上面は黒褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

## ②溝跡

### 【SD101】(第54図、写真図版7-⑦・⑧)

調査区東側で検出した南北方向の溝跡。一部のみ掘り下げた。規模は上幅1.1m、底幅50cm、深さ35cmほどである。断面は逆台形状を呈し、底面はやや凹凸がある。堆積土は5層に分けられ、上部は褐灰色～灰黄褐色シルト、褐色シルト、下部はにじむ黄褐色シルトの自然堆積層である。

遺物は、須恵器環の底部（手持ちヘラケケズリ）破片、土師器小片がごく少量出土したほか、摩滅が著しい縄文土器片が数点出土した。



層	土色	土性	層厚
1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	黄褐色ブロック ( $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ )、褐色ブロック ( $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ ) を含む。粘性中。しまりなし。
2	灰黃褐色 (10YR4/2)	シルト	底部は黄褐色ブロック ( $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ ) を含む。酸化鉄を含む。しまり弱。粘性中。
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化鉄及び黄褐色ブロック ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) を含む。しまり強。粘性中。

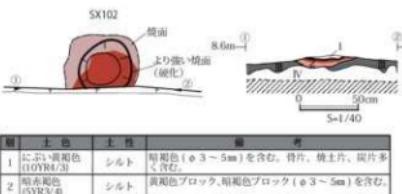
第54図 1区東の遺構平面図・北壁 (SD101) 断面図

### ③土坑墓

#### 【SX102】(第 53・55 図、写真図版 8-④・⑤)

調査区西側で検出した。白色化した焼骨片や炭化物や焼土粒を多量に含む浅い土坑墓で、底面は被熱で赤変・硬化している。確認調査の際に一部削平してしまったが、長軸 80cm、短軸 50cm ほどの楕円形状を呈する

とみられる。確認面からの深さは 3 ~ 4 cm。



第 55 図 SX102 土坑墓平・断面図

断面形は浅い皿状を呈する。堆積土には II 層起源とみられる黄褐色シルトブロックが不均質に多く含まれており、人為的に埋め戻されたとみられる。検出状況や堆積土からすると、本来は II 層(近世～近代以降)堆積後に掘り込まれたやや大きな深い土坑墓で、その底面の一部が残存したものである可能性が高い。なお、焼骨片は、分析の結果、成人男性であることが判明した(第 V 章第 1 節)。

### ④炭化物集中地点

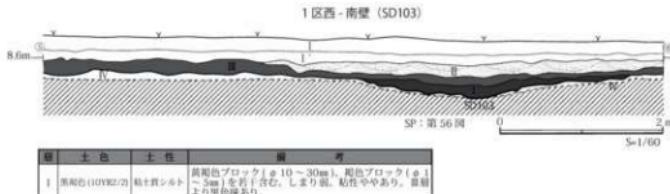
#### 【SX105】(第 54 図、写真図版 8-⑥)

調査区北東部で検出した。径 80 ~ 90cm ほどの不整円形状の範囲に炭化物や焼土粒が分布する。底面は被熱でやや赤変し、若干硬化している。土壤を採取し、フレイ(5 mm × 2 mm)にかけたが、遺存物はなかった。

### ⑤自然流路跡

#### 【SD103】(第 53・56 図、写真図版 8-①・②)

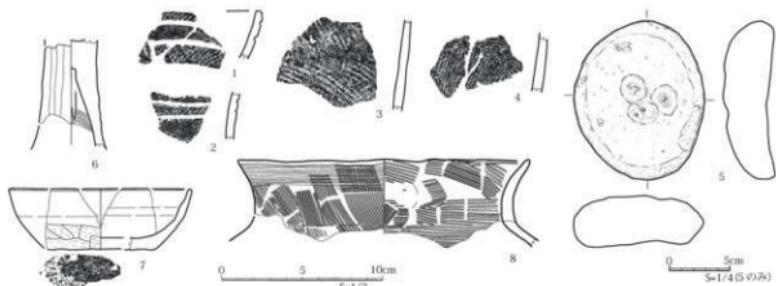
調査区西端で検出した。掘り下げは南側の一部にとどめている。調査区南壁部では上幅 3.5 m、底幅 1.5 m、深さ 20 ~ 30cm ほどであるが、北へ向かって上幅が広くなり、底面も徐々に北へ傾斜して幅も広くなる。南の微高地から北の低地へ向かう小さな沢状の自然流路の一部とみられる。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は比較的均質な黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。



第 56 図 SD103 溝跡断面図

### ⑥その他の遺構と遺物

調査区中央付近には小ピット(径 15 ~ 20cm)が点在するが(第 52 図)、規則的な配置は見られない。調査区東側では近代以降の水田跡や水路跡が確認された。遺物は、III 層(旧表土)から、縄文土器の小片(第 57 図-3・4)や凹石(第 57 図-5)、古墳時代前期の高杯脚部・甕(第 57 図-6・8)、古代の土師器片などが少量出土した。縄文土器片は、調査区中央北付近からの出土がやや目立つ。



第57図 1区の出土遺物

### 【2区】(第58～64図、写真図版8～10)

#### (1) 検出状況

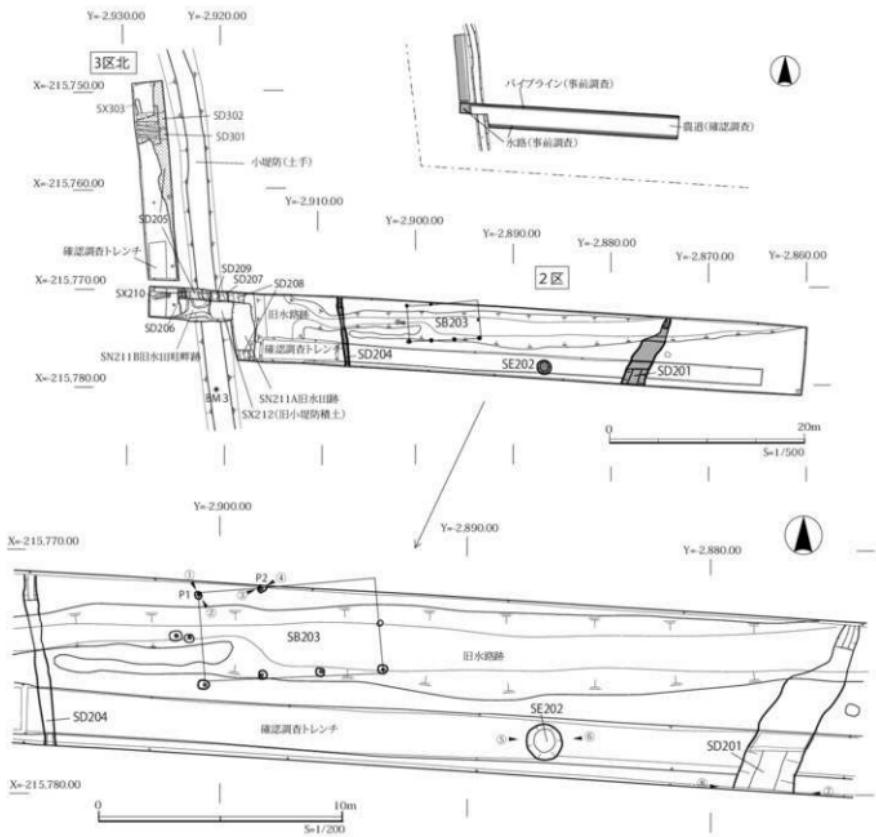
現況は水田で、西側には旧河川に沿って構築されたとみられる南北方向に延びる小堤防(通称七草堤: 高さ約1.5m、基底幅約3.5m)がある。調査区は近世以降から現代に至るまでに造営された水田によって削平を受けているため、旧表土のⅢ層(黒褐色シルト層)はほとんど残存しておらず、水田耕作土下はIV層(黄褐色シルト層)となる。調査深度は-30cmほどである。

遺構は散漫な分布状況であった。調査区中央～東側では、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡1条、自然流路跡1条、調査区西側の小堤防下では溝跡が確認されたのみである(第58図)。これらのうち、SB203 掘立柱建物跡、SE202 井戸跡、SD204 溝跡、SD201 自然流路跡は、出土遺物や堆積土などの状況からみて古代もしくはこれ以前の時期のものと推定される。

小堤防(土手)の下、あるいはこれに沿ってほぼ同じ位置で確認された溝跡5条(SD205～SD209)は、近世以降の旧水田跡に伴う水路跡の可能性が高い。また、現在の小堤防は、これらの溝跡や近世～近代期とみられる旧水田跡(SN211A～C)の耕作層、II層(洪水層)の上部に構築されていることから、小堤防が現在のような規模に造成されたのは近代以降になってからとみられる。なお、旧小堤防(SX212)は、旧水田跡(SN211B・C)が機能していた時期のものであろう。

遺物は少なく、井戸跡や近世以降とみられる旧水田跡・溝跡(旧水路跡)などから、古墳～古代の土師器片(甕ほか)、須恵器片(甕)などが少量出土した(第64図)。また、中世陶器片が1点出土している。

No.	遺 墓	遺 構/層	現 存	法 面			特 徴	写真回数	登録
				口径	深径	高さ			
1	圓文土器 保持	直縫	口縫部	-	-	-	横位平行沈縫(すり消し縫) 圓文LR	14-1	4
2	圓文土器 保持	直縫	体部	-	-	-	横位平行沈縫(すり消し縫) 圓文LR	14-2	5
3	圓文土器 保持	直縫	体部	-	-	-	圓文LR	14-3	6
4	圓文土器 保持	直縫	体部	-	-	-	圓文LR	14-4	7
5	凹石	直縫	完形	長13.0	幅10.3	厚4.0	扁状円錐 全体やや風化	14-5	8
6	土師器 高环	直縫	開部	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	14-6	3
7	須恵器 环	SD101 理1	1/10 (11.3) (6.8) (3.7)	外:ロクロナデ→体下部へラケズリ 底部切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内:ロクロナデ	14-7	1			
8	土師器 瓢	直縫	口縫部 (18.0)	-	-	-	外:口 ハケメ→ヨコナデ 内:ハケヌ	14-8	2



第58図 2区の遺構平面図

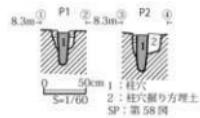
## (2) 検出遺構と遺物

### ①掘立柱建物跡

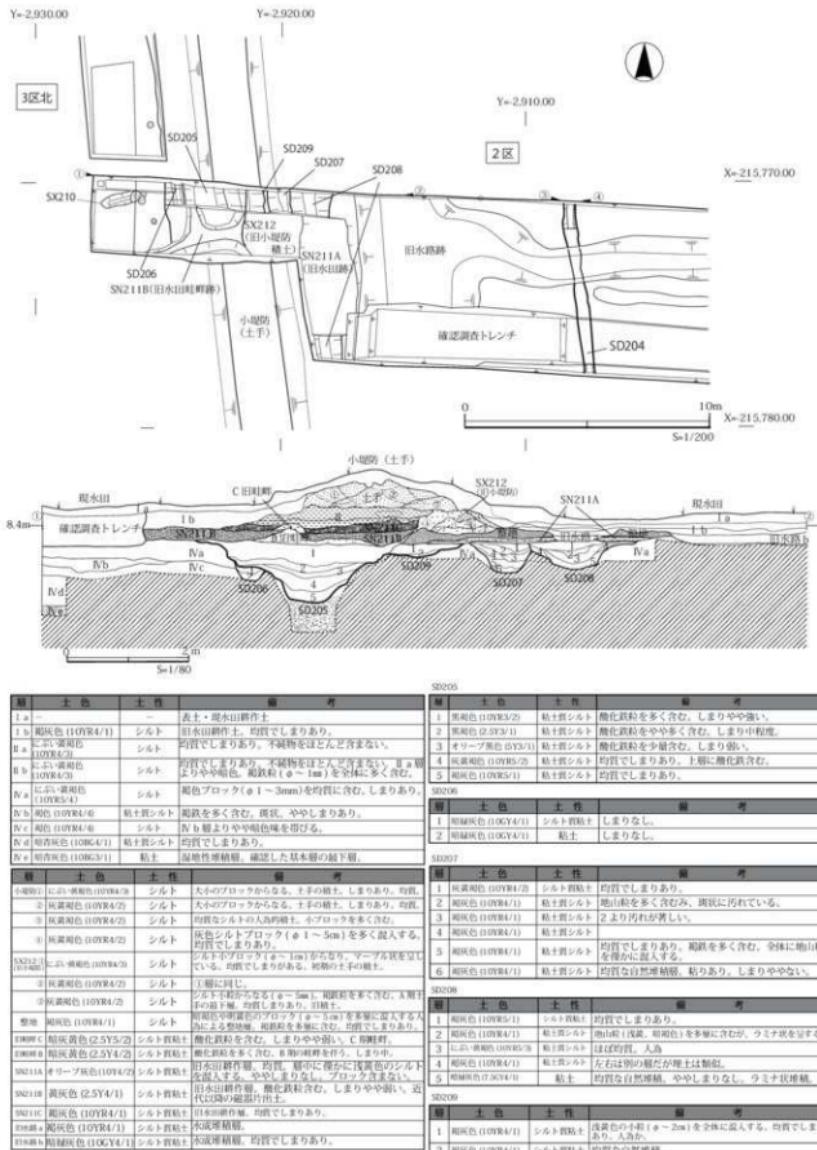
【SB203】(第58・59図、写真図版9—②～④)

調査区中央付近で検出した、2間×3間の東西棟である。北東隅は調査区外になる。旧水路を削平されており、西梁行の中央柱穴は失われている。建物規模は、桁行約7.3m、梁行約3.7m、柱間寸法は南桁行では西から2.3m・2.4m・2.5m、東桁行では北から(1.8m)・1.9mである。

柱穴掘り方は円形状で径約30cmと小さい。柱痕跡は径10cm前後



柱穴断面図



第60図 2区西の遺構と北壁断面図（小堤防、SD205 ほか）

の円形である。北柵行西側の2つの柱穴（P1・P2）を断ち削ったところ、柱穴掘り方の底面の深さは25cm程度であったが、柱痕跡の部分のみやや深くなつており、約40cmほどあった（第59図）。

柱穴掘り方や柱痕跡からは、遺物は出土しなかつた。

### ②井戸跡

#### 【SE202】（第58・61図、写真図版9-⑤・⑥）

調査区中央やや東寄りで検出した、円形（径1.4m）の素掘りの井戸跡である。深さは約1.0mほどで、比較的浅く、断面形は円筒形状を呈する。堆積土は上位（埋1～4）が黒褐色～褐灰色粘土質シルト、下位（埋5～6）が褐灰色～黒色粘土などであり、いずれも均質な埋土で、自然に埋没した状況を示している。

遺物は、上層（埋1）から土師器類の小片が出土したのみである。



第61図 SE202 井戸跡断面図

### ③溝跡（水路跡）

#### 【SD204】（第58・62図、写真図版10-①・②）

調査区西側で検出した南北方向の溝跡。北と南側の一部を掘り下げた。規模は上幅45～55cm、底幅25cm、深さ20cmほどである。断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分けられるが、いずれも黒褐色粘土質シルトの自然堆積層である。

遺物は出土しなかつた。



第62図 SD204 溝跡断面図

#### 【SD205】（第60図、写真図版10-③～⑤）

現在の小堤防の下で検出した南北方向の規模の大きい溝跡である。周辺で確認されている近世以降の水田跡にともなう水路跡とみられる。小堤防とは概ね同じ位置で南北に延びているが、3区北では十字（もしくはT字）に交差する溝跡（水路跡）が確認されている（3区の記載を参照のこと）。堆積土や切り合い関係から、SD206～SD209溝跡より新しく、また、近世もしくはこれ以降とみられる水田跡（SN211A）よりも新しいことがわかった。

2区では小堤防下の部分を一部掘り下げた。規模は上幅3.5m、底幅60～70cm、深さ1.0mであった。堆積層は5層に分けられ、上半は暗褐色粘土質シルト、下半はグライ化した褐灰色粘土

質シルトなどの水成堆積層である。

遺物は、埋1層から須恵器表の部体小片（第64図-4）が出土したのみである。

#### 【SD208】（第60図、写真図版10-⑦）

調査区西側の小堤防の際で検出した南北方向の溝跡で、旧水田に伴う水路跡とみられる。上面を覆う堆積層や切り合い関係などから、SD205より古くSD207より新しいことがわかる。

北と南側の一部を掘り下げたところ、規模は上幅1.5～1.6m、底幅70cm、深さ40cmほどであった。断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は5層に分けられるが、中位の埋3層はIV層起源とみられるにぶい黄褐色粘土質シルトが主体で、人為的な層と考えられる。最下層の埋5層はグライ化した暗緑灰色粘土である。

遺物は出土しなかった。

#### 【SD206・207・209】（第60図、写真図版10-⑦）

いずれも小堤防下の幅1mのトレンチ調査で検出した南北方向の溝跡で、SD205溝跡よりも古い。SD208と同様に、いずれも水路跡の可能性がある。SD206はSD205の壁際にあり、残存する上幅は約50cm、深さは20cm、SD209もSD205に切られており、残存する深さは20cmほどである。SD207はSD208に切られているが、上幅1.0m、深さが50cmほどあり、規模がやや大きい。

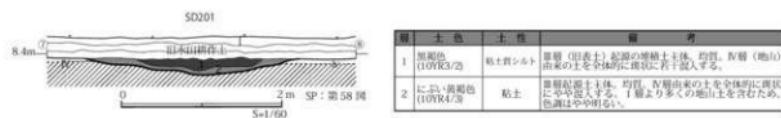
遺物はいずれも出土していない。

#### ④自然流路跡

##### 【SD201】（第58・63図、写真図版9-⑦・⑧）

調査区東側で検出した南北方向の自然流路跡である。北側は旧水路によって削平を受けている。北と南側の一部を掘り下げた。規模は上幅1.5m、深さ20cmほどで、底面は北へ向かって徐々に低くなる。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は、上部が比較的均質な黒褐色粘土質シルト、下部がにぶい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

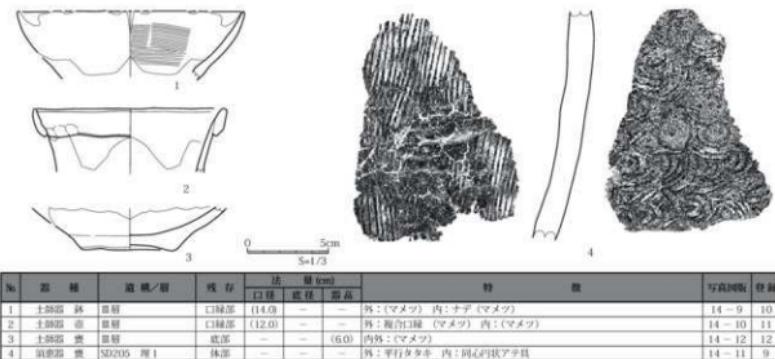


第63図 SD201 自然流路跡断面図

#### ⑤その他の遺構と遺物

小堤防付近では、現・旧水田耕作土の下に3枚の旧水田耕作層(SN211A～C)及び畦畔（第60図）の一部が検出されている。また、現在の小堤防の下では、以前の小堤防(旧)とみられる高まり(積土: SX212)も確認されている。これらは、いずれも近世あるいは近代の時期のものとみられる。

遺物は、表土やⅢ層などから古墳時代前期の土師器鉢・壺・甕(第64図-1～3)、古代の土師器杯の小片などが少量出土している。



第 64 図 2 区の出土遺物

### 【3区北・南】(第 65 ~ 67 図、写真図版 11)

#### (1) 検出状況

現況は水田であるが、1971 年作成の地図や 1962 年撮影の写真(写真図版 6 ~ 4)などからみると、現在の南北方向の小堤防(高さ約 1.5m)の西側には、この小堤防に沿って旧河道とみられる地形が反映されており、旧河川の埋没後に水田が造成されたことがわかる。調査深度は -70 ~ -80cm ほどである。

3 区北及び南の調査区からは、近世・近代以降とみられる水田跡、畦畔跡、溝跡(水路跡)などが確認されたのみである(第 65 図)。3 区北の SD205・SD301・302 溝跡は近世以降の旧水田に伴う水路跡と考えられる。

遺物は、旧水田耕作土や溝跡などから、中世陶器片(第 67 図-1)、近世・近代以降の磁器片(写真図版 15 ~ 5・8)などが少量出土したのみである。

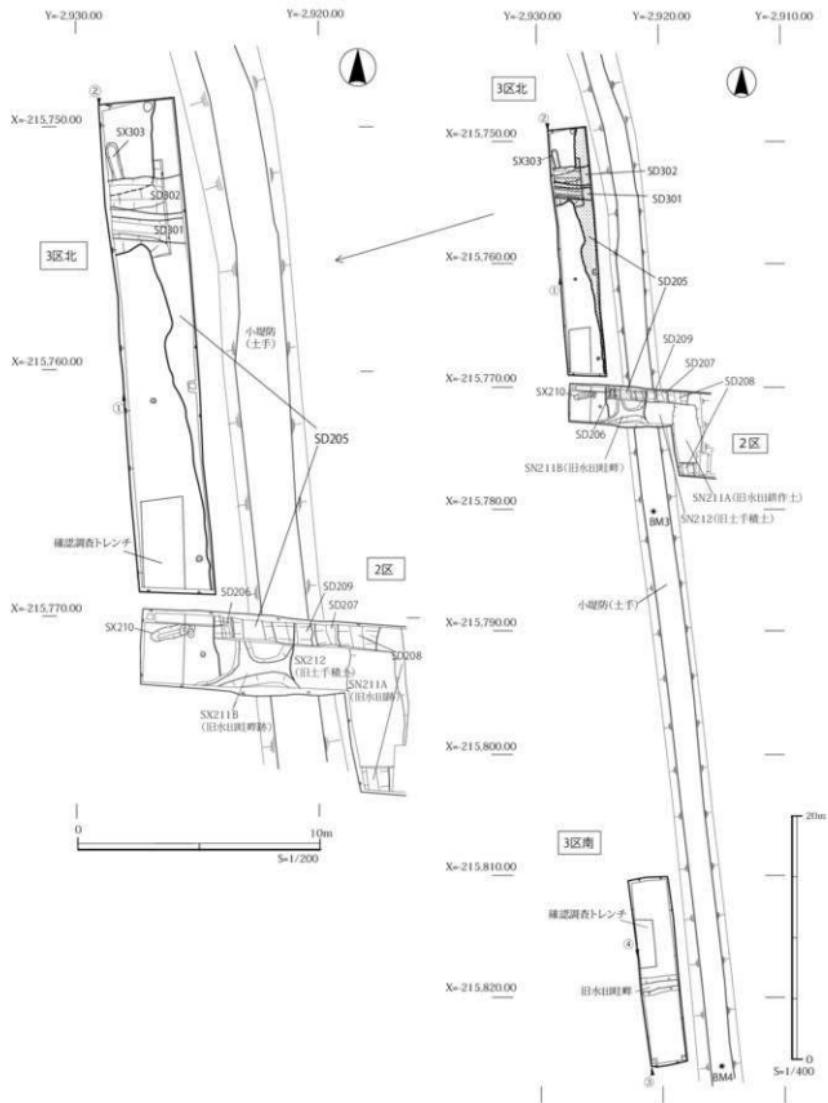
#### (2) 検出遺構と遺物

##### ①溝跡

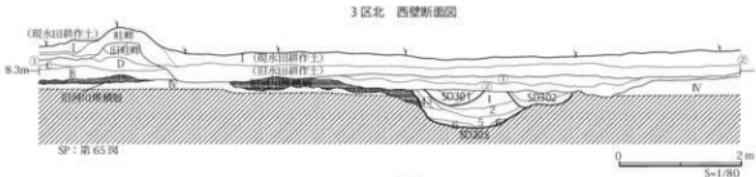
###### 【SD205】(第 65・66 図、写真図版 11-④・⑤)

3 区北の旧河川跡の堆積層上部で検出した。前述した 2 区の SD205 が北へ延び、3 区北では十字に交差もしくは T 字状に連結する、近世・近代以降とみられる溝跡(水路跡)である。近代以降の旧水田耕作土に覆われておらず、近・現代とみられる東西方向の溝跡(水路跡)に切られている。交差する部分を掘り下げたが、東西方向の溝跡の規模は、幅約 2.0 m、底幅約 80cm、深さ 65 ~ 70cm ほどである。堆積土は上部が褐色粘土質シルト、下部がグレイ化した緑灰色粘土などの水成堆積層である。

堆積土下部からは、中世陶器の破片(第 67 図-1)が出土した。



第 65 図 3 区の遺構平面図

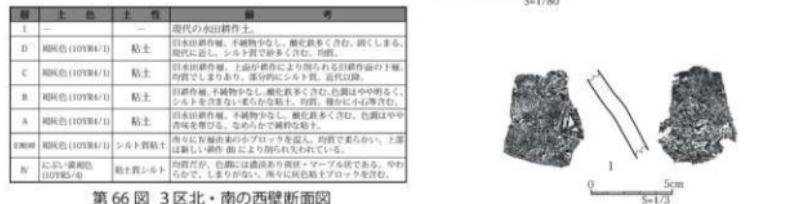
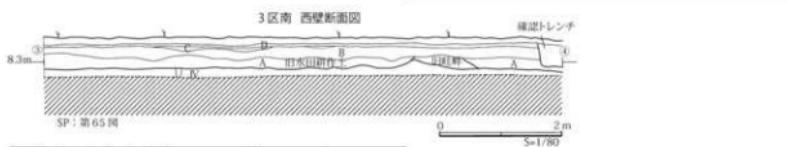


SD305

層	土色	土性	場所
1	褐灰色 (10YR4/0)	シルト質粘土	小石、粗砂を含むやシルト質粘土。粗砂を多量に含み、固くまる。
2	暗褐色 (10G4/1)	粘土	均質で軟らか粘質土。
3	褐色 (10YR4/0)	粘土	軟弱でシルト質である。
4	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	軟弱でシルトは含まれない。粗砂を多く含み、層があらわせる。
5	暗褐色 (10G4/1)	粘土	均質で軟弱な粘質土。
6	暗褐色 (10G4/1)	粘土	軟弱が強めが強い。表面で不純物、堆積物は含まれない。

SD301

層	土色	土性	場所
1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト質粘土	土質は軟らかで、比較的新しい土質の印象。
2	褐色 (10YR4/1)	シルト質粘土	に高い黃褐色粘土 (10YR5/6)のブロック (φ~10cm)を50%以上含む。軟弱で粗粒。
3	褐灰色 (10YR4/1)	シルト質粘土	に高い黃褐色粘土 (10YR5/6)のブロック (φ~1cm)を2~3%と僅かに混入する。軟弱、粗粒少ない。



第66図 3区北・南の西壁断面図

第67図 3区の出土遺物

名	三種	直標/期	所存	法 目印	直標	直 標高	管 理	写真回数	登記
1	中世陶器 瓢	SD205 墓5	体部	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	14 - 13	13

## ②その他の遺構と遺物

3区北のSD301、SD302はSD205の東西方向の溝跡（水路跡）とほぼ重複しており、いずれもSD205の堆積土を切っている。両溝跡の上部は近・現代の旧水田耕作土に覆われているが、これらの溝跡も同様に新しい時期のものとみられる。

3区南では旧水田の耕作土（3枚）や東西方向の畦畔が検出されたのみで、最下部の水田耕作土（現地表より-40cm）からは近代以降の磁器碗の破片（写真図版15-8）が出土した。旧水田跡は、いずれも近・現代のものとみられる。

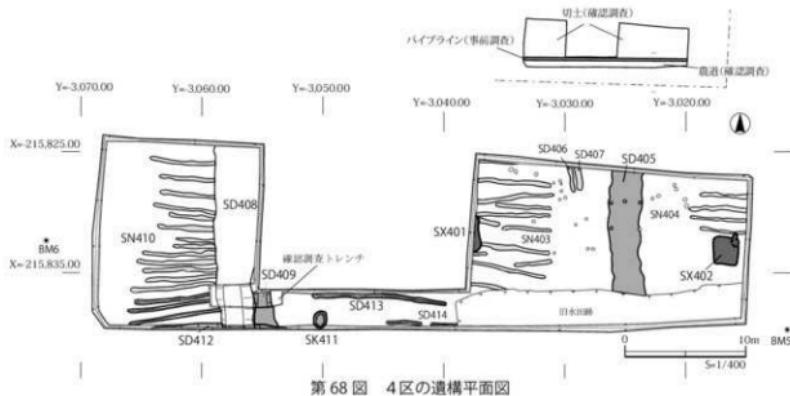
## 【4区】(第 68 ~ 75 図、写真図版 11 ~ 13)

### (1) 検出状況

現況は休耕田である。調査区は自然堤防の北縁付近にあたり、この地点あたりを境に北へ向かって徐々に傾斜する。調査深度は -50 ~ 60cm ほどである。

遺構は、現表土面より -40 ~ -50cm ほどのIV層上面で検出した。遺構には堅穴状遺構 2 基、土坑 1 基、溝跡 6 条、小溝状遺構群などがある(第 68 図)。これらの遺構のうち、SX401・SX402 堅穴状遺構、SK411 土坑(底面に焼土・炭化物が薄く堆積:写真図版 12-⑦・⑧)、SD405・SD409・SD412・SD413 溝跡、SN403・SN404・SN410 小溝状遺構群などは、出土遺物や堆積土の状況などから古代の遺構と考えられる。それぞれの遺構の新旧関係からすると、東西方向の小溝状遺構群(SN403・SN404・SN410)が最も古い段階のものである。なお、調査区東側の南壁沿いでは近代以降とみられる旧水田跡が確認されている。

遺物は、堅穴状遺構や小溝状遺構群から古代の土師器(甕ほか)・須恵器(环ほか)、赤燒土器(环)、Ⅲ層から古墳時代前期(壺ほか)・中~後期の土師器(环ほか)、古代の土師器(环・高台付环ほか)・須恵器(环・甕ほか)、赤燒土器(环)などが少量出土した(第 75 図)。なお、II 層(黄褐色シルト:洪水層か)からは近代以降の磁器片(写真図版 15-7)が出土している。



第 68 図 4 区の遺構平面図

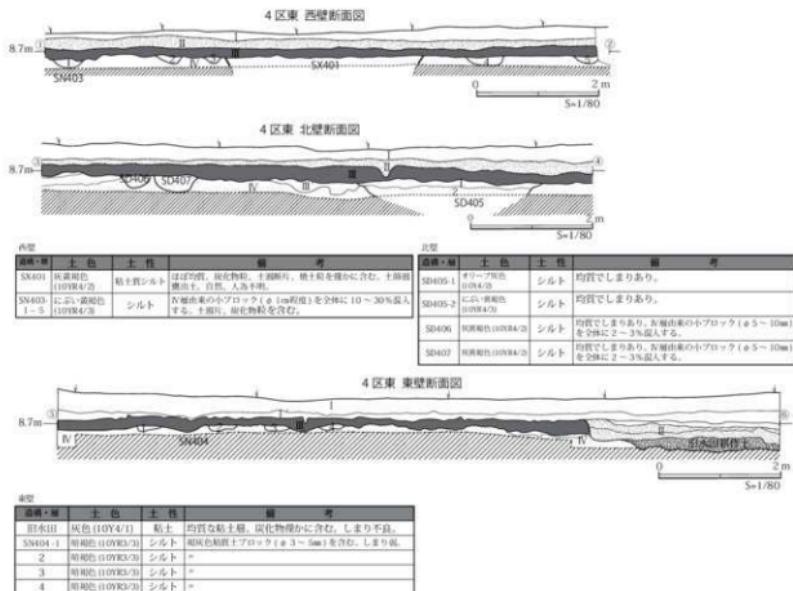
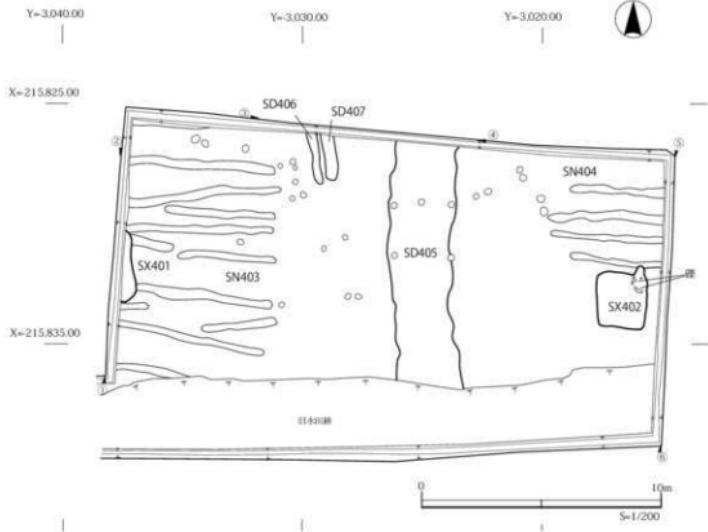
### (2) 検出遺構と遺物

#### ① 堅穴状遺構

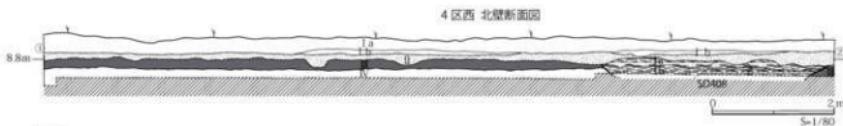
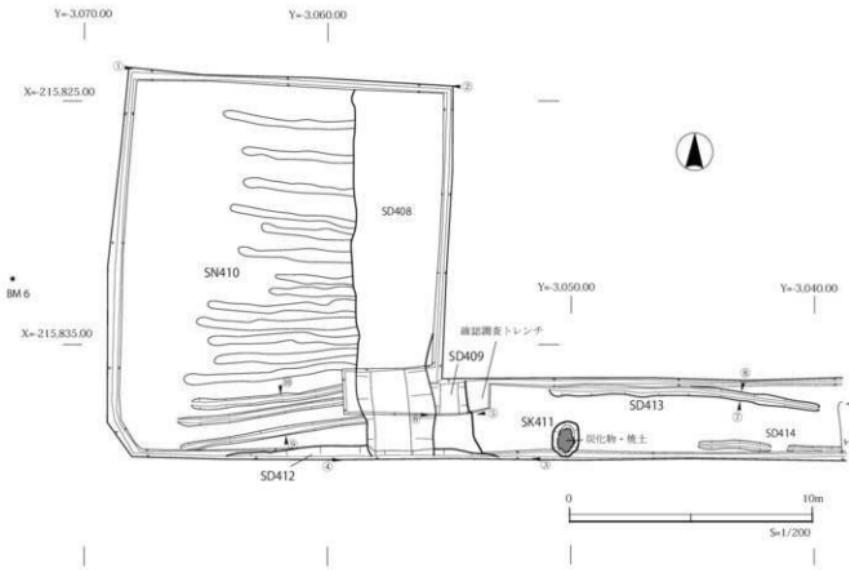
##### 【SX401】(第 69 図、写真図版 12-②)

調査区東側のIV層面で、東辺部の一部を検出した。SN403 小溝状遺構群と重複しているが、これよりも新しい。堅穴建物跡の可能性があるが、上面の確認のみで掘り下げは行っていないため、詳細は不明である。東辺は約 3.5 m ほどである。

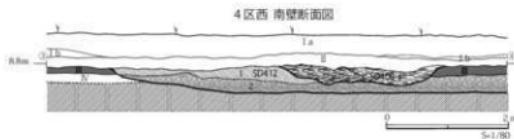
確認面の堆積土は灰黄褐色粘土質シルトで、この堆積土から古代の土師器甕(第 75 図-2)が出土した。



第 69 図 4 区東の遺構平面図と西・北・東壁断面図



層	土色	土性	備考
1a	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	均質でしまりあり。
1b	にじく・褐色(10YR4/8)	シルト	均質だが、色調に濃淡あり、やや斑状を呈する。
2	にじく・褐色(10YR4/8)	シルト	均質で、色調も單一である。



層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	均質でしまりあり、部分的に粘土化している。
2	にじく・褐色(10YR4/8)	シルト	均質ほど粘土化。しまりあり。

層	土色	土性	備考
1	にじく・褐色(10YR4/8)	シルト	均質でしまりあり、土塊細片を含む。
2	褐色(10YR4/2)	シルト	均質なシルトでしまりあり。

第70図 4区西の遺構平面図と北・南壁断面図

### [SX402] (第69図、写真図版12-③)

調査区東端で検出した。SN404 小溝状遺構群と重複し、これよりも新しい。上面の確認のみで掘り下げは行っていない。隕丸方形状を呈し、北東隅が張り出す。南辺は約 2.0 m、西辺は約 2.3 m

ほどである。北東隅の張り出し部には、被熱した長方形形状の角礫が弧状に巡っており、周辺には炭化物や焼土粒が分布していた（写真図版 12-③）。

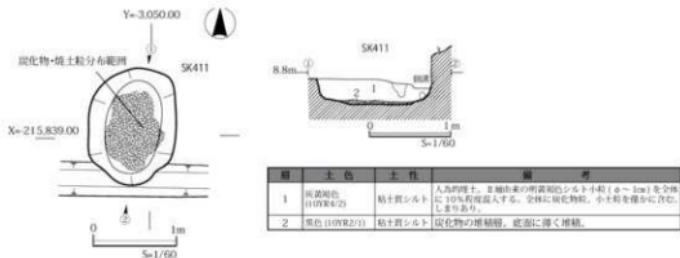
確認面の堆積土はにぶい黄褐色シルトで、堆積土からはロクロ調整の土師器甕（第 75 図-8）などが出土した。

## ②土坑

### 【SK411】（第 70・71 図、写真図版 12-⑦・⑧）

調査区中央の南壁付近で検出した。長軸約 1.4m、短軸約 1.0m の梢円形状を呈する。深さは 35cm ほどで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面に焼土・炭化物粒を多く含む層が 2~3cm ほどの厚さで堆積しており、その上部には灰黄褐色粘土質シルトの人为的な埋土が認められる。

遺物は、埋 1 層から赤焼土器甕（第 75 図-7）、土師器甕の小片が出土した。また、底面の焼土・炭化物層を採取し、フライ（5mm・2mm）にかけた結果、炭化米（写真図版 15-11）が比較的多く含まれていた（第 V 章第 2 節）。



第 71 図 SK411 土坑平・断面図

## ③溝跡

### 【SD405】（第 69 図）

調査区東側で検出した南北方向の溝跡。南側は旧水田跡（近代以降）に切られている。上面の確認のみで、掘り下げは行っていない。溝跡の幅は 2.5~2.8m ほどある。堆積土はオリーブ灰色シルト～にぶい黄褐色粘土質シルトで、遺物は出土していない。

### 【SD408】（第 70 図、写真図版 12-④・⑤）

調査区西側で検出した南北方向のやや規模の大きい溝跡。SD409、SD412 と重複し、これよりも新しい。南側では上幅約 2.7~3.0m ほどであるが、北へ向かうに連れて広くなる。深さは 20~25cm と浅く、断面形は浅い皿状を呈する。

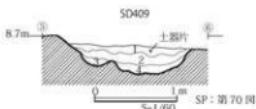
堆積土は大きく 2 層あり、上部は褐色シルト、下部はにぶい黄褐色シルトが主体である。南側を一部掘り下げたが、遺物は出土していない。

### 【SD409】（第 70・72 図、写真図版 12-④・⑤）

調査区西側の SD408 の東際で、SD408 とほぼ並行するように検出した。SD408、SD412 よりも古い。一部のみ掘り下げた。上幅約 1.5~1.6m、底幅約 1.0~1.1m、深さ 35cm~40cm ほどあり、

断面形は皿状であるが、底面はやや凹凸がある。

堆積土は4層に細分され、暗褐色シルトを主体とするが、下層にはIV層起源の黄褐色シルトブロックが目立つ。遺物は埋土3~4層から土師器壺の小破片などが少量出土した。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色(HDYR3/2)	シルト	ほぼ均質でしまりあり。土壠内、地盤を構成に含む。(1% 12%)
2	暗褐色(HDYR3/2)	シルト	ほぼ均質でしまりあり。地盤の小ブロック(φ~2cm)を僅かに混入する。(1%)
3	暗褐色(HDYR3/2)	シルト	ほぼ均質でしまりあり。地盤に地盤の小ブロック(φ~3cm)を多く含む。(20%)
4	暗褐色(HDYR3/2)	シルト	ほぼ均質でしまりあり。全体に地盤の小ブロック(φ~3cm)を多量に含む。(50%)

第72図 SD409溝跡断面図

#### 【SD412】(第70図、写真図版12-⑤・⑥)

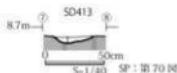
調査区西側の南壁際で検出した東西方向の溝跡。SD408、SD409と重複し、SD409より新しく、SD408より古い。部分的な検出のため規模などは不明であるが、検出した壁際沿いの範囲を掘り下げたところ深さは40cm以上あり、堆積土は2層に分けられた。

遺物は、埋土2層から赤焼土器環の小破片が出土したのみである。

#### 【SD413】(第70・73図)

調査区中央やや西寄りで検出した東西方向の溝跡である。総長11mほど残存するが、本来は東西方向へさらに延びていたものみられる。上幅約35~40cm、底幅10~15cm、深さ5~10cmほどで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は暗褐色シルトの1層のみである。

遺物は、土師器環(第75図-3)や赤焼土器環(第75図-6)などが出土した。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色(HDYR3/2)	シルト	左端出来の半段(φ~10cm)を全体に混入(10%)する。しまりあり。

第73図 SD413溝跡断面図

#### ④小溝状遺構群

##### 【SN403】(第69図、写真図版11-⑦)

調査区東側で検出した東西方向の12本の小溝跡で、方向がやや異なるものも含む。東端は概ねSD405の手前までで、西は調査区外へと延びている。検出総長は、最も長いもので約6mほどである。一部がSX401竪穴状遺構と重複し、これよりも古い。小溝跡の間隔にはやや幅があり、1mを超えるものもある。上幅は20~40cm、下幅15~20cm、深さ10~15cmほどである。断面形は浅い皿状を呈する。出土遺物はない。

##### 【SN404】(第69図、写真図版11-⑧)

調査区東端で検出した東西方向の4本の小溝跡である。西端は概ねSD405の手前までで、東は調査区外へと延びている。検出総長は4~4.6mほどである。最も南の小溝跡がSX402竪穴状遺構と重複し、これよりも古い。それぞれの小溝跡の間隔は50~70cmほどである。上幅は40~45cm、下幅20~25cm、深さ8~10cmほどで、断面形は浅い皿状を呈する。出土遺物はない。

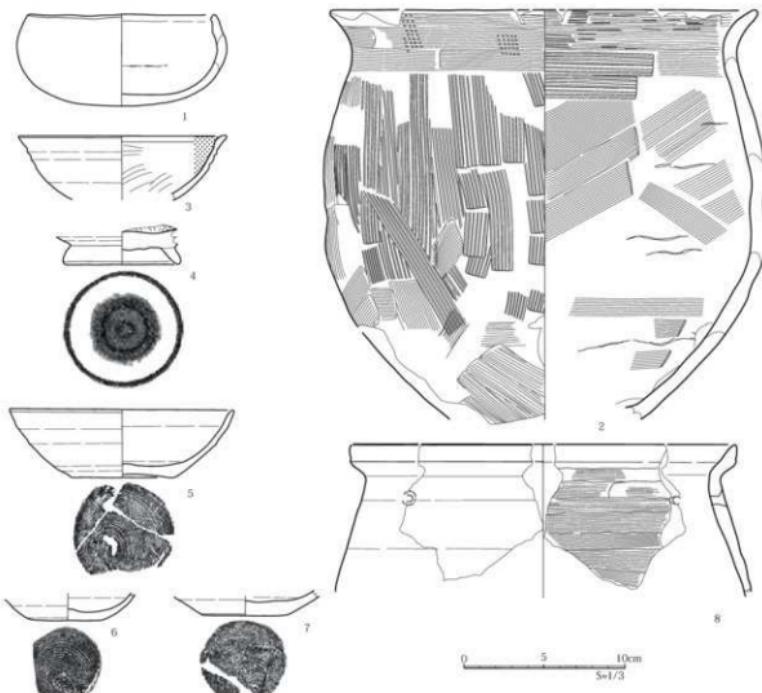
##### 【SN410】(第70図、写真図版13-①)

調査区西側で検出した東西方向の16本の小溝跡である。西端は調査区西壁から2~3m手前ま



第74図 SN410 小溝状遺構断面図

で、東側はSD408に切られており、その延びは不明である。検出総長は3~7.2mほどである。それぞれの小溝跡の間隔は10cm~1.1mと幅があり、南側にくらべて北側の幅が広い。上幅は20~25cm、下幅15~20cm、深さ5~7cmほどである。断面形は浅い皿状を呈する。遺物は、土師器小片が数点出土したのみである。



No.	器種	遺構/層	残存	法寸 (cm)			特徴	写真順	管見
				口径	底径	高さ			
1	土師器 瓢	Ⅲ	口縁~底部 (12.0)	—	—	5.6	外内共(全体マツメ)	14~14	21
2	土師器 瓢	SX401	口縁~底部 (18.2)	—	—	外:口横ナデ 内:口横ナデ	14~18	14	
3	土師器 瓢	SD413	口縁部 (13.0)	—	—	外:ロクロナデ 内:ヘラミガキ・黒色斑剥	14~16	16	
4	土師器 高台付环	Ⅲ	底部	—	7.4	—	外:ロクロナデ 底:切り離し不明 高台貼り付け→ナデ 内:ヘラミガキ→黒色斑剥	14~15	20
5	赤釉土器 瓢	Ⅲ	口縁~底部 (12.0)	(3.4)	4.2	—	外:ロクロナデ 底:口輪切引 内:ロクロナデ	14~19	19
6	赤釉土器 瓢	SD413	底部	—	(4.5)	—	外:ロクロナデ 底:口輪切引 内:ロクロナデ	14~20	17
7	赤釉土器 瓢	SK411	底部	—	5.2	—	外:ロクロナデ 底:口輪切引 内:ロクロナデ	14~21	18
8	土師器 瓢	SX402	口縁部 (24.0)	—	—	—	外:ロクロナデ 脈部に焼成前穿孔 (径9mm) 内:ナデ	14~17	15

第75図 4区の出土遺物

## ⑤その他の遺構と遺物

調査区東側の北壁付近に並行する2本の北東方向の溝跡（SD406・SD407）がある（第69図）。いずれも検出長1.8m、幅50～70cmほどである。調査区中央南壁付近の東西方向の溝跡（SD414）は、小溝状遺構群の溝跡と幅や深さなどが類似する。

調査区東側には径10～20cmほどの小ピットが点在するものの配置に規則性はない、人為的な遺構とは見られない。南壁側には近代以降の旧水田跡が広がる。

遺物は、Ⅲ層などから土師器环（第75図-1）、高台付环（第75図-4）、須恵器環、赤焼土器环（第75図-5）、中世陶器片などが少量出土した。

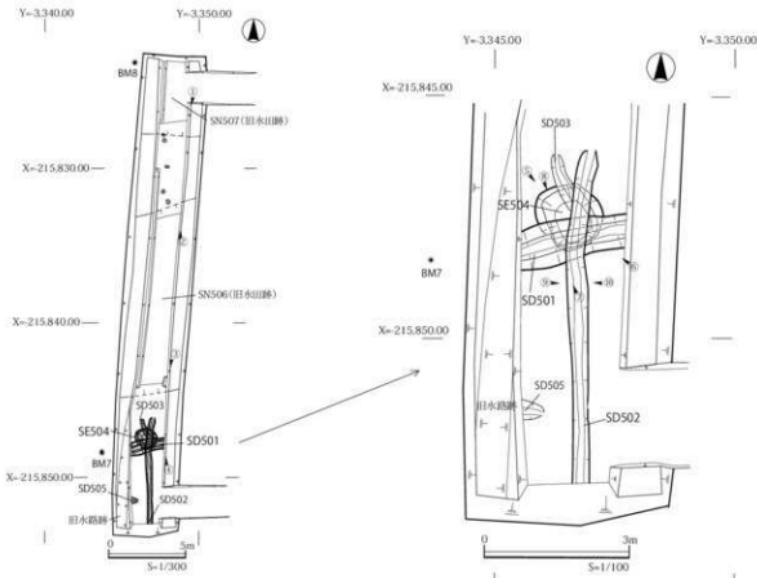
## 【5区】（第76～81図、写真図版13）

### （1）検出状況

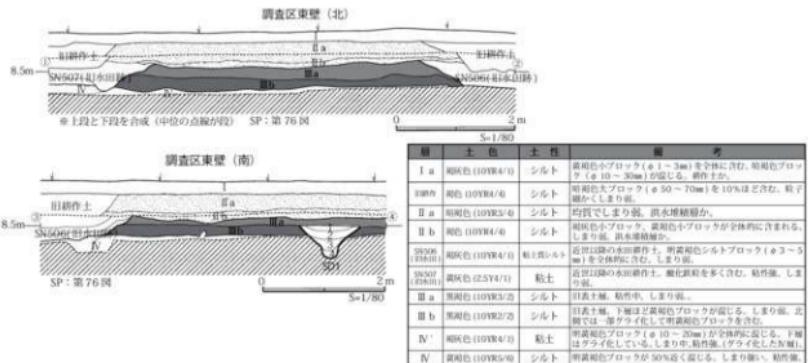
現況は水田である。自然堤防の北縁付近にあたり、この付近から北へ向かって徐々に傾斜する。調査深度は-100cmほどである。

遺構は、現表土より-100cmほどのIV層上面で検出した。遺構には、井戸跡1基、溝跡4条、ピットなどがある（第76図）。これらの遺構は、古墳時代中期かこれ以後に属するとみられる。

遺物は、SD501溝跡から古墳時代中～後期の土師器环（完形）（写真図版13-⑤）、SE504井戸



第76図 5区の遺構平面図



第77図 5区東壁断面図

跡からも同時期とみられる土師器（瓢ほか）が出土した。また、Ⅲ層を中心として、土師器片が少量出土した。なお、調査区中央の旧水田跡からは近世期の陶器片、寛永通宝などが出土している。

## (2) 検出遺構と遺物

### ①井戸跡

【SE504】(第76・78図、写真図版13-③・④)

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡。SD501・SD502溝跡などと重複し、これらよりも古い。直径1mほどの円形で、深さは1.4mほどある。堆積土は6層に細分されるが、上層は暗褐色～黒褐色粘質シルト、中層が黄褐色～灰黄褐色シルト質粘土、下層がグライ化した黒色～オリーブ黒色シルト質粘土などである。

遺物は、下層から土師器縹の底部（第81図-3）やその他の小破片が少量出土した。

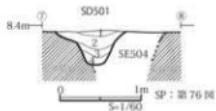


第78図 SE504 井戸跡断面図

### ②溝跡

【SD501】(第76・79図、写真図版13-⑤・⑥)

調査区南側で検出した東西方向の溝跡。SD502溝跡・SE504井戸跡と重複し、SD502より古く、SE504より新しい。両側とも調査区外へと延びている。上幅90cm、底幅20~25cm、深さは40



層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	粘性中。しまりやや弱。
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	粘性中。しまりやや強。地山部(±1~2m)ごく少許含む。
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	粘性やや強。しばり強。
4	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	粘性やや強。しばり強。

第79図 SD501溝跡断面図

~45cmほどである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は4層に細分されるが、いずれも黒褐色粘土質シルトを主体とする。

遺物は、底面近くから古墳時代中～後期の土師器環(第81図-1)のほか、土師器甕(第81図-2)などが出土している。

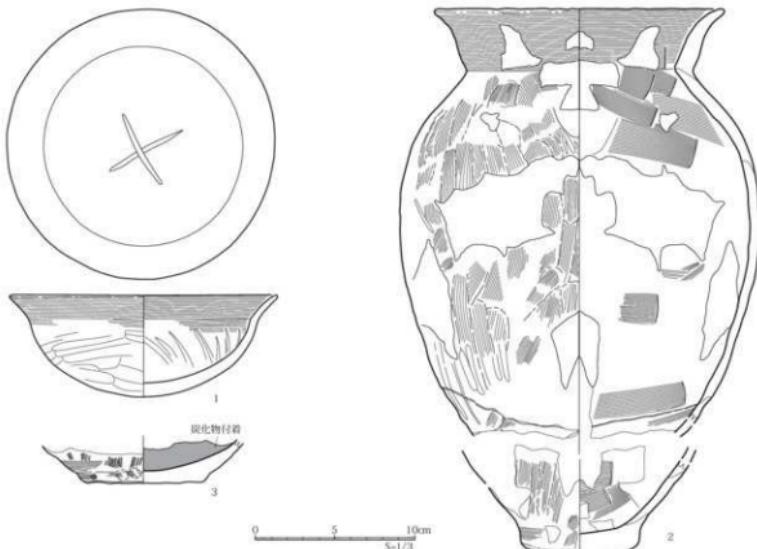
#### [SD502](第76・80図、写真図版13-⑦)

調査区南側で検出した南北方向の溝跡。SD501溝跡・SE504井戸跡と重複し、これらよりも新し



層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	粘性中。しまりやや弱。10YR2/2と黒褐色粘土質シルト(粘性中。しまりやや強)の小ブロックを含む。

第80図 SD502溝跡断面図



No.	器種	遺構/番	性/存	法 面積 m <sup>2</sup>			特 徴	写真図版	目録
				口部	底部	周辺			
1	土師器 環	SD501	完形	16.8	—	6.4	外:[口]ヨコナデ「体～底」ヘラミガキ 内:[口]横ナデ「体～底」ヘラミガキ(鉛文瓦) 底面に十字の割目	15-1	22
2	土師器 甕	SD501	口縁～体部 底部	(18.2)	—	(7.4)	外:[口]ヨコナデ「体～下部ナデ」内:[口]ヨコナデ「脚」ヘラミガキ(鉛文瓦) 底面に十字の割目	15-2.3	23
3	土師器 甕	SE504 6号	底部	—	(6.0)	—	外:ハケヌメナデ 内:全面灰化物付着	15-4	24

第81図 5区の出土遺物

い。南側はさらに調査区外へと延びている。上幅35～40cm、底幅15～18cm、深さ6～10cmほどで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

### ③その他の遺構と遺物

調査区南側にはごく一部が検出されたSD503・SD505溝跡がある（第76図）。SD503は深さ5cm、SD505は深さ30cmほどの溝跡である。

調査区中央～北側には近世期のものとみられるSN506・SN507水田跡がある。SN507水田耕作土のグライ化した褐灰色粘土層からは、近世期の陶器破片や寛永通宝（写真図版15-9）などが出土している。

## 第6節 小括

### （1）遺構・遺物の分布状況と遺構の時期

宮前遺跡及び西館館跡の範囲（隣接地を含む）に設定された今回の1～5区の調査区で検出された遺構は、4区は比較的多かったものの、各区を通して全体的に希薄な分布である。各調査地点は地形的に自然堤防の北線に位置し、遺跡の中心からは外れた場所に当たることから、このような遺構の分布状況になっていると考えられる。遺跡の中心部は、現在、民家などが点在する南側の微高地（写真図版6-1）と推定される。

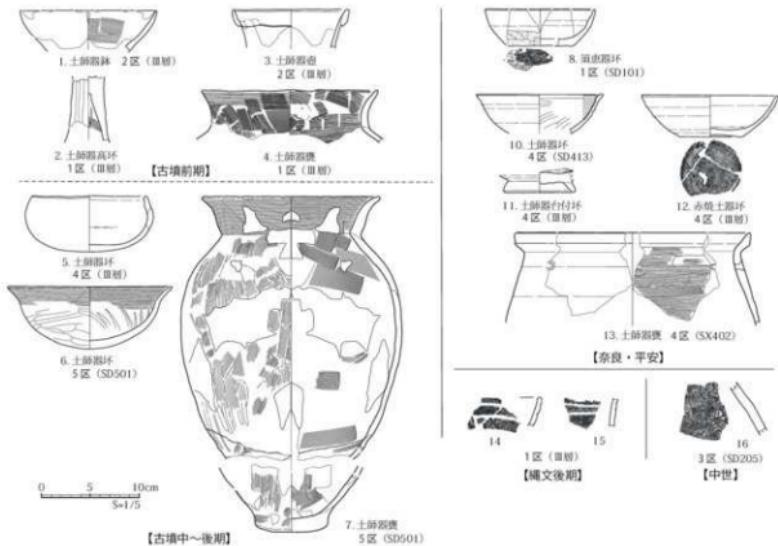
遺物も量的には少ないが、縄文時代、古墳時代前期・中～後期、奈良・平安時代、中世の各時代にわたる遺物（第82図）が出土している。

出土遺物や堆積土の状況などからすると、今回の発掘調査で検出した遺構は、古墳時代中～後期、奈良・平安時代に属するものとみられるが、それぞれの遺構に伴う遺物は少なく、各遺構の時期の限定は難しい。

縄文時代に属するとみられる明確な遺構は検出されていないが、東側の1区では縄文土器片（後期）（第82図-14・15）が少量出土しており、この付近から検出されたSX105（焼土・炭化物集中地点）はその可能性がある。1区付近（南側）には縄文時代の遺構が分布する可能性がある。

古墳時代とみられる遺構は、西側の5区：SD501溝跡、SE504井戸跡などである。SD501からは中～後期の土師器壺・甕（第82図-6・7）などが出土しており、両遺構ともこの時期のものと考えられる。一方、1区・2区及び4区からは前期～中期の土師器壺・高壺などの破片（第82図-1～5）が少量出土しているものの、明確な遺構は検出されていない。ただ、こうした遺物の散布が若干みられるので、この付近にも当該期の遺構が分布する可能性がある。

奈良・平安時代の遺構とみられるのは、1区：SD101溝跡、2区：SB203掘立柱建物跡、SE202井戸跡、SD204溝跡、4区：SX401・SX402竪穴状遺構、SK411土坑、SD405・SD409・SD412・SD413溝跡、SN403・SN404・SN410小溝状遺構群など、4区を中心に比較的多い。ただ、掘り下げを行った遺構はごく一部に限られており、遺物も少ないので、それぞれの遺構の時期の限定は難しい。4区SK411は底面から炭化米が出土した土坑であるが、放射性炭素年代測定の結果



第 82 図 1 区～5 区の主な出土遺物

は 776～949calAD であった（第 V 章第 3 節）。SD412・SD413 では 10 世紀頃とみられる赤焼土器底（第 82 図-12 ほか）が出土していることから、中にはこの時期まで下る遺構も含まれるようである。

1 区:SE104 井戸跡、SD103 溝跡、2 区:SD201 溝跡、5 区:SD502 溝跡などは、古墳時代～奈良・平安時代に属するとみられるが、やはり時期の限定は難しい。

中世の遺構は確認されていない。ただし、陶器片の出土が数点みられた。1 点（第 82 図-16）は近世以降の 3 区水路跡（SD205）からの出土であり、流れ込みの遺物と考えられる。

1 区の焼骨（成人男性）を含む SX102 土坑墓は、検出状況や放射性炭素年代測定の結果（第 V 章第 3 節）などから近世以降のものとみられる。

なお、1 区～5 区では、近世以降の旧水田跡・旧水路跡などが重複して多く確認されている。この付近では、近世期の新田開発以降、継続して水田耕作が行われていたことがうかがわれる。ただし、この地区は阿武隈川及び白石川という大規模な河川の合流地点であることから洪水に見舞われることもたびたびあったようで、近代以降では明治 43 年や大正 2 年などに発生した大水害が知られている（柴田町史編さん委員会編 1982・1989）。Ⅲ層（旧表土：黒褐色土）の上位に堆積する、Ⅱ層：黄褐色シルト層（水成堆積層）はこうした水害時の堆積物と考えられる。水害地帯のため、この一帯には“天保土堤”や“七草堤”といった小堤防も構築されており、明治 23 年及び明治 40 年陸地測量部作成の地図にはこれらの堤のラインが描かれている。現在の南北方向に延びる小堤防（写真図版

6-3)の位置にも土手状の高まりのライン(七草堤)が描かれているが、これが現存の小堤防下で確認された、以前の旧小堤防(土手:SX212)に相当する可能性が高い。この小堤防は、大正期の大水害の後に改修されていることから、これが3区沿いの現存する小堤防とみてよいだろう。

## (2) 宮前遺跡の範囲と年代

すでに述べたように、今回の調査地点は地形的にみると東西方向に延びる自然堤防の北縁に当たり、この付近から北へ向かって徐々に低くなっていく。自然堤防の南縁には東西方向の旧河道が認められる。今回の調査区ではいずれも遺構の分布がまばらで、遺物も少量の出土にとどまっている。こうした状況からも、遺跡の中心域からは外れた周縁部にあたるものとみてよいと考えられる。遺跡の中心部は、現在、民家や畠地が点在する南側の微高地上になるものと推測される(第83図)。

検出された遺構は、古墳時代中～後期及び奈良・平安時代の時期に位置づけられるものである。ただし、出土遺物にはこれらの時期のほかに縄文時代(後期)や古墳時代前期、中世の遺物も少量ながら含まれている。これらの時代の遺構もおそらく南側の微高地に分布しているものと考えられる。

各調査区の出土した遺物や遺構の分布からみると、縄文時代(後期)は東側の1区付近(1区)、古墳時代前期は東側の1・2区付近、古墳時代中～後期は中央～西側の4・5区付近、奈良・平安時代には中央～東側の1～4区付近にやや偏在している。こうした傾向から、時代によって居住域がやや異なっていたものと推測される。

なお、調査前の宮前遺跡の登録範囲は西館館跡の東側に接する一角とみられていたが、今回の調査結果及び地形等を踏まえて、第83図のように遺跡範囲を拡大し、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の複合遺跡として把握しておくことが適切と考えられる。



第83図 宮前遺跡の範囲

(自然堤防・旧河道は国土地理院作成水地形分類図(1976～1978年)などをもとに作成)



1. 宮前遺跡・西館館跡周辺の空中写真 国土地理院(平成25年撮影: CT0201311-C19-36) 0 100m



2. 調査前の1区(奥の畠地)・2区(手前の水田)(西より) 3. 3区沿いの南北方向に延びる七草塙(土手)(南より)



4. 昭和22年の宮前遺跡・西館館跡周辺の空中写真 国土地理院(昭和22年撮影: USA-R433-46)

#### 写真図版6 宮前遺跡・西館館跡周辺の空中写真ほか



①. 1区全景(南西から)



②. 1区北東部全景(南から)



③. 1区東部全景(西から)



④. 1区北壁(南東から)



⑤. 1区北東部北壁(南西から)



⑥. 1区東部北東隅深堀区(南から)



⑦. 1区SD101溝跡(南東から)



⑧. 1区SD101溝跡断面(南から)

写真図版7 1区(1)遺構



①. 1区 SD103 自然流路跡 (南から)



②. 1区 SD103 自然流路跡断面 (北から)



③. 1区 SE104 井戸跡 (東から)



④. 1区 SX102 骨片出土状況 (南から)



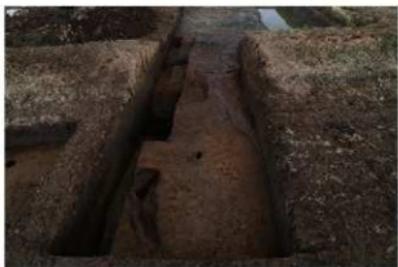
⑤. 1区 SX102 底面赤変状況 (南から)



⑥. 1区 SX105 断面 (南から)



⑦. 2区 全景 (東から)



⑧. 2区 西側全景 (西から)

写真図版8 1区(2)・2区(1)遺構



①. 2区西部北壁断面（南東から）



②. 2区 SB203 挖立柱建物跡（東から）



③. 2区 SB203 挖立柱建物跡 P1 断面（南西から）



④. 2区 SB203 挖立柱建物跡 P2 断面（南東から）



⑤. 2区 SE202 井戸跡断面（南から）



⑥. 2区 SE202 井戸跡（西から）



⑦. 2区 SD201 自然流路跡（北から）



⑧. 2区 SD201 自然流路跡断面（北から）



①. 2区 SD204 溝跡(南から)



②. 2区 SD204 溝跡断面(南から)



③. 2区・3区北土手・SD205 溝跡(南から)



④. 2区土手断面(南西から)



⑤. 2区 SD205 溝跡断面(南から)



⑥. 2区 SD206 溝跡(南から)



⑦. 2区 SD207～209 溝跡(南から)



⑧. 2区 SX210(西から)



①. 3区北全景(南から)



②. 3区南全景(南から)



③. 3区南南西隅西壁(東から)



④. 3区北SD301・302・205溝跡・SX303(南東から)



⑤. 3区北SD301・302・205溝跡断面(東から)



⑥. 4区西部全景(南西から)



⑦. 4区東部全景(西から)



⑧. 4区東部全景(東から)

写真図版 11 3区・4区(1) 遺構



①. 4区南東隅東壁(北西から)



②. 4区 SX401 竪穴状遺構(北東から)



③. 4区 SX402 竪穴状遺構(東から)



④. 4区 SD408・409 溝跡(南から)



⑤. 4区 SD408・409・412 溝跡断面(北から)



⑥. 4区 SD412 溝跡(東から)



⑦. 4区 SK411 断面(西から)



⑧. 4区 SK411 底面炭化物分布状況(北西から)



①. 4区 SN410 小溝状遺構群（東から）



②. 5区 全景（南から）



③. 5区 SE504 井戸跡断面（南西から）



④. 5区 SE504 井戸跡（南西から）



⑤. 5区 SD501 溝跡断面・遺物出土状況（東から）



⑥. 5区 SD501 溝跡（東から）



⑦. 5区 SD502 溝跡断面（南から）



⑧. 5区 SD505 溝跡（東から）

写真図版 13 4区（3）・5区遺構



写真図版 14　出土遺物（1）



写真図版 15 出土遺物 (2)

## 第V章 自然科学分析

### 第1節 宮前遺跡出土人骨の鑑定

(株) 加速器分析研究所

#### 1 試料

宮前遺跡は、宮城県柴田郡柴田町に所在し、阿武隈川と白石川が合流する沖積地の自然堤防上～低地に立地する。1区 SX102 は、白色化した骨片、炭化物、焼土粒を多量に含む土坑で、底面は赤変・硬化している。堆積土の状況から人為的に埋め戻されたと考えられている。出土した骨はいずれも非常に小さな骨片で、部位の特定に至らないものも多い。観察できた部位について鑑定を行い、表1にまとめて記した。なお、SX102 から出土した炭化物を対象に放射性炭素年代測定が実施されている（第V章第3節参照）。

#### 2 人骨鑑定

確認できた骨は全て火葬された人骨と判断される。部位まで確認できた骨の特徴に加え、細片を含めて多孔質な人骨の特徴が観察された。ただし、殆どの骨は径3cm以下の骨片で、詳細な同定は困難を極めた。一部の四肢骨片は火葬の際に起きる割れのうち横割れのみを呈しており、一度のみ焼かれ火を受けた状態と見られる。そのため本人骨は火葬された後に、そのまま埋葬された可能性がある。

確認された部位は、頭蓋骨片、下顎骨片、指骨片、四肢骨片である。頭蓋骨片は、前頭骨、頭頂骨、上顎骨、下顎骨のそれぞれ一部である。頭頂骨片の外板・内板いずれも矢状縫合に開放状態が認められるため、20歳後半から30歳前半の年齢である可能性を指摘できる。また、臼歯部の歯槽部とその周辺が確認できる。第二大臼歯と第三大臼歯の萌出する歯槽部が破片ではあるが確認できることから、18歳以上の成人と推定される。指骨は破片であり、中節骨と末節骨が認められる。末節骨は第3末節骨もしくは第4末節骨である。四肢骨片はどれも細かく割れており、部位を特定でき且つ記載可能な試料は限られる。記載可能な四肢骨は、大腿骨骨頭、不明骨頭である。

同定された部位別の個数、推定年齢は1個体として矛盾しないが、出土した骨がすべて同一個体かどうかは不明である。

表1 宮前遺跡の人骨鑑定

地区	遺構	埋下部位	学名/和名	部位	部分	状態	個数	左右	備考
1区	SX102	I	<i>Homo sapiens</i> ヒト	頭蓋骨	冠状縫合	破片	1	右	耳の上切り
				頭頂骨	冠状縫合	破片	1	—	
				頭蓋骨	矢状縫合	破片	2	—	外板・内板ともに開放状態
				上顎骨	口蓋部	破片	1	—	
				下顎骨	歯 II	破片	1	左	
					切歯	破片	1	左	
					大臼歯	破片	2	—	同一個体
				頭蓋骨		破片	29	—	結合部あり(2)
				下顎骨	下顎枝	破片	1	右	やや上方
					歯槽部	破片	1	右	第2大臼歯と第3大臼歯の間
				上顎骨	歯 小臼歯	根尖	1	—	
					第2大臼歯	根尖	1	—	
				上顎骨・下顎骨	歯	破片	1	—	上下不明
				指骨	中節骨	破片	1	—	
					末節骨	破片	1	左	第3or第4
				大腿骨	骨頭	破片	1	—	
				四肢骨	骨頭	破片	3	—	
				部位不明		破片	16	—	
						破片	(+)		121.08g

### 3まとめ

宮前遺跡 SX102 出土の焼骨片は、鑑定の結果全て人骨と判断された。頭頂骨片から推定される年齢は 20 歳後半から 30 歳前半、臼歯部の歯槽部から推定される年齢は 18 歳以上の成人である。推定年齢は 18 歳以上 30 歳前半の成人と判断できるが、すべての焼人骨片が同一個体であるかは不明である。なお、火葬時の焼成温度はあまり高温ではないが、全体的に同じ温度で焼成された可能性があり、焼き斑はない。また、火葬の際に起きる割れは横割れのみが確認できるため、火を受けた回数は 1 度のみの状態であり、火葬後にそのまま埋葬された可能性がある。

なお、人骨鑑定は一般社団法人文化財科学研究センターの協力を得て行った。

また、鑑定にあたり京都大学大学院医学研究科附属先天異常標本解析センターの橋本裕子氏に助言を頂いた。記して感謝申し上げる。

#### 参考文献

Brothwell, D.R. 1981 *Digging up Bones*. Cornell University Press. 208pp.

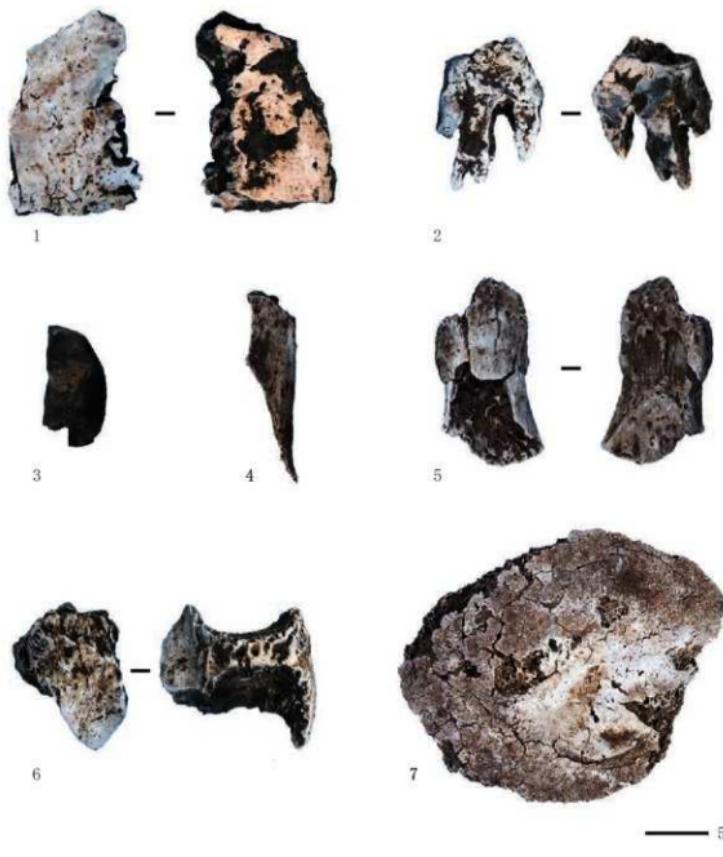
藤田恒太郎 1949『歯の解剖学』金原出版 257pp

橋本裕子・馬場悠男 2002「人骨の分析」『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書』八千代市教育委員会

橋本裕子 2006.3「第2節 カイト火葬墓出土人骨」『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書 - 堂ヶ洞古墳群、三ヶ

原古墳群、カイト古墳群、物干山遺跡、カイト遺跡、袖木洞・布賀利神社遺跡 -』岐阜県大野町教育委員会

石田英実・橋本裕子 2008.3「敏満寺石仏谷墓跡出土人骨」『敏満寺遺跡 - 第2次調査 -』多賀町教育委員会



1.頭蓋骨 前頭骨 冠状縫合 破片 右 2.頭蓋骨 頭頂骨 矢状縫合 破片 3.頭蓋骨 上顎齒 II 破片 左 4.指骨 中節骨  
破片 5.指骨 末節骨 破片 左 6.下顎骨 齒槽部 破片 右 7.大腿骨 骨頭 破片

图版1 宫前遺跡出土人骨 (1区 SX102)

## 第2節 宮前遺跡出土炭化種実の同定

(株) 加速器分析研究所

### 1 試料

宮前遺跡は、宮城県柴田郡柴田町に所在し、阿武隈川と白石川が合流する沖積地の自然堤防上～低地に立地する。本遺跡の4区において土坑SK411に炭化種実の集積が確認されたため、これら種実の同定をおこなった。なお、これらの種実のうち炭化米1粒を対象に放射性炭素年代測定が実施されている（第V章第3節参照）。

### 2 分析方法

炭化種実は、水洗選別された状態で供された炭化物を双眼実体顕微鏡で観察した。

### 3 結果

同定の結果を表1に示す。試料はクリ炭化子葉とイネの炭化胚乳に同定された。

以下に同定の根拠となる形態記載をおこなう。

#### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

高さ8mmの小さい破片で、全体がやや湾曲し、表面にはやや深い波打った縦方向に伸びる大きなしわがある。内面はややへこむ。

#### ・イネ (*Oryza sativa* L.)

高さは4.0mm～5.3mm、穎があるものは梢円形で、表面が葺瓦状の網目で覆われている。胚乳の表面は平滑ないし穎の痕跡が薄く残り、縦方向に2本程度の稜がある。下端一方には胚が脱落し、斜めに切れた痕跡がある。

表1 宮前遺跡 SK411 出土炭化種実

分類群名	出土部位	個数	備考
クリ	炭化子葉破片	1	
	炭化胚乳頸付着	44	年代測定試料
	炭化胚乳	29	
	炭化胚乳不熟	29	
	炭化胚乳焼け膨れ	5	
	炭化胚乳破片	76	
イネ			

### 4 考察

イネは穎が付着したものが半数ほどで、胚乳はしいな(不熟種子)に近いもののがかなり含まれていたことから、廃棄対象のイネが焼却された残りと考えられる。クリの破片も廃棄物としてイネとともに焼却されたと考えられる。

なお、種実同定は古代の森研究室の協力を得て行った。



1. クリ、炭化子葉破片 2. イネ、炭化胚乳頸付着 3. イネ、炭化胚乳 4. イネ、炭化胚乳不熟 5.6. イネ、炭化胚乳焼け膨れ スケールは 1mm

図版 1 宮前遺跡 SK411 出土炭化種実の顕微鏡写真

### 第3節 宮前遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

宮前遺跡は、宮城県柴田郡柴田町に所在し、阿武隈川と白石川が合流する沖積地の自然堤防上～低地に立地する。測定対象試料は、SX102 出土炭化物と SK411 出土炭化米の合計 2 点である（表 1）。炭化米は 1 粒を選んで測定した。なお、SX102 から出土した人骨の鑑定、SK411 から出土した炭化米を含む種実の同定が実施されている（第V章第1節、第2節参照）。

#### 2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸 - アルカリ - 酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 3 測定方法

加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、<sup>14</sup>C の計数、<sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C 濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 4 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の <sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 <sup>14</sup>C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (OyrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C 年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。<sup>14</sup>C 年代と誤差は、下 1 极を丸めて 10 年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の <sup>14</sup>C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の <sup>14</sup>C 濃度の割合である。

pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下1桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、No.1 が  $340 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.2 が  $1160 \pm 20\text{yrBP}$  である。历年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、No.1 が  $1498 \sim 1631\text{cal AD}$  の間に3つの範囲、No.2 が  $776 \sim 949\text{cal AD}$  の間に4つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも 70%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-200528	No.1	SX102(旧遺構名1区SX2)	炭化物 AAA	-29.62 ± 0.24	340 ± 20	95.86 ± 0.26
IAAA-200529	No.2	SK411(旧遺構名4区SK11)	炭化米 AaA	-26.46 ± 0.24	1,160 ± 20	86.51 ± 0.24

[IAA登録番号 : #A250]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、历年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

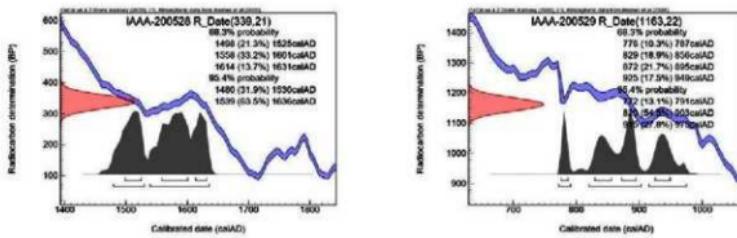
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用(yrBP)	1σ 历年年代範囲	2σ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-200528	$420 \pm 20$	$94.95 \pm 0.25$	$339 \pm 21$	$1498\text{calAD} - 1525\text{calAD} (21.3\%)$	$1480\text{calAD} - 1530\text{calAD} (31.9\%)$
				$1558\text{calAD} - 1601\text{calAD} (33.2\%)$	$1539\text{calAD} - 1636\text{calAD} (63.5\%)$
				$1614\text{calAD} - 1631\text{calAD} (13.7\%)$	
IAAA-200529	$1,190 \pm 20$	$86.26 \pm 0.23$	$1,163 \pm 22$	$776\text{calAD} - 787\text{calAD} (10.3\%)$	$772\text{calAD} - 791\text{calAD} (13.1\%)$
				$829\text{calAD} - 856\text{calAD} (18.9\%)$	$820\text{calAD} - 903\text{calAD} (54.5\%)$
				$872\text{calAD} - 895\text{calAD} (21.7\%)$	$915\text{calAD} - 975\text{calAD} (27.8\%)$
				$925\text{calAD} - 949\text{calAD} (17.5\%)$	

[参考値]

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon* 62(4), 725-757
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

図1 历年較正年代グラフ（参考）



## 第VI章 総 括

今回の調査は、柴田町中名生・下名生地区における農業競争力強化基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う発掘調査である。新たに設置予定の水路・パイプライン、田面切土等の区域を対象に、令和元年度（2019）に「清水遺跡」、「宮前遺跡」及び「西館館跡」において本発掘調査を実施した。当該遺跡はいずれも旧河川の流路に沿って形成された自然堤防上の北縁に立地しているが、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の各時期にわたる遺構・遺物を確認することができた。以下、各遺跡の調査成果の概要をまとめる。

### （1）清水遺跡

調査区のほぼ全区域で奈良・平安時代と近世以降の遺構・遺物を検出した。ただし、調査区の北側では遺構・遺物とも希薄である。

奈良・平安時代の遺構は調査区中央付近に比較的多く分布する。掘立柱建物跡や竪穴建物跡、竪穴状遺構、溝跡などがあるが、これらの遺構は出土した遺物の年代観から概ね9世紀頃とみられる。他に、少量ながら8世紀後半以前や10世紀代の遺物も含まれていることから、この時期の遺構も一部含まれている可能性がある。溝跡のうち、平行する東西・南北方向の溝跡（SD301・302、SD404・405ほか）は、道路の側溝跡の可能性も考えられる。

調査区南半部には近世以降の井戸跡が集中し、溝跡や掘立柱建物跡の一部とみられる柱穴などが分布する。付近からは江戸時代後期～明治時代前半の陶磁器類が多く出土していることから、この区域は近世以降の屋敷跡の一角であったものと考えられる。なお、この北縁の区画溝（濠）と想定される溝跡（SD417）の北側では、近代の水害によって形成されたとみられる水成堆積層（SX416）の広がりが認められた。

こうした遺構・遺物の分布状況などから、今回の調査地点は遺跡の北縁部に当たり、当遺跡の中心は南側の民家や畠地が点在する微高地（自然堤防）上にあると推測される。

### （2）宮前遺跡・西館館跡

各調査区で遺構を検出したが、各区を通して全体的に希薄な分布である。検出した遺構には、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土坑、小溝状遺構群などがある。これらは古墳時代中～後期、奈良・平安時代に属するとみられるが、それぞれの遺構に伴う遺物は少なく、各遺構の時期の限定は難しい。出土した遺物には、これらの時期のほかに縄文時代（後期）や古墳時代前期、中世の遺物も少量含まれている。

遺構や遺物の分布状況から見ると、縄文時代は東側の1区付近、古墳時代前期は東側の1・2区付近、古墳時代中～後期は中央から西側の4・5区付近、奈良・平安時代は中央から東側の1～4区付近にそれぞれ偏在している。こうした傾向から、時代によって居住域がやや異なっていたものとみられるが、今回の調査結果や基本層の検出状況及び現在の地形などを考慮すると、遺跡の中

心は今回の調査地付近ではなく、民家や畠地が点在する南側の微高地（自然堤防）上にあると考えられる。これらのことと踏まえ、宮前遺跡については従来の遺跡範囲を拡大し、時期も縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の複合遺跡として把握する必要があると考えられる。

なお、今回の調査区では、近世以降の水田跡・水路跡などが重複して多く確認されている。この付近では近世期の新田開発以降、継続して水田耕作が行われていたことが伺われる。3区には大正時代修築とみられる小堤防が現存しており、この小堤防下には、以前「七草堤」と呼ばれていた旧堤防の高まりも確認できた。

#### 引用・参考文献

- 角田市教育委員会 1997 『住社遺跡』角田市文化財調査報告書第19集
- 柴田町教育委員会 1978 『城と館』柴田町の文化財第10集
- 柴田町史編さん委員会編 1982 『自然災害・典型としての水害』柴田町史資料第六集  
1989 『柴田町史 通史編Ⅰ・Ⅱ』
- 仲田茂司 1997 「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』第4号 pp.109～121
- 福島県立博物館 1990 「東北の陶磁史」
- 福島県浪江町教育委員会 1989 「大堀・長井屋窯跡」浪江町埋蔵文化財調査報告書第五冊
- 藤沢 敦 1992 「引田式再論」『歴史』第79輯 pp.68～86
- 美里町教育委員会 2008 『成田遺跡』美里町文化財調査報告書第4集
- 宮城県教育委員会 1991 「合戦原遺跡」「合戦原遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第140集 pp.9～119
- 宮城県教育委員会・国土交通省東北地方整備局 2018 「山王遺跡VII・三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書 - 第3分冊』宮城県文化財調査報告書第246集
- 宮崎町教育委員会 1990 「切込窯跡・近世磁器窯跡の調査-」宮崎町文化財調査報告書第3集
- 村田晃一 1995a 「宮城県における6・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 pp.1～13  
1995b 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号 pp.47～72

## 報告書抄録

---

柴田町文化財調査報告書第4集

**清水遺跡・宮前遺跡・西館館跡**

-令和元年度：農業競争力強化基盤整備事業関連遺跡調査報告書Ⅰ-

令和3年3月18日印刷

令和3年3月23日発行

発行 柴田町教育委員会

宮城県柴田郡柴田町中央2丁目3-45

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

---